

宮城学院女子大学大学院

人文学会誌

第 18 号



2017年3月

英語・英米文学専攻
日本語・日本文学専攻
人間文化学専攻
生活文化デザイン学専攻

宮城学院女子大学大学院

人文学会誌

第 18 号



2017年3月

英語・英米文学専攻
日本語・日本文学専攻
人間文化学専攻
生活文化デザイン学専攻

目次

会津・新宮熊野神社『新宮雜葉記』諸本研究―付・翻刻紹介	いわき明星大学図書館蔵『新宮譜』	高島 一美	1
樋口一葉の研究―「まことの詩人」の淵源を考える―		伊狩 弘	53

修士論文題目及び内容の要旨

中原中也の詩のスタイルについて	鈴木 こずえ	71
「古代文学における禁忌」要旨	鈴木 翠	75
韓国人日本語学習者におけるカタカナ語の習得と学習ストラテジー	安田 佳奈枝	(8)
何故ハトシエプストは長期にわたって統治することが出来たのか	古川 春香	(5)
青年期における自閉症スペクトラム傾向と自尊感情について ―愛着の関連から―	須藤 直子	(3)
PTSD／抑うつ傾向と自己開示との関連の検討 ―東日本大震災から4年半時点での被災大学生を対象として―	浅野 尋	(1)

会津・新宮熊野神社『新宮雜葉記』諸本研究

— 付・翻刻紹介 いわき明星大学図書館蔵『新宮譜』 —

高島 一美

福島県会津地方、喜多方市慶徳町の新宮熊野神社は、前九年合戦（安倍貞任・宗任）、後三年合戦（清原武衡・家衡）にあたり、源義家が勝利を願ひ、紀州の熊野神社を勧請したとの由来をもつ神社である。『大日本地名辞書』（明治三十九年）には「会津熊野神社」と立項され、『新編会津風土記』『会津旧事雑考』をもとに、源義家による勧請と社殿の規模、銘文の中に刻まれた年号等が解説されている。

会津熊野神社

新記云、会津熊野三所は、初め源義家、之を河沼郡代田組の熊野堂に勧請し、応徳二年、小松村へ新宮を建移す、慶長年中、蒲生秀行、当社の来由を尋しに、神職創建の始末を告げ、且義家の鞍鐙を呈進す、（旧事雑考に、鞍鐙を呈せしを、寛永中の事とし、蒲生忠郷、上洛供奉の時、此物を用ひしかば、洛中の貴賤目を驚せしと伝ふ）同十六年再封の時、社産五十石を附す、同十六年、地震ありて、拜殿既に傾倒せんとす、仍て修理を加ふ、寛永年中、加藤氏封に就しより、社産を失ひ、殿屋漸々に廢圮せり、古鐘の銘に、

奉治鑄、奥州会津、熊野山新宮社之鐘一口、一山之衆徒三千人、大檀那從□大姉、同地頭平朝臣明繼、結縁衆百余人、大工景政、貞和五己丑年七月二十一日

拜殿は十三間半に六間、もと鎮座以来の拜殿有りて、漸漸に頽

破せしかば、旧材を用て修補せしとて、今に結構巨宏なり、三社は、拜殿より石階を登り、御前山の麓、森の内にあり、三社共に東向にて、中央を新宮西御前速玉神とし、北の社を本宮証誠殿とし、南の社を那智中宮結御前と云ふ、文殊堂は神宮寺の側に在り、文殊の木像を安ず、別当神宮寺、本社南にあり、開基詳ならず、意ふに、当社勧請の時、建立ありしなるべし、大永の頃、雄仁と云僧住せり、宝物、相撲力士木像一對、運慶作と云ふ、大般若經写本、残欠、処々に奥書あり、第二百三十五卷「延文三年、正月一日、大旦那沙弥妙雲第五百二十四卷、四檀に納めらる、鉄鉢一口、其銘に曰く、

陸奥国会津、山郡、熊野山新宮、証誠殿御鉢、大旦那妙悟、曆応四年辛巳六月三日、大勸進比丘尼明月

大旦那平内次郎、大工円阿、同子息定能、

結縁衆十万人

御正体丸鏡、一面、其銘曰く、

新宮、弥勒元辛卯、二月廿日、大勸進僧淨尊、証一、会津地頭代、左兵衛少尉藤原知盛、小守宮預所代、右兵衛少尉平国村、

旧事雑考云、太歳辛卯、朱鳥五年辛卯より、慶安四年辛卯まで、十余回あり、其中改元の年に当るもの、承平元年と

承安元年のみ、承安の前、庚寅の年に、九月の頃、桜梅桃李の花盛りに開けるよし、旧記に見ゆれば、世俗、弥勒出世の先兆など云ふにより、私に此の如き年号を作りたるも知れず、即、承安のものか。雑考によれば、弥勒の号あるもの猶在りしなり、

「大勸進僧浄尊、横三郎、壬部広末、会津新宮、弥勒元辛卯、二月廿二日」

南宮の鰐口の銘に曰く、

在□□慶、彫字高頼、小旦那御子、別当吉原、大工願倩、敬白、奥州会津熊野山両所、鰐口一口、大旦那沙弥正宗、

康応二年閏三月三日

又、御正体の銘あるもの、数多の中に、

「敬白、会津新宮、奉懸若王子御正体、先達呼慶、物部氏女、永仁四年丙申、正月十五日、藤原氏」

「熊野山新宮、西宮結御前御正体、願主城仙坊、元亨三年癸亥、十二月二十四日、妙性尼」

「会津熊野新宮、証誠殿御宝前、奉懸三尺御正体一面、右志趣、云々、別当所、地頭、御家繁昌、元亨四年甲子、六月二十八日、大旦那比丘尼従満、同右衛門尉平時明、住持栄雲」

「敬白、奥州会津新宮、御宝殿、奉懸十二面御正体一体、右奉鑄懸、十一面御正体、意趣者、為当庄惣地頭、平時明、并一族等、云々、別者、大旦那比丘尼観全、云々、正中二年乙丑、十月十五日、兵衛尉助成、大旦那比丘尼観全、同比丘尼道観」

この源義家による勸請の由来や熊野の本地譚、あわせて、会津の

旧跡、会津に関わる歴史、新宮熊野神社周辺の地名などをまとめた書物として、『新宮雜葉記』がある。『国書総目録』に立項はないが、大正六年、菊池研介によって『会津資料叢書 第二』に活字翻刻が収められている(注)。

また、菊池研介『会津資料叢書 第二』にて、『新宮雜葉記』は、渡辺直昌によって元禄十五年(一七〇二)にまとめられたテキストと、中条度泰によって明和六年(一七六九)に再編纂されたテキストがあることが指摘されている。

さて、元禄十五年に『新宮雜葉記』が編纂される五十九年前、寛永二十年(一六四三)に三代将軍徳川家光の弟・保科正之(慶長十六年(寛文十二年)が会津へ入部する。三浦氏の佐原義連を祖とする蘆名氏が、伊達政宗によって天正十七年(一五八九)に滅ぼされて以来、会津は伊達政宗、蒲生氏郷・秀行、上杉景勝、蒲生秀行・忠郷・忠知、加藤嘉明・明成と領主が次々と交代していた。

この保科正之の入部の後、寛文三年(一六六三)七月二十五日には「御政治御執行之御趣意」が示される。「御趣意」のうち、宗教に関しては、以降の新しい寺院取立の禁止、奇怪な禰宜巫祝の禁止が『家世実紀』に記されている。さらに、寛文年間に行われた寺社への主な政策をみていくと、御黒印の改め、神社縁起御改、余吾將軍(平維茂)や中世会津の領主である佐原義連(注)・蘆名盛氏・盛隆ら三浦氏の碑文の作成、会津風土記編集の成就、延喜式に記載のある古社の保護や再興、源義家勸請の八幡社の保護、キリシタン改方之定などがある。幕府による諸宗寺院法度、諸社禰宜神主法度の発布と合わせ、会津藩内においても寺社の統制が行われていた。そのような会津藩の政策の中、『会津旧事雜考』(寛文十二年)が編纂されている。

この『会津旧事雑考』の白河院の応徳二年条を見る。新宮熊野神社が、熊野堂村から現在の場所へ移されたときされる時代の記述である。応徳二年^{乙丑}、或記曰、會津新宮建^{ツト}云、傳曰、天喜之頃、源ノ頼義、及義家、征^レ賊時^ニ、陰^ニ祈^{リテ}ニ于熊野神^一、有^レ應、故^ニ觀^レ請於三社^一也、今河沼郡熊野神堂邑是也云、又此歳、新宮建^{ツト}云、民間^ニ亦傳^フ、源氏始觀^レ請於熊野^一者、河沼郡熊野堂邑是^{ナリ}也、後遷^ニ于新宮^一也ト云、事多^ク似^レ不^レ啖^カ、故今俗説、與^レ舊史^一取合^フ爲^レ解^ラ焉、按^{スルニ}舊史^一、所謂、後冷泉院永承二年^{丁亥}、奥州安倍頼時及子貞任宗任等叛^ム矣、^也安房^前、源頼義任^ニ陸奥守^一、兼鎮守府將軍來^テ征^レ賊、義家亦相從^{ヘリ}也、父子在^ル奥者、十有五年^至貞永五年[、]中間與^レ賊會戰者數回、康平五年九月十七日、貞任等軍潰被^ル戮^セ、翌年二月、梟^レ賊首^ヲ於洛^一、頼義亦任終^{リテ}歸^{レリ}洛^ニ也、^{所謂}當郡^社八種^及勳^請、^也後經^ニ二十餘年^一、永保之始、義家亦任^ニ鎮守府將軍陸奥守^一、入^ル府^ニ、故國士皆從^テ也、有^ニ清原家衡^一者、據^ニ于羽州金澤柵^一叛^ク也、義家率^レ兵^ヲ雖^レ攻焉、固^ク不^レ降、故暫^ク退還^スト^ニ軍^ヲ於奥^ニ云、疑^クハ此歳、南^ニ去^テ還^シニ軍^ヲ於當郡^一、暫^ク據^ニ于尾山邑御館山^一、^{傳曰}義家^自來^而此^北或還^スニ河沼郡熊野社^ヲ於耶麻郡^一乎、今繹^{ルニ}耶麻郡三社、那智^ハ者、宇都野^{ナリ}也、事跡未^レ詳^{ナラ}、本宮^ハ者、岩澤也、往昔、制巨宏^{ニシテ}而衆徒十二字在^リ焉^ト云、曰、櫻木^本、杉本^本、梅本^本、柳本^本、谷本^本、瀧本^本、藤本^本、岩本^本、峯本^本、池本^本、山本^本、吉本坊也^ト云、今一字^モ亦不^レ存、唯社^ノ礎石[、]及^ヒ二王像^耳存^{セリ}也、新宮^ハ者、今存^ス、拜殿巨宏[、]横題數尺者、實非常人之所^レ爲[、]源君之制、必^セルヤ乎、往昔、祝子^等亦神主、別當大夫、及長吏在^ル廳、申口、四員、伶人亦大藏大夫[、]和泉大夫[、]伊賀大夫[、]佐渡大夫、筑後大夫、民部大夫、掃部大夫等、社僧者、別當熊

野山新宮寺、及^ヒ神宮寺ノ衆徒、又三十六宇、曰、安濟坊、龍藏坊、瀧本坊、杉本坊、寶藏坊、梅本坊、駿河坊等、其他失^レ名^ヲ也、祭禮者、六月十五日、社僧^梵唄、伶人鼓吹、或營^ニ於田樂相撲^一、舉郡往來絡繹^也ト云、且往昔、義家所^レ駕^{スル}鞍、與^レ鐙相傳^フ、山形^ニ置^ニ義家^ノ二字^一、寛永獻^{スルニ}蒲生忠郷^一云、慶長之頃、主秀行細^ニ聞^{ヒテ}社^ノ舊因^ヲ、附^{スト}於^ニ稅五十斛^一云、応徳二年条には、『新宮雜葉記』の来由部と共通する内容が記されている(いわき明星大学図書館蔵本、1丁オモテ〜9丁オモテ)。寛文年間に行われた「御改」の際に、新宮熊野神社側が会津藩へ提出した縁起が『会津旧事雑考』へと採られ、また、元禄十五年に『新宮雜葉記』が編纂されるにあたって、もとの史料となつたのではないかと考えられる(いわき明星大学図書館蔵本、62丁ウラ〜64丁ウラ)。(注三)なお、『新宮雜葉記』の寛文四年条(いわき明星大学図書館蔵本、60丁オモテ〜61丁ウラ)には、新宮熊野神社へ藩主・保科正之の命を受けた友松氏興^(注四)が訪れ、「御札」のために神社の神扉を開けるようもとめられて、別当と村長が「神罰」にあつて「誓」になると難じるやりとりが記されている。

熊野の本地については、「熊野権現御垂跡縁起」(『長寛勘文』)に語られている、唐の天台山の王子信から日本での遊幸と熊野の新宮神藏への天下り、狗飼の熊部千与貞による熊野神発見譚が記されている。

これらの点から、『新宮雜葉記』は、熊野神社の本地譚が在地化していく中で編纂されたテキスト^(注五)で、かつ、中世から近世幕藩体制が整えられていく過程における在地側の立場がみられるテキストでもあると考える。

一、『新宮雜葉記』諸本の二つの系統

― 渡辺直昌系統と中條度泰系統 ―

『新宮雜葉記』は、まず、大正六年に菊池研介によって『会津資料叢書 第二』に収められ、「解題」が付けられている。

新宮ハ今耶麻郡慶徳村ノ大字ナリ。コ、ニ鎮座セル熊野神社ハ源義家ノ勸請ナリト云フ。爾來星霜八百年、此間ニ於ケル沿革、及宝器等ヲ詳記セルモノ即チ本書ナリ。書中、開闢記ノ如キハ、本地垂跡説ニ因リタルヲ以テ、信憑スルニ足ラズト雖モ、其來歴部ハ、新宮ヲ中心トシテ会津ニ起レル史上ノ事實、天変、地妖等ヲ詳記セルガ故ニ、会津研究ノ好資料ナリ。而シテ、本書ヲ会津旧事雜考ニ対照スルニ、事實月日符合シ、彼ニ無シテ此ニ在ルモノアリ。且彼ハ寛永二十年ニ筆ヲ止メタルモ、此ハ宝永七年マデノ事實ヲ載セタルヲ以テ、六十七年間ニ於ケル事件ヲ見ルベシ。本書ノ撰述ハ、元禄十五年ノ秋ナルベシ。而シテ珠盤氏ノ序、及自序、自跋、並ニ追記ニ因テ考フルニ、宝永二年ニ至ル三年間之ヲ改訂シ、宝永七年追書セルモノト思ハル。本書ノ底本ハ著者原本ノ転写ニシテ、明治初年ノ筆ナリ。自跋ニヨレバ、原本ハ熊野神社ニ奉納シタル由ナレド、今亡失シテ見ルベカラズ。熊野神社宝庫ニ現存スルモノハ、明和六年ニ中條度泰ノ筆写補綴セルモノナリ。村老ノ口碑ニヨレバ、昔時祝融氏ノ為ニ原本失セタルヲ以テ、中條氏筆写シテ奉納セリトイフ。之ヲ対照スルニ、本文甚ダ異同アリ。子細ニ檢スレバ、中條氏筆写ニ当リ、サカシラニ書キ加へ、或ハ本文ヲ改作セシ處モ見ユ。而シテ宝庫本ニハ、珠盤ノ叙、及著者ノ自序、自跋ナクシテ、中條氏ノ序及跋アリ。同氏ノ跋文ニハ著者自序ノ整文

ヲ其儘用キ且ツ序跋中ニ曾テ本書ノ撰アリシコトヲイハザルノミナラズ、却テ己ガ撰トナセリ。是ニ由テ之ヲ觀レバ、中條氏ハ甚ダ不徳ノ人ト謂フベク、著者地下ニ在リテ切齒セシナラン。中條度泰ハ新宮村ノ人ニシテ、医ヲ業トセリト云フ。序跋ニヨリテ考フレバ、和漢ノ学モ相当ニ修メタリト見ユ。和歌ヲ能クシ、仮名書キニ妙ナリキ。

宝庫本ハ楮紙ノ大本ニシテ百四十三枚アリ。表紙ハ菊ヲ織出シタル錦ニテ、見返ニハ金箔ヲ散シタリ。書中安永六年マデハ中條氏ノ筆ニシテ、以下住職ノ次第二追書セルモノナリ。中ニ光源氏系図一卷ヲ載セタレド、コ、ニ要ナキヲ以テ省キ、参考トナルベキ資料ヲ卷末ニ附載セリ。本書ノ著者ハ渡邊直昌、通稱傳六郎、風月堂盧帆ト號ス。河沼郡砂村(今ノ広瀬村大字沼越)ノ人ナリ。子孫断絶シテ伝記知ルベカラズ。

大正六丁巳年八月一日 菊池研介識

この「解題」には、①著者(渡辺直昌)原本から明治初年に書写されたテキストが底本となつてゐること、②原本(渡辺直昌)は神社に奉納されたが、村老の口碑から焼失してゐること、③焼失にあつて、明和六年に中條度泰が筆写補綴したテキストが神社に奉納されてゐるが「本文甚ダ異同アリ」という、三点の指摘が見出される。

続いて「例言」には、以下の七点がしめされてゐる。

一、本書ノ底本ハ、耶麻郡慶徳村大字豊岡武藤敬次郎氏の藏本ニシテ、著者原本ヨリ数次転写シタルモノナリ。

二、底本ハ魯魚焉馬ノ誤多シ。蓋シ転写ノ際生ジタラント思ハル。今著シキモノハ之ヲ改メタリ。

三、本書ハ一切句読ヲ施サズ。

四、熊野神社宝庫中ニ一本アリ。之ト対照スルニ、彼我異同不

勘、即ち本文中△符ヲ附シテ異同ヲ弁ジ、短文ハ括弧内ニ記セリ。
五、宝庫本中長文ニテ本書ニ書キ入レガタキモノ二十八箇所アリ。△符ノ下ニイロハ番号ヲ施シ、該文ハ宝庫本所載之分トシテ卷末ニ掲ゲタリ。

六、(補)トシテ記シタルハ、予ガ補記セルナリ。
七、本書所載ノ宝物現存ノモノト差アリ。参考トシテ卷末ニ附載ス。

先の①明治初年に書写されたテキストは、耶麻郡慶徳村(現在は喜多方市慶徳町)の武藤敬次郎氏の蔵本で、そのテキストから菊池研介が「数次転写シタルモノ」が、底本となっていることがわかる。

次に、平成七年『喜多方市史 第四巻 考古・古代・中世資料編 I』^(注)の解題である。

新宮雑葉記 喜多方市慶徳町新宮に鎮座する熊野神社の縁起を中心に、古代から近世初期のいたる会津地方各地におこった事件等を記している。

大正六年(一九一七)菊池研介(重匡)が、「会津資料保存会」の名のもとに『会津資料叢書』第貳として刊行した渡辺直昌著『新宮雑葉記』は、耶麻郡慶徳村大字豊岡(喜多方市慶徳町豊岡)の武藤敬次郎蔵の写本を底本とした。この底本と思われる喜多方市慶徳町豊岡の武藤恵紀氏蔵の『新宮雑葉記』(恵紀本)には、明治二十二年(一八八九)正月、大木村(耶麻郡塩川町大字大田木)辺見茂吉所蔵の写本より筆写した旨と、辺見氏の写本は大木村の門脇寅吉所蔵の写本より筆写した旨が記されている。

「重匡本」敬次郎本の原本は、渡辺直昌が元禄十五年(一七〇二)に著述して、宝永二年(一七〇五)まで改訂を加え、さら

に宝永七年まで追書したもので、熊野神社に奉納されたということが現存しない。菊池研介によれば、祝融氏のために失せたと村老が伝えているという。祝融とは、火をつかさどる神とか火災のことである。…(中略)…

前述の如く、渡辺直昌が熊野神社^マに奉納したとされる『雑葉記』(直昌本)の原本は亡失しているので、非編年史料 一新宮雑葉記では、菊池研介による『会津資料叢書 第貳』『新宮雑葉記』(大正六年十一月 会津資料保存会発行)を底本とし、武藤恵紀氏蔵の写本によつて校訂を加えた。「恵紀本」を底本としなかったのは、菊池研介が底本とした武藤敬次郎蔵の写本と同一であるのか疑問があつたからである。

この「解題」では、渡辺直昌系統の諸本について、三つの点が指摘されている。

まず一点目、菊池研介『会津資料叢書』所収の底本の指摘、
・耶麻郡慶徳村・武藤敬次郎写本(底本)↓菊池研介『会津資料叢書』所収『新宮雑葉記』

二点目、現在、所蔵者が明確である、「喜多方市慶徳町・武藤恵紀氏所蔵明治二十二年正月写本」の親本について、

・大木村・門脇寅吉所蔵写本↓大木村・辺見茂吉所蔵写本↓喜多方市慶徳町・武藤恵紀氏蔵明治二十二年正月写本

三点目、菊池研介『会津資料叢書』の底本の耶麻郡慶徳村・武藤敬次郎写本と、喜多方市慶徳町・武藤恵紀氏蔵・明治二十二年正月写本については、「同一であるのか疑問」があるとの指摘である。

中条度泰系統の諸本については、以下の通り指摘されている。

現在、熊野神社の宝庫に所蔵されている『雑葉記』(宝庫本)は、明和六年(一七六九)に新宮村(喜多方市慶徳町新宮)の医師中条

度泰が奉納したもので、その後、天保十四年（一八四三）に至る歴代住職の追書や、明治三十九年（一九〇六）熊野神社に大小二振を寄進した新宮村の村民の名と、その時の新宮村の区長が詠んだ歌が記されている。

「直昌本」と「度泰本」宝庫本」には、かなり異同がある。「宝庫本」には「熊野山旧記序（珠盤の序文）と風月堂盧帆（渡辺直昌）の「序文」および「跋文」がなく、中条度泰の「序文」および「跋文」が記されている。つまり中条度泰は『雑葉記』を己の著作であるかのように記しているのである。「直昌本」の本文は、「由来之部・開闢記・新宮旧跡之部・新宮地頭系譜・神体仏像之部・宝器之部・村老伝・鎮守下邑郷」の九部からなっているが、「度泰本」宝庫本」は「新宮地頭系譜」が欠けている。なお「直昌本」の目次では、何故か「新宮地頭系譜」が省略されている。その他、「度泰本」宝庫本」には中条度泰が書き加えたり、改作したりした部分もある。

ここでは、「熊野神社の宝庫に所蔵されている『雑葉記』（宝庫本）」は、

- ・明和六年の中条度泰の奉納
 - ・「天保十四年に至る歴代住職の追書」、「明治三十九年熊野神社に大小二振が寄進された時の村民の名と歌が書き入れられている」と、二つの点が指摘されている。
- これら、二つの解題から、渡辺直昌本系統の諸本は、さかのぼるようにならべると、以下の通りとなる。

- ・菊池研介『会津資料叢書』所収『新宮雑葉記』
- ・耶麻郡慶徳村・武藤敬次郎写本
- ・喜多方市慶徳町・武藤恵紀氏所蔵明治二十二年正月写本

- ・大木村・辺見茂吉所蔵写本（武藤恵紀氏所蔵明治二十二年正月写本・奥書による）
- ・大木村・門脇寅吉所蔵写本（武藤恵紀氏所蔵明治二十二年正月写本・奥書による）

前述のうち、耶麻郡慶徳村・武藤敬次郎写本と喜多方市慶徳町・武藤恵紀氏所蔵明治二十二年正月写本は、「同一であるのか疑問」がある。

中条度泰本については、以下の一本である。

- ・熊野神社宝庫所蔵（宝庫本）
- なお、渡辺直昌については、『喜多方市史 第四卷』の解題にて、『福島県耶麻郡誌』に医師であり、和歌を学んだ旨が指摘されている（注七）。中条度泰については、『会津資料叢書 第二』の解題において、新宮村の医師で、序文跋文から、和漢の古典も和歌も学び、たくみな人物ではないかと指摘されている。

二、いわき明星大学図書館所蔵『新宮譜』の分類

現在、確認できる『新宮雑葉記』のテキストとしては、活字化されているものでは、左記の二本がある。

- ・菊池研介『会津資料叢書』所収『新宮雑葉記』
- ・喜多方市史編纂委員会『喜多方市史 第四卷 考古・古代・中世資料編Ⅰ』所収『新宮雑葉記』
- ・喜多方市教育委員会『喜多方市史資料叢書 第7集』所収『新宮伝記』

菊池研介が底本としたテキストは渡辺直昌によるテキスト、『喜多方市史 第四卷』所収のテキストは菊池研介『会津資料叢書』を底

本として武藤恵紀氏本で校訂したテキスト、『喜多方市資料叢書』に翻刻されたテキストは中条度泰による再編纂、熊野神社に奉納されたテキスト(宝庫本)である。渡辺直昌本と中条度泰本の二つの系統の本文が確認できる。

そこで、今回、翻刻を付したいわき明星大学図書館蔵のテキストと本文を比較したところ、いわき明星大学図書館蔵のテキストは、中条度泰の再編纂になる熊野神社に奉納されたテキストの系統であった。

中条度泰系統の熊野神社蔵本(宝庫本)の内容は、以下の通りとなる。

叙(明和六己丑龍集姫月无辰中條度泰再拝稽首)

新宮伝記目録(来由之部・開闢記・来歴之部・仏像之部・宝器之部・村老之伝・鎮下之邑郷)

由来部

同開闢記・新宮社七不思議之事

新宮旧跡部

来歴部(元明天皇)桜町院・宝曆十二壬午年)

当時之仏像

宝器之図

村老之伝

鎮守下邑郷

跋(明和六己丑年鶉月吉辰松梅堂中雲齊度泰謹言)

追加

宝曆十三癸未年冬(明和八辛卯年卯月(※近衛信基卿御筆光

源氏の御系図巻軸の写し)「光源氏系図」

拾遺二ヶ条

今上皇帝(明和八辛卯年四月十八日)明和九壬辰年(安永二癸巳年)同三甲午年・同四乙未年・同六丁酉年)

安永九庚子年(天保七年)

鐘樓堂再建(天保九戊戌年)

天保十四年癸卯八月九日吉辰請雨祈禱

明治廿九年七月同廿七八年日清戦役ニ於ケル戦利品

明治廿九年十月大小二振奉納セリ

いわき明星大学図書館蔵本には、「来由部」、「同開闢記」、「新宮七不思議」、「新宮旧跡之部」、「来歴部」、「鎮守下邑郷」が書写されている。熊野神社蔵本(宝庫本)の「由来部」、「同開闢記・新宮社七不思議之事」、「新宮旧跡部」、「来歴部」、「鎮守下邑郷」にあたる。書写の年代としては、複数箇所「今年安政七年」と書き入れがあることから、安政七年(一八六〇)と判断できる。(注1)

次に、いわき明星大学図書館蔵本と、熊野神社蔵本(宝庫本)の関係である。いわき明星大学図書館蔵本は熊野神社蔵本(宝庫本)を親本として写されたテキストとするには異なる本文もあり、すぐには判断がでない。いわき明星大学図書館蔵本(23丁ウラ)には「言誹雙句餘あれと略す」と明記され、四首以外の和歌が書写されていない。来歴部においては、熊野神社蔵本(宝庫本)には桜町院の宝曆十二壬午年条までであるが、いわき明星大学図書館蔵本には桜町院の元文三戊午年条までしか書写されていない。

さらに、いわき明星大学図書館蔵本には、新宮熊野神社の「神威」を語る箇所が二つある。享保十六年九月十日条と元文二年六月廿一日条である。

同(享保)十六年九月十日 太守正容公薨給奉号 徳翁霊神 八

月晦日三社神鏡無故倒「有凶事變三所太守君薨シ玉ふ」

元文二丁巳年…(中略)…六月中旬より雨風烈所々山崩谷埋る事多…(中略)…同廿一日大風雨同日辰下刻宮山自半腹豎十間余横南北十八間拔崩神木十九本倒る證誠殿前、五尺余押出本柱二本折其外長押高樓等悉破壊南宮前エ九尺余押●柱七本折る及大破雖然神殿穩ニして幣束神鏡無倒「社僧神威ニ在る」

享保十六年九月十日条では、理由もなく神鏡が倒れるという凶事があり、藩主の正容の薨去を知らせ、元文二年六月廿一日条では、山崩れがおき、神木が折れる等の自然災害の中、神殿は穩やかで神鏡は倒れず、社僧がその「神威ニ在る」と、熊野神社の「神威」を語る。宝庫本には、このカギ括弧で示した本文がない。

熊野神社の「神威」を語っているのであるから、熊野神社で蔵しているテキストにもあつたほうがふさわしいように考えられる。だが、宝庫本では、いわき明星大学図書館蔵本と記述の順番が異なる。宝庫本の享保十六年条では、

同十六年辛亥八月晦日新宮三社神鏡無故倒
同年九月十日 太守君正容公薨給 奉号

徳翁霊神

八月晦日に神鏡が理由なく倒れた、九月十日に藩主正容(徳翁霊神)が薨去したと記載しているのみである。元文二年条では、六月廿一日に土砂災害の中にあつて鏡が倒れなかつたとのみ記し、二十二日条へ続いている。『家世実紀』の寛文七年九月二十五日条に、

九月廿五日、依御凶事打続候、上々様御安全御長久之御祈禱、加判之者共申合諸寺社へ申付、当年者度々之洪水、加之御不幸事有之候二付、高田伊佐須美・塔寺八幡・滝沢八幡・猪苗代磐椅・新宮熊野・郭内諏方・御城内稲荷・鳥居町八角・柳津虚空

蔵二而、中将様 奥様 若殿様 御新造様 市正様御安全御長久之儀、…(略)…

また、保科正之の為の御祈禱を記す寛文十二年十二月十日条に
十二月十日、中将様御病氣不被成御勝候二付、寺社江御祈禱被仰付、中将様御病体御勝無之、殿様より御意を以御祈禱之儀吉川惟足江被成御頼、尤伊勢神明江御立願在之、於会津者猪苗代磐椅明神・同磐梯明神・飯豊山権現・新宮熊野社・小川庄八幡社・塔寺八幡宮・滝沢八幡社・御山八幡社・羽黒山権現社・小平瀨天神社・高田伊佐須美社・柳津虚空蔵堂・郭内諏方社・鳥居町八角社・町分蚕養社・南町稲荷社江御立願二而御祈禱、…(略)…

とある。会津藩より祈禱を命じられる新宮熊野神社は、保科正之が禁じた「淫祠」ではない。むしろ、「神威」を求められる神社である。これは、いわき明星大学図書館蔵本のみが持つ本文の特徴であるのか。それとも、中条度泰の奉納のものからのテキストにはなかつた「神威」を語る一文がある時、加えられた写本があらわれ、その本文を引き継いだのか。現時点では判断できない。

三、いわき明星大学図書館蔵『新宮譜』の翻刻

以下、いわき明星大学図書館にて所蔵する『新宮譜』を翻刻する。

・書誌

所蔵…いわき明星大学図書館蔵

装丁…袋綴じ(帙入り)

寸法 縦：26.3cm

横：16.4cm

外題：新宮譜 完(題箋：あり)

内題：新宮譜 完(扉)

表紙：楮紙(藍染)

遊紙：なし

本文：楮紙

丁数：83丁

綴じ：四ツ目綴じ

蔵書印：あり(1丁オモテ、ノド側上に朱印、ノド側下に墨印)

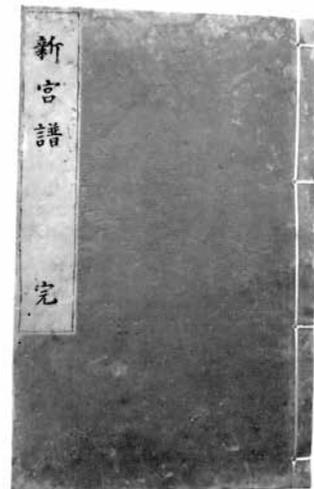
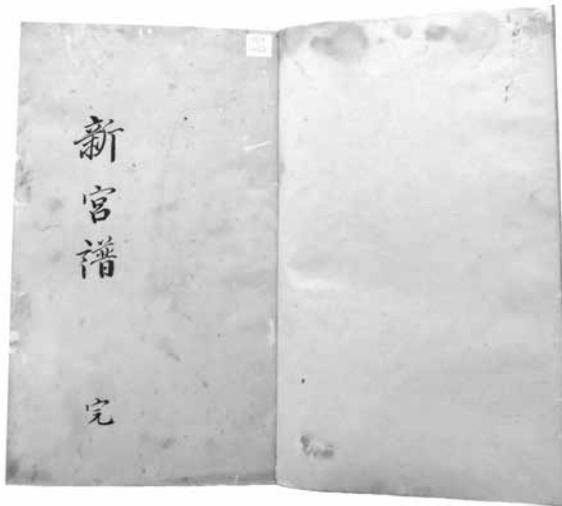
序文 及び 奥書：なし

行数：およそ10行

書入れ：頭注、脚注の位置に複数箇所

- 1、異体字は元の文字を残すようつとめたが、難読の文字は改めた。
- 2、略字と合字は改めた。
- 3、句読点を付し、「一行の終りに」、「丁のオモテ／ウラの終りに」、「(数字オ／ウ)と付した。
- 4、一行あいている場合には、「(一行あき)と付した。
- 5、黒丸(●)は虫食い部分である。文字の一部が残り、推察できる文字は横に付した。また、汚れによって判別できない文字も黒丸(●)におきかえ、「汚」とし、推察できる文字を横に付した。カスレ等によって判別できない文字も同じく黒丸(●)におきかえ、「不鮮明」とした。
- 6、誤記と思われる箇所等については、ママと付した。
- 7、『新宮伝記』(喜多方市教育委員会『喜多方市資料叢書 第7集』所収・(宝庫本)にあるが)いわき明星大学図書館蔵において欠落し

ている本文という、大きな異同については※を付した。





新宮譜 完 (外題・題箋)

新宮譜 完 (内題・扉)

来由部

陸奥国会津縣耶麻郡熊野山新宮三社大権現開興」

の昔を傳へ侍るに 人皇七十代後冷泉院の御宇安倍貞

任王威を背し時鎮守府將軍伊予守源頼義公同八幡太郎

義家公彼を追討のために天喜康平に及び多くの春秋を

経玉ひていとむつかしかりしに然に南紀の熊野三所に信心

を凝し此軍勝利あらんにおゐては東奥に三所を遷し奉らん

と祈り玉へるしることゆへなく東夷たいらかに來りぬ

これに因て天喜三乙未年願ひも三つの御社を当州に

移し今河内郡熊野宮村南紀の例に任せて宇の黨鈴木黨」(一才)

を警固の士に附し玉ひぬ、其後また二十四年を経て

七十二代白川天皇の御宇永保の始 源義家公鎮守府將軍

陸奥守に任し玉ひ再び奥州に下向し玉ひし時国土皆従へり

●原武衡家衡羽州金澤の城に據て叛り 義家公攻め

玉ふといへとも堅ふして降らず、故に暫く軍を当郡に退き

尾山村の御館山の城に據玉ひける時に靈夢を感じ玉へ

て應徳二乙丑年重て三つの御社を此所に築き玉へて

熊野山新宮と號け靈山の左右に十二所を安置し鎮護

せしめ東門に第六天南嶺に神の藏其外末社靈堂を五

葉の花に連らね別当太夫長吏在廳申口四員の伶人」(一ウ)

また大内藏の太夫 和泉の大夫 前伊賀の大夫 佐渡の

太夫 筑後太夫 民部太夫 掃部太夫 其外百餘人の神職社僧は

熊野山新宮寺及び神宮寺安濟坊龍藏坊灌本坊杵本坊

寶藏坊梅本坊桜本坊駿河坊等三百餘宇の衆徒を置き

三密偷伽の道場を建、修法、今業勝て計へかたく祢宜神主

はしらゆふ花を大床に捧げ神樂男●拜殿に候し巫は乙女

●裙帯をひゐて透廊に舞遊ひ護摩の煙は院内に

充満し振鈴の音は碧天に響き颯々たる鈴の音心身を澄

し天長地久国家安全の祈禱をなし玉へは誠に和光同

塵の月の影同悟の花の匂ひ香しく翠の瓦天に眺し」(2才)

朱の玉垣は御手洗川に移りて利生方便の御誓ひ區之

奥州の熊野と號し遠近の縑素信を發し貴賤の男女

袖をつらぬ、毎歲弥生中の五日六日花祭りと定、小布瀬

奥川の兩郷の役として庄民花を携へ來り、社地の四壁に

花垣をかこふ、このとき兒童の舞侍りしとなん其装束の」

み今に残れり、又水無月十五日より廿一日迄連日七日の大祭有」

初日には本社末社の御正躰御神祇なりを五十餘座を渡す」

其様先東門馬場小路を出て鏡目第六天を経て塩川を」

休とし遠田貝沼を過て本坂より南門に帰て本社へに安」

置す、この時●下の地頭領家氏子等其役々を初め供奉の」(2ウ)

の花麗を●せり、第二日に舞樂有、第三日に兒童の舞、第

四日に笠懸、第五日に流鏑馬、第六日に相撲、第七日に

田楽を興行して祭禮となせり、其後百餘年を経て」

養和壽永の頃越後城ノ四郎長茂木曾殿追討の為に信州

へ向わる時會津の勢を駈催す、此時当社は彼の催促に應を」

せざる事をにくみ大寺と心をあはせ社領多は押領せらる」

亦文治五年の秋奥州の泰衡亡て後會津を佐原十郎」

左衛門義連賜り始めて武家の征道と成りしかは都て寺社

の領を没取せられて大寺高寺を初め數箇の寺社はより」

衰へて長く榮●を失へり、因茲当社の別当田部長吏」(3オ)

鎌倉に登り ●大將頼朝公の公聞に達し重て社

供二百町を賜りぬ、其上公常に信を深ふし玉へる文殊薩

埵の軀像を当社の列堂に安置し玉へり、是運慶の」

刻める尊容之、建久三壬子年の御創立慶長の地震」

に堂宇倒れり、元禄十三庚辰年秋再興所一万宮の本尊」

是之、建久より又二百年を展て百一代後小松院の御宇世大

大に乱れて鯨波狼煙一日も止時なく萬民山野に逐隠る、当

庄の地頭荻名新宮次郎平盛俊應永九壬午加納の地頭佐

原氏を討亡し北田の地頭北田上総守と心を合黒河を窺ふ、黒

川の太守荻名修理大夫盛政是を憤り鬪諍に及び挑み戦」(3ウ)

事又急之、同十癸未新宮落城して盛俊高館小布瀬の城」

に桶籠り黒河へ和議を請ひける、大城を修理し叛く、同十七

庚寅北田落城して上総守討死す、同二十七庚子六月新宮落」

城盛俊越後へ走る、永享五癸丑年十月廿三日小川庄谷沢の奥

人か谷と云所て盛俊兄弟父子三人尾張守参河守等主従自害ス」

●主従共め野田・野前二二年の兵亂に萬民手足を置に所なし、群盜

神領を掠め或は佛閣を没倒し当社悉く衰微して春夏の祭

堂社の會式も断絶せり、同七乙卯年より一統靜謐に歸し万民

●平を呼ぶ、是より当社旧例に返りて繁榮永禄天正に及ふと

いへとも悉く衰へり、此時又天下大に乱て鬪諍更に止時なく諸

(4オ)

人所々に逃げ走る、当宮の山徒社家の●皆法務を忘れて寶殿

を破り重寶を奪ひ取て戰士に與ふ、剩三別当相論の事出來」

何某とかや云り神主會津の危きを見て一山の開記證判を盗みと

●伊達政宗へ降参し別当三人に申賜らんとせしに神明のいましめ

にや出羽國置賜郡にして山賊の為に害せられぬ、是より庄氏

祭例を省き社領は隱田となして公府へも納めず供料にも備へ」

す、又兵乱うちもらされし夜盜とも神器をうはひとりて喝をう

るをさんとす、此時迄はあらゆる重寶いくはくそや、是より当宮

彌 ●衰ひ社職ちりへになりぬ、然りといへとも心ある庄氏は供産も

備 ●へ残る僧徒社人なども半は侍りしかは六月の花祭り月並」(4ウ)

の堂社の會式などいとなみ侍りしに慶長六辛丑年秋九月」

廿六日蒲生飛驒守秀行公再び此國をしり玉ふ時社職をそして」

源君創草の來由並其印證を尋玉へるにより昔時

」

義家公東夷追討の時戦場に駕玉ふその鞍と鏡とを呈上す」
鞍の前輪に義家の二字あり、後輪に心如明鏡臺と金にて」

鏤む、因茲同十月十八日社領五十斛を寄附し玉ひて廢宮を修復」
し玉へは昔の春にもかへりなんと衆人愴ひの眉をひらきけるにいか」

なる時そ同十六亥年の秋八月廿一日己巳の刻より大地俄に」
●て月を●して数日更に震ひ止す、十三間の拝殿をはしめ」

四所の明神五所の宮勸請十五所の本地堂一万宮の南殿八所」(5才)
の廊閣瀧の宮禪八幡の両宮小寺勝手手の奥院三多計明神大」

山祇麓山●●社神の藏天満天神の宮四天王の東門金剛力士の」
南門大黒天の北ノ門補陀洛寺の千手堂文殊堂十王堂三所宮の」

本地堂北堂護摩堂東浄堂西惠堂粧嚴塔此外僧坊三十餘」
院唯三所の高閣のみ残て其外一字ものこらず顛倒す、見る人肝

をいたましめ聞人袖をうるをさつといふことなし、粵におゐて前
太」

守蒲生下野守忠郷公拝殿を再興し且廢宮を修補し玉ふ、斯」
て星月を経る所に寛永九丁卯年加藤左馬介嘉明公此由をしり」

玉ふ時五月十七日一日を以て舊例に準し供産を国中の國中の諸」
寺諸社へ賜ふへきとの貴命候へたりて●拝受す、折ふし」(5ウ)

霖雨頻にして濁川の水溢れて往來を絶し兔角に公聞に達」
する事遅かゆへに舊例空しく成ぬ、またもろくの堂社傾き落

立へき力もなく曇破れては霧不断の香を焼き扉落ては」
月常住の燈を排くとかや、住僧社職も絶て神社仏閣の例なく跡は」

野人の所管に汚し神躰仏像は爰かしこに散乱し草露に朽て」
往來の人も眺しめに見なり、参詣の人も断絶して雨凄涼とすき」

ましく風蕭索ともものすこく國中の末社末寺は旧例を省」

て他の法を継ぎ庄民いつとなく鎮守の尊崇を忘れたり」

●●行●有慶と云行者三社の傾を憂て自ら供田を開」
き正保年中に破壊を修復し朽残●神像仏像を聚て假りに」(6才)

拝閣の傍に納なりしに心ある人は是を乞て諸寺の本尊に」
仰か●此時從●なかりしかは有慶自然と新宮寺の住職と成」

て若松弥勒寺の法を續しかは是よりして弥勒寺の末寺と成る」
其後寛文三癸卯年住僧玄長希望を望」

土津神君の 公聴に達す 源君創立の來由を御糺し有て 貴命に」
依て友松氏興参詣し玉へ内殿に入て尊躰を拝し鎮座を明らかめ」

尊躰六尊各寸尺を改め玉へり、これより破壇を修復し且舊」
例に準して御祈禱所になさしめられ社地賑ひのため御花」

畑より若干の杵苗を下し賜り社地四壁にことく植させら」
る、同五乙卯年六月 御社参ましくき、同七丁卯年秋九月」(6ウ)

會陽七太社の 鎮座を 御糺しありて玉山講義御附録を御奉」
納なさしめらる、難有哉、尔しより以來七年に至て指萱十」

四年に及て葺替と定させ玉ひ諸人夫鎮下より可勤に 貴命を下し」
玉へて享保六丑年まで御修復なさしめられ宮殿廊閣昔の春」

に●●れり、また新宮寺は慶長十七壬午年造立して星霜を」
經、棟梁朽修補を救々加へぬれとも零々落落にして壁疎か」

にして風常に般若を轉し苦薄ふして雨おのつから仏像を」
浴ふ、住僧實有これを歎き」

徳翁神君の 公聴に達し 御恵みを以て享保八癸卯年造立」
成就し侍りぬ、又慶長の地震に●表顛倒して建●●な」(7才)

らざりし社に第一の鳥居なくては宮牆の闕たる●●を」
歎き享保十四己酉年建立成就し侍りぬ、則往古大鳥居三の鳥」

居は鏡目村東にあり、貞享二年村民往古大鳥居の柱根を掘出」

せり、兩柱の間四間有、今造立し侍る所も又然り、是を基として
建立せり、しかるに元文二丁巳年五月初旬より霖雨降り続

き六月中旬よりいやましに雨風烈しく一日もおやみなかりける
程に所々山崩谷を埋ること多かりき、同廿一日の辰の刻斗に

宮山半腹より下にて南北へ十八間餘拔崩、本宮證誠殿東

へ五尺余押出し奈智宮東、九尺餘押出し悉く破壊に及びぬる

こそ浅ましけれ、此兩社は明應九庚申年六月朔日文龜二戊(7
ウ)

年二月七日芦名修理大夫盛高公再興修補し玉ひしに星霜四百餘

歳の年暦を経て破壊に及けることうたてけれ、見る人毎に肝

魂をいたましむ、因茲住僧會秀希望を

土常神君の公聴に達し厚き御恵を得て再興成就して昔

の春に歸れり、其後住職移替り又々宮殿拜殿寺俱に大破

に及へり、住僧弘秀寛延三巳年秋入院して三度これを修復し

神輿神器祭具を悉く造立し絶て久しき祭りを興しその

うへ神宮寺を建立す、在住の間肺行をくたき都て絶たるを継ぎ

廢●●●中興せり、難有哉、当社創草の始應徳二(丑年)

より今明和六巳年に至て星霜既に六百●●●五歳いま●火難(8
オ)

の愁を聞す、是當社七不思議のその●なり、三所の神躰●六尊

往古より深●にして別當社職といへとも直に尊形を拜し奉る

事なし、宮殿修補の時には別當七日の精をなし夜更丑の刻

を待て灯を消し白布を以て面目を隠し新孤を身にまどふて

南宮北宮と遷宮し奉る往古より田部氏中条氏別當と一祠
に七日の輪をなし出る旧例を奉ることなれば

おほろけの人のさうなく拝し奉るへき様なし、押て拜する

古人神討遠からずと傳へり、されは新宮に産るもの鳥族

畜類を服せず、まのあたり其汚をいとほさるものは口腫腰脱て
惑するもの幾人そや、然に其過を改て精をなすに其愁る所

の愈ること又速なり、世既に澆季^{キヨキ}及ふといへとも此外に七不思
儀(8ウ)

の跡なに事誠に靈神の威光名將の遺跡なり、いかにいわんや

國家擁護の鎮座哀愍納受の利益靈驗常に奇なる事を

(一行あき)

同開闢記

(一行あき)

夫熊野山大権現は吾朝開闢の祖神として國家擁護の靈

跡なり、遠く垂跡^{スツシヤク}のむかしを侍るに此界いまた鶏卵の如く

にまるかれ遊魚のごとくに漂し世は混沌いまたわかたす

乾坤いまたあらわれす、其後清濁天地となり二儀既に備り

三才^{ハチ}●●●立しより天神地祇あまねく光りを此秋津

洲に和らけて瑞穂の國に跡を垂れ四海八埏^{アチ}のかなめと之(9オ)

利益方便の御誓ひ之、其初國常立尊と申奉るは天地開け始めて

の時空中一氣生して則神となる、是今の熊野本宮の御事なり

其次に國狭槌尊豐斟淳尊までは芦芽のごとくにして器界

未^ミみて玉はず、其次に泥土煮尊沙土煮尊大戸道大戸間邊尊

面足尊惶根尊まで六神三代は男女の御姿顕れさせ玉ふといへとも

其儀式いまたおはしませす、其次に伊弉諾尊伊弉冊尊此二

柱の御神天の浮橋の上にて俱にあひ名のりこの下に国なからん

やと天の御銚をさしおろし海底を搜り玉ふ時に銚の滴り

凝り堅り一つの嶋と成ぬ、今の礮馭盧嶋是なり、二柱の尊

此所に天くたり玉ひて先淡路洲を初として大日本の国八洲(9ウ)

をうみ次に山河草木を産成せり、又此國にあるしなからんやと

いなおふせ鳥に千代の契をしろしめして五行の神を産み玉へり」
いわゆる雅日靈大日靈月讀蛭子素盞鳴のみこと、成ん、第一の」
御神はあまりに御姿すくれさせ玉ひそとて天にのほりた」

まへぬ、第二の御神は女神として陽徳の御神におはしまし玉へは」
とて御世を此御神に譲り玉へぬ、是はこれ天照皇太神宮の御」
事、熊野には若一女皇子とあかめ奉れり、今奈智と申し」

奉るは伊弉諾尊事解男命、相殿なり、新宮とあかめ奉る」
は伊弉冊尊結速玉男命、相殿なり、所謂熊野十二所と申奉る」

は先本宮新宮奈智を以三所とし国狹槌尊豊斟淳尊泥土尊」(10才)
沙土煮尊大戸道尊大戸邊尊面足尊惶根尊までを四所の明」

神と號し天照皇太神正貳吾勝々速日天忍穗耳尊天津彦々」
火瓊々杵尊彦火々出見尊彦波瀲武鸕鷀羽草葺不合尊迄」

を五躰王子と號し奉りて天神七代地神五代十二代の御神に事」
解男命速玉男命をそへて熊野十二所大権現と號し奉れり、其」

先神代の時伊弉冊尊を熊野の有馬の里に納め祭りて世々の」
天子御崇敬まし〜き、しかれども所惡處及依て人皇十代崇神」

天皇始て本宮證誠殿を建改め祭り玉へり、尔時崇神天皇六十」
五^戊の年なり、新宮は十二代景行天皇建改め祭り玉へり、尔時」

景行五十八^辰年なり、また奈智は十七代仁徳天皇建改め祭」(10才)
らせ玉ふ靈山なり、この三社の神魂を祭るに花の時は花を以て」

祭り鼓吹幡旗歌舞して神代の昔より祭らせ玉ふとなり」
中尊伊弉冊尊左ハ事解男命右ハ速玉男命也」

事解男速玉男ハ伊弉諾尊^乃生^志給所也神代卷曰」
伊弉諾尊追至伊弉冊尊^乃所在處^{中略}因出歸^{中略}」

乃所唾^乃神號曰速玉男^止次仁掃之神^於號^互曰泉津事」
解男^止凡^互二神生矣^止出^乃伊弉諾尊根^乃国^与利還^乃」

羅世玉^伊解除^乃祓^於為玉^比中道^於悟^羅給^比乃速^仁」

玉^乃德^於得又根^乃国^乃事物^於明玉^布乃御徳用之御」
名義也尚深々之意味口傳二有之又社家之記二吏」(11才)

解男^乃追速玉男^ト云康頼之祝詞^ニ速玉男^ト書^リ」
或は又紀州の熊野に侍る所の縁起の趣^{三山の秘蔵を述れりト記す}」

のこし^左を取て本地垂跡の因縁を承るに神代のむかし^甲の年唐」
の天台山王子信の舊跡より吾朝豊前國彦山の巖に天降」

り玉ふ、其形八角の水精石高さ三尺六寸、次に十三年を経て」
^西年淡路洲論^{ユツハ}鶴羽の峯にあまくたり次に五ヶ年庚午」

歳紀伊國牟婁郡切月山の西北峯玉郡木の渕の上松の」
下にあまくたり其次六十年^庚三月十三日庚午の日熊野新宮」

神の蔵にあまくたり次に八十五年^甲歳本宮大湯原に樸^イ三」
本三つの枝に三つの明月にて天降玉ふ、其後九千歳を経て人」(11

ウ)
皇のはしめ神武天皇治天第四千二年^壬の歳石田川の住人」

熊部千与貞と云狗飼熊の長一丈五尺なるを射て跡を尋て」
行程に彼の木のもとにし、倒たり、千与貞是を喰して櫟の」

本に一宿す、梢に明月の有を見て千与貞問て云、いかな者雲上の」
月」

梢に有にこす答曰熊野三所権現、一月は證誠大菩薩地主」
なり、むかし西海西方佛生國の鎮守なり、二月間兩所號す」

西の御前は伊弉諾尊、中の御前は伊弉冊尊とて其後また」
人皇一千三百餘歳を経て役の行者小角熊野三所に祈て正身」

の御形を拝し神勅に任せて本地の垂跡の御姿を内外に」
わかち兩部神道の法をたて四^期の道をふみわけ参詣の」(12才)

緇素をみちひ玉へり、所謂熊野十二^所は胎蔵界まんなら十」

二所を表せり、まつ本宮證誠殿は国常立尊、本地は弥陀の垂跡なり、西の御前は伊弉諾尊事解命相殿之、本地は

千手観音、中ノ御前は伊弉册尊速玉男命相殿なり」

本地は瑠璃光薬師如来、是を三所の権現と崇す、若一王子は

天照太神、本地は十一面観世音、禪師の宮は忍穂耳尊、本地は地蔵薩埵、聖宮は瓊々杵尊、本地は龍樹菩薩、児宮は彦火

々出見尊、本地は如意輪観音、小守宮は鷓鴣草葺不合尊、本地は

聖観音の垂跡たり、以上若一王子迄を五躰王子と號く、一万宮は

國狭槌尊、本地は文殊師利菩薩、十万宮は豊斟淳尊、本地は普

(12ウ)

賢菩薩なり、此両殿は相殿に崇む、勧請十五所は泥土煮尊、本地は

釋迦牟尼如来、飛行夜叉は大戸道尊、本地は不動明王之、米持金剛は

面

足尊、本地は大悲多門天、是を四所の明神と號す、以上十二所権現

也、其外

満山の護法善神社は鎮守少彦名命、瀧の宮は飛龍権現なり、垂跡

は大己貴尊、是を地主権現と號す、本地千手観音之、神の蔵は愛

染

明王、湯の峯は虚空蔵菩薩、濱の宮は大山祇命、補陀洛堂は

千手千眼、丹敷戸畔の明神、御祈祷護摩所は不動明王、八

所の宮は八陣のかため八百万の神たちを宮造の用法陰陽の

二儀天地人の三才四季五行を表し十幹十二支是皆熊野十二所の

の御誓ひに洩る事なし、いかにいわんや、此土に生を得るもの山河

草(13才)

木に至るまで是皆この神の恩にあらずといふことなし、信すべく

尊ふへく日本第一大靈権現の御號実には神徳の深き事をや

新宮七不思議

一 三社前殿に雀巢をかけざる事

一 三社の棟へ鳥留らざる事

一 新宮領分に一年生の栗実生事

一 前殿軒下迄夜蚊居候得共内へ一切入ざる事

一 前殿の内乾の隅二間の間板敷候儀不成事

一 新宮村に出火ありても二軒と不焼失事

一 同疫病に類病なき當社へ熊折々來る事(13ウ)

新宮舊跡之部

本宮 證誠殿 神山 熊野清水 熊野の池 神杵

老松 一本桜 銀杏 地主の櫻

三ツの山の中の森なり、むかしは山上に宮造りまし〜きとなん

今三所

ともにこの山の麓に移せり、三社各三間半四面東向なり、杵高ふ

して

松枝をたれたり、慶長の地震迄は此山の麓に十二所の宮居本

地の佛殿八幡の社建り、今は前殿のみなり、將軍義家公三山開

興

の時諸山の僧に仰て経巻を書写し宮地を築き玉ふとなん、寛永

年中

中此山より郷民童を多く掘出せり、経巻を入し壺にや、往古の

宮地東は第六天源野林を限り西●雨池南は山崎北慶徳なり(14

才)

舊跡今猶有、庄園有、塩川高館極入杵を限り百餘村鎮下は耶

麻郡の内二百一村と云、此山の南東の麓に伊勢の社跡有東西

四間

南北三間、今猶あり」

花 咲花も神世の春や匂ふらし」

けしきことなる真熊野のもり 直昌」

誓ひてし春やむかしの春ならぬ」

けふみくまの、花のいろ香も 全」

月 月もけに心とすまむ真熊野の」

みなの清水に影をとゝめて 全」

依月知秋 うち向ふ月の光しあかければ 貞宜」(14ウ)

常葉もしるきみ熊野の秋」

社頭雪 真熊野の神の宮あひの松の枝に」

しらゆふかゝる雪のあけほの 素林」

祝言 真熊野の神の居垣のゆふしてや」

かけてそ祈る千代よろつ世を 慮帆」

樹経年 うこきなき神のまに／＼みくまのゝ」

森の常葉木幾世経ぬらむ 昌雅」

國もたて世もたて初て真熊のゝ」

誓ひあまねきあめのみはしら 直昌」

汲てしれおとなし川の音たてぬ 全」(15オ)

常世のなみのふかきちかひを」

結御前 奈智 中の御前とも云々 みたけ山のふもと 末社御高権現社

跡 東北西四間

三つの山の南の森なり、御嶽山とも云、往古は此山中の御前建り」と

中の御前とは新宮なり、宮造には三社の東を新宮右を奈智中を」
本宮とすへし、疑しきに因て記せり、此山の北にて東の麓に御

嶽

明神の社有、むかしは此山を花といふよし、今此山の桜余山に勝」

て花を系けり、紀州の縁あるにや又都て新宮領分の山栗一年生」

に実のるなり、是又紀伊本宮に年に三度みのる栗あり、皆縁を引

にや」※1

神垣やゆふしてかけて真熊野の」

花盛久 花も常葉の名にやたゝまし 直昌」(15ウ)

奈智の山瀧川くたけてちる月に」

光りをわくる誓ひとをしへ 全」

天文十二年三月十五日花祭の日風いたふ吹ければ」

花に今日いたくな吹きそ諸人の 兵衛佐」

いのる願をみつのやまかせ 勝直」

新宮 速玉の宮 西の御前 駿河山 補陀洛堂 稲荷」

是三つの山の北の森なり、むかし奈智勧請の山なり、麓に補陀洛

寺建」

りといへり、其跡に今大同寺建り、この山を駿河山といふ事は近

来」

の名にや侍らん、新宮山門の守護職文亀の頃は西海枝駿河守、

此」

山の麓に住して居館の跡今猶あり、因て名付にや、若一王子」

(16オ)

を初て五所の王子此山に移し奉るといへり、今塚など築て山上に」

社跡あり、三社の北の御前の鰐口若一王子と有り、これは寄宮」
して今の地に移し奉る時若一王子の御神躰を北の宮に安置し」

奉り罎口をかけし成へし、若一王子は三所の外なり、南の宮
の罎口も結の宮とあり、惣して紀州にしゆんすへきことなれと
も」

末々取違ひたる成へし、此外古例を取違ひたる事多し、此山の
麓に稲荷の社あり」

祈恋 いかにせんゑにしむすふの神垣も」

頼むかひなき身ともなりせば 読人しらす」

発句 富士ならて神の尊し駿河山 智圓「(16ウ)※2

甲寅秋過于越後州借路於會津」

之次拜詣三社之神前上詩」

茅宇嘗^{ホウウカツ}ア無^レ連壁^レ粧^レヒ 神風古樸鎮^{ゴホシツム}津湯^{シントフ}」

吾儕登^{ワナミトウ}詣^{ケイ}ハカ感^{カン}ス玉^{スユフ}如^クク^ク在^カ 環^{クワン}遶^{キョウ}シテ^{シテ}峰巒^{ホウラン}浮^{ウキ}瑞光^{ズイコウ}」

臥雲林艸」

發句 霧はれて三社新たや宮柱 瓏山」

拾題奉納和歌四季恋離」

春」

連峯霞 真熊野やあけゆく空にたち別れ」

遠近かすむみねの長閑さ 武州江戸横山氏 清乘「(17才)

春」

簾外梅 しつつけしな降るとしもなき春雨に花の紐とく朝の梅の

枝 越後長岡伊藤氏女 信女」

全」

暁思花 時はやおもふものから寐さめしてはなにまたるゝし

のゝめの空 保定」

夏」

夜時鳥 郭公待出し空の雲間より初音とゝもにもるゝ月かけ

武州江戸朝貞 賀忠」

全」

遠夕立 鈴鹿山ふらすも空に鳴神のひゝきやいつこ夕たちの雨

越後村松野口氏女 橘女」

秋」

初秋風 秋來ぬと云斗にや身^{ママ}そしむ同し邊なる松の嵐しも 直

昌」

全」

名所月 雲霧は浪間に消てさやかなる月^{ママ}昭^{ママ}のこす須^{ママ}廣^{ママ}の浦風

越後神崎相沢氏 栄貞」

全」

断紅葉 日に添て心や染る佛に見るも立田の山のみち葉 定

寛」

冬」

暁時雨 宿るかと思れは時雨て幾度か袖にしほるゝ有明の月

定利」※3

夕立恋 山鳥のおろの鏡の身にしあらは隔る中の影は見ましと

直儀」

寄糸恋 しらせはや心ひとつに賤はたのいとゝ乱るゝよるの思

ひを 奈津女「(17ウ)

雑」

山家風 おのつから心に積る落もなし深山嵐に軒をまかせて

睦月」

全」

神祇祝 動しな豊葺原の国津世は神の立にし天のみはしら 洗

雲」

春

浦霞 時わかぬ浪もかすみて真熊野浦の千里に春や見すらん

全

全

村柳 春雨やみどりの糸も長き日にぬれて色そふ里の春柳

羽州鶴岡田中氏 一敬

全

待花 さかぬ間も幾重の春の山ふみに心をはこふ花の木のも

と 俊英

夏月^{マヅ} 軒端もる月は霜かたとたるとるまで夏の夜ながら袖そさえ

行 京都水無瀬川 学翁

夏

慮橘 なつかしき花橘の匂ひかなむかしふれけん袖は知らね

と 増兒

秋

曉露 月草の夜半にひらけて有明の光りにみかく露のしら玉

宗利

全

初馬 いつか●●わか松の戸もしら雲のよそに過ゆく峯のは

つ馬 江戸青山 位関^{ハカ} ※4

全

搏衣 真葛はふ磯かふせ屋の秋風に夜寒むの衣うらみてや打

洗雲^{ハカ} (18才)

冬 川氷 したむせふ水は音せて谷川の軒端より立雪のしら浪 重

一

歳暮 いつもきく音ともなしや一とせの暮るゝ名残の入相のか

ね 駿州安部川渡瀬氏 宗一

祈恋 いかにせんむそふの神のゆふたすきかきてもつらき人の

心を 露葉

契恋 頼むかな人のことの葉波こさぬ末の松山千代をかけても

佐和女

隔恋 とけてふる夜半こそなけれ心から隔る中の下紐の関 小

満女^{ハカ} ※5

旅暁 雨露になれてもつらし旅衣あかつきおきの床の山こゑ

嘉時

祝言 和哥の浦に拾ふ玉藻は萬代につきせぬ波の花の言の葉

越後押付三好氏女 奈世女

相撲捕場

前殿のうしろ北の御宮の東にて下なり 源君東夷追討の御祈願有

相

撲にて軍の吉凶を見玉へり、軍兵の内力量勝れたる者を撰源氏か

た家衡^{ハカ} (18ウ)

武衡かたと●●つに分ち南北に群居して相撲ありしに源氏方皆勝た

り、其ごとく

凱歌^{カイカ}を揚玉ふ、毎年六月大祭りに役相撲を定玉ふと云り、則此所

にて相撲の

神事を行ふと云

流鏑馬場

前殿の東南土手際にて東西へ長く十王堂迄と云々、六月大祭りの

時往昔神

事流鏑馬を行へりと

笠懸場

前殿の北東にて今の場合なり、往古大祭の時笠懸のありし所之と

云々

石神

大門の入口大鳥居の左右に各大石二つあり、由来詳ならず、往昔

より暴眼ヤクメニ(19才)

を愁ウレるもの又力たたらさるもの此石に祈願すればしるし有といえ

り

瀧の宮 地主権現 地主の櫻 石階の南脇なり

四所の明神 三所の右の廊閣也

一万宮十萬宮相殿なり、勸請十五所飛行夜叉米持金剛是之、本地

堂第一

文殊普賢相殿なり、第二釋迦堂、第三不動、第四多門天之、堂跡

今新宮寺

屋敷四所の跡也、佛像或はみくし斗或は朽損し佛形不明之、勸請

十

五所の神器今なを有り、年代の部並寶器の部に委し

五所の王子 五躰王子也、五所の宮とも云、三所の左に建り

垂跡の宮は北の廊之、若一王子 禪師宮 聖宮 児の宮

小守の宮これなりニ(19ウ)

本地堂第一殿十一面觀音 第二地藏 第三龍樹 第四如意輪

第五聖觀音なり、堂跡駿河山の東西といへり、今大同寺は千手堂

の跡

なり、これは奈智の前殿之、地藏堂は大同寺と今拝殿の間なり

其外堂跡を不知、又残て如意輪千手地藏龍樹等或は御頭斗り或

は

御手足散乱してまします之、小守の宮の神器今猶あり、年代の

部に委し

阿弥陀堂山 あみたか池 西惠堂 伏拝の宮二座

三つの山の西なる山也、慶長の地震の後御堂造営なし、慶安年中

此

山より金銅一尺手半の弥陀を掘出せり、傳に恵心僧都の作と云り、

いま神

宮寺の本尊なり、新宮山門全盛の時此山は奥院なり、明應年中

(20才)

に千日念佛施主など宮殿再興の棟札にも見ゆめり、本地堂

の弥陀●奥院との弥陀は別堂にて本尊は何れも金銅同作之といへり、

又

ふしおかみの宮など、云所奥の院のなりと云々、此山の東麓あみ

たか池

とて有鯉魚の形に掘れり、南は山田あり、田毎の月をよめり

さらしなや伯母捨山の名によせてたれみ候へまの当の月影

勢守 光助

皆人のこそる心やあみたやま 露圓

一乃寺 入り寺とも

古しへ山門全盛の時三百六十坊の其一寺なり、中の森と北の森の

間より西

へ入て四百五十歩計の寺跡あり、あみた山の北之、入口に蓮池と

てあり、此池

に見明の橋とて侍りとなん、今は水かれ寺跡も浅茅のみ多立り、

元亨ニ(20ウ)

●中の寶器に筆者入り寺の住持希雪と記せり、此寺の住僧之、又

見明

の池は大城の東にあり、蓬萊系ひしうの三嶋も見明の池に侍り

※6

星霜年積テ一之寺 亂後無僧境亦空 珠盤

只有ニ飛禽ニ栖遲スル處 艸花依テ舊ニ綻フ春風ニ

又

三百社僧會所ノ憩イコフ 殿堂派絶艸萊生 永流

就レ中此境應ニ為レ長タル 強ク到レ今ニ呼コ一寺ノ名ヲ

尋こし袖そしほるゝ一のてらあとなき庭の露わるとて 直昌

一の寺の秋さり尼きて問へは萩の上葉に風そこたふる 昌春

一の寺のあれにしあとにまふて々ニ(21オ)

跡たへて問はれぬ庭の蓬生も花の色香は智らさりけり 次

房

講發句 あれはてゝ名のみはかりや一乃寺 琴松

全 一の寺問へはあるしはかつこ鳥 智円

薬師堂 速玉の宮の本地佛なり、東浄堂の事之

今新宮寺東のやしき之、薬師は慈覚の作、十二神将は定朝の作之、

各

朽損しておわしますを寶永四年に再興す

十王堂

石神の南薬師堂續きなり、慶安年中堂倒れり

辻地藏

かうらい橋の北に堂跡有、各六躰と云、今失せり、北堂の地藏

は又別ニ(21ウ)

なり、北堂は十二所の本地堂也

補陀洛堂

今大同寺の地なり、大同寺は旧記に堀内と云者高野大師に帰依

し

て布瀬山大同寺を建大日を安置すといへり、是今小布瀬郷寺内村

の

地之、いつ頃か此地に移す、もと眞言三密の寺近來曹洞の僧住せ

り

大同寺の跡は十王堂の西なり、近來今の地に移せり

文殊堂 一万宮の本地なりといへり

今新宮寺の所也、年代の部に委し

誹發句 月なるか文殊の智恵の丸鏡 瀧山

中堂 本尊釈迦 勸請十五所の本地之ニ(22オ)

東浄堂と文殊堂の間之といへり、本尊失し玉へり、今塩川阿弥陀

寺

の本尊也弥陀に造り替と云

莊嚴堂 虚空藏森 塔の庭

本尊虚空藏菩薩、運慶の作也、舊跡今天神免の西の山虚空藏

森と云所あり、是なるへし、しかしあみた堂山の東麓に莊嚴塔の

跡

と云所有、湯の峯の本尊と云傳へり、今新宮寺の東に湯屋の池と

て

あり、むかし温泉有瘡煩の汚を悪み山徒祈りしつむ、因て湯絶し

と

俗説あり、しかれば阿弥陀堂山の東の邊りなるへし、今天神免の

東

にも出湯田と云所在となり、堂今倒れて造営なし、湯屋の池

熊野

の池の訓●あやまれる●東方(22ウ)

神の蔵」

こくう藏森の續也、天神免の西の山上之、本尊愛染明王、堂宇倒本」

尊も朽損せり、堂跡無雙の景地なり」

發句 入る人よ寶の山と神の蔵 智圓」

天神」

神のくらの東の麓なり、今其処を天神免といふ、社跡有、古しへは手向」

松みきの梅などあり、手向の松は枯れみきの梅のみ残り、寛文」

十二乙亥年山崎の民居を移し天神免新田といふ今年安政七年を百八十九年

千早振神に手向の松なれば八百よろつ世の春や重ねん 讀人知らす」

天神」(23才)

おとなしの天神と云、薬師堂の續き民家の内にあり、みきの梅」
若木の桜あり、尊躰衣冠魏々然たり」

音なしやあつまもにほふみきの梅 浦風」※7
みちのくに行脚して此所に立より拜詣して」

かみや川なかれのすゑもにこりなくすみて北の、敷嶋の道
上州藤岡 放管上人」

万代と河となれそむるしにや色香久しきみきの梅か枝
度泰」※8

夜桜 かほれるはそれとしられて朧夜の月にまかへる軒の梅か枝
同」※9

言誹雙句餘多あれと略す」

はやま 麓山権現の社跡山上に有、四方八間宛、寛文中松野へ

寄社に成」

みたけ山の西あみた堂山の南西の山之、社跡有、鰐口あり」
(23ウ)

時なれや紅葉も青きはやま哉 貞宜」

大山祇」

山のかみ山と云、的場山の東のふもととなり、社跡在 寛文中
中松野へ寄社」成ル

まねき 招き坂 ゆや小路より東へ一道あり、民家の後に畑中稲
荷有、寛文中松」

野村へ寄社」成ル

みくま野、すそのにたてるはなす、きまねかはゆかん秋の夕へ
に 讀人しらす」

畑中稲荷 社地東西二間南北一間二尺
ゆや小路」

あみた堂山に向て東西の町なり、今新宮寺の前にゆやと云清水
有、古しへ温」

湯涌き出るとて名付と云り、神前のけかれをいたふて祈りしつ
むと民」(24才)

間の説なり、もし熊野ゆの訓あやまる歟、また村にわさはひあら
ん時には狐鳴」

り、往古よりゆや狐と云傳へ侍り」
馬場町 神前への本道なり

高麗橋 山浦小路 山浦坂」
三ヶ所有、馬場町まねき山浦小路にあり、馬場招きは入口にあ
り、山浦は大門の」

脇にあり、何れも死人井汚れたるものをわたさす」

此所北の入口に神明の社跡東西四間南北六間
なり寛文中松野寄社

高野町 古しへの寺町なり、道場小路より南への町と云り、又みたけ山の東」

とも云説あり」

北 小路町 二所有、高館の南にもあり、本小路は城北の町也、

慶徳村は城北の」

町●今の地●移せり」(24ウ)

道場小路 北の沢の南之 神明社北入口に社跡有寛文中に松野村へ寄」

今若松の北小路町馬場町高野町道場小路など、云、皆新宮落

城」

の時移して本名を呼と之、文亀天文永祿の頃書置るものにも門

田」

の庄を祭りの役者に載なり、故郷のゆへ有を以てなるへし」

大城 見明の池 三嶋」

社家町と城の間を今北の沢といふ、此城新宮芦名六郎左衛門尉

時連建」

曆二^壬申年築玉ひて流葉新宮次郎盛俊迄六代住せり、應永二十」

七庚子年落城、是時連は佐原十郎左衛門尉義連の子遠江守盛連

の」※10

六男之、今城の跡東西二百二十歩余南北二百歩に余り本丸東西

七十二間」

南北八十六間、本丸の北に犬追もの、馬場とて有、城の東に見

明の池とてあり」(25オ)

池の内に三嶋を築り、蓬萊方丈瀛州、熊野三嶋の古事あれば

城」

主より以前にあるなるへり」

古館 大城の丑寅なり、元和八^壬戌年に村居とす

今年安政七申迄 百三十九年 たり」

北の沢 神所と城の間之、近來かけ入て沢深くなれり」

はい塚山 古しへの墓所なるにや古き歌に」

たちのほるはい塚山の煙ともきへはや人を思ひわすれん 讀人不

知」

小山新田 はい塚山の麓なり、寛永二^乙巳年村居とす 今年安政七申迄 百三十六年」

牛王の宮 護法の宮とも」

はい塚山のひかし大城外堀のほとり之」

駿河館」(25ウ)

するか山の麓なり、東西三十四間南北四十四間、山門の守護職

の居館」

なり、文亀明應の頃西海枝駿河守、永祿には平田氏を置玉ふ

之」

駿河守は太守の一門にして此頃威勢ある人なり、棟札に見ゆめ

り」

地こく沢 ふみまよふ心の鬼や地こく沢 貞宜」

天神と神山との間を東へ流れ出たり、新宮城下の時科の者を罰

する所之」

方丈谷 霧か窟の下なり」

新宮山門全盛の時の方丈の地といへり」

霧か窟 神の蔵の西之 春風や霞はしつむ霧か窟 琴松」

草鞍山 霧か窟續の山之 月や召す草鞍山の秋の露 慮帆」

経塚山 山崎西に高き山之」(26オ)

昔時高寺全盛の時鬼門に當て此山上に経塚を築りといへり、

寛」

文中此塚を穿て石櫃を掘せり、此山の東南麓に青木の」

森聖徳寺の古跡と云所あり、又一遍上人新宮に來歴して」

此山に一字を建と云、其寺今若松當麻山東明寺なり、此所より移せりといへり、高寺は欽明天皇元庚申年建と云々」
山崎村 神の藏南の麓なり」

慶長十六年の大地震に此村の南大川地形ゆりあけて水湛へ」
新湖となれり」

會津川 山崎の南を流る、六帖集のうたに」

心にもあらてわたりし会津川うき名を水に流しさる哉」(26ウ)
桜か瀬 山崎より下也、浪岩にせかれて泡花をなせり」

眞木村」

村の上り會津川なり、十景あり、泡卷屏風岩白糸の瀧御稷神二本」

の枚平野高原岨溪上漁窓前溪流定林暮鐘なり、肥前国無為居」
作せり、記すこと左のことし」

泡卷屈曲 櫻か瀬の下之此測に應永年中大蛇浮ふと旧記二有」

蒼龍卷沫幾千尋屈曲終無測淺深危岸足寒潭底」

影何人不起恐懼心」

きえもせずなかれもやらて幾とせかた、よふ泡の卷かへるらん」

南岸瀑布」(27才)

一練瀑泉懸碧岸飛流濺沫對窓竒素絲長不染」

紅緑到此那生墨子悲」

むすふねの雫も涼し色、に染む所なき瀧のしらいと」

屏岩倒松」

一株畫出古岩前根向峯頭標向川生質既違天地位」

清風何必送千年」

直なる代をさかさまの松なれはいかて千とせの秋を、くらん」

窓前溪流」

万派同歸入一川急流日夜對牕前古來逝者」

●斯耳努力青春諸少年」(27ウ)

たれかまたゆく影惜き年月と流る、水にたくひそめけん」

溪南歸商」

満目風光満目情暮鴉飛尽暮雲生村前山下一條」

路満水歸商酌聲」

是かたに世のはかなさはしられけりおくれ先たつ岨の市人」

高原躑躅」

緑野欲燃紅躑躅淺深争色満東西孤筇相伴艶揚」

日行尽春風北渡溪」

野も山ももゆるはかりの岩つ、しいはねは人のしるよしもなし」

溪上漁翁」(28才)

溪風山雨簑衣日擲漁竿遶名磯欲乃夢中寒」

月落孤舟捲得釣熊歸」

身のつみのむくひ有ともしらなみのうを、はつらて魚につらる」

稷社二杉」

御稷神靈小社存二杉并縁交其根水南水北去來」

客只見樹頭不見村」

三輪の山それにはあらて二本の枚をしるしの真木のむら立」

平野草花」

小田香原の内之、東の山を笠松と云、北を高原と云、西南を

平野と」

いふ、川より西は長月村千咲原代衣原堅石山之、原の内に草

井の沢」(28ウ)

新宮沢銭神沢など云、みな此原の續之」

紅蓼紫秋美女郎野花交色各芬芳吟懷無限」

秋風裏胡蝶亂飛一夢長」

わけ過る千種の花のいろ／＼におもひみたる、野への秋風」

定林暮鐘」

峰泄暮雲泄峰群鴉歸宿嶺頭松真村城遠無名」

刹只聽定林禪寺鐘」

あすは又雨になるへき折／＼のこ糸ほのかなる入相のかね」

發句 さひしさのいろこそ見えね真木の村 廢翁」

豎石山 神山より一里斗西、高原の北之」(29才)

西は會津川にして数百丈崩落てけんそなり、此山や、もすれは」

崩て大川をせき留、會民の憂となる、此山の所は高館猿戻り馳」

か馬場大黒岩蛇巖山、東は大中そねに中そね館の越的場山」

的場山 館のこしの乾に高き山なり」

發句 入る月の失ころのへり／＼的場山 慮帆」

蜂火山」

館のこしなり、神山の西に高き山也、新宮城下の時狼煙を焼し所之」

備中山 横打山共云」

新宮城下の時家老大竹備中守山之、其後新宮次郎盛俊高館籠城」

の時此山にいし弓を張り材木を落し横打したる所之」(29ウ)土橋山」

盛俊籠城の時ばかりて土橋をかけおとし穴にて敵多く亡し」

となり、故に名付ると、此山の北の谷小布瀬本道之此道を切ふ」

さき瀧の沢藤沼沢を湛て大堀としうしろは豎石大川の」

險岨を頼て籠城すと云々」

天池 雨こひ峠共云、館の越續きなり」※11

往古より早魃の時新宮三別当此山に登りて雨乞の法あり」

むかしは山上に清龍の池とてあり、雨の宮ありと云々」

高館山」

盛俊籠城の山なり東西目の下に見えて無双の景地なり」(30才)

昔の井の跡今猶存す、此城應永十年對陣して同二十七年」

七月二日に落去云々、此山の西に火付なみとて平場一段あり其頃木立繋り合たるに西風烈きを得て寄手火を、なつ猛火」

山上に焼上りて此城落といへり」

盛俊築城雖強茲 會軍蜂起日攻隨 勇威起世却遭禍」

火放置松風烈時」

蛇崩山 高館の乾之」

享祿四年三月朔日此山ぬけあゆみて大川をせき留、大蛇出て飛」

たり云、一日一夜下流を一滴も通さすと云々」

西明寺坂」(30ウ)

越後への通路之、むかし鎌倉西明寺殿行脚の御時此●●やすらへ急」

雨を凌ぎ玉ふとて名付と云り、天正年中迄やすらひの松とて古き」

松有、今此道慶徳への本道と成ル、古しへは高館の北葭沼を

沢に付て」

新宮へ出て鏡目第六天塩川を経て黒川順道とす、是越後への」

一道なり、又越後への本道は羽賀のわたりをこへて高寺より宇内」

のわたりをこへ青木佐野を経て黒川順道之、往古の本道は青木」

より曲沢砂越北田を経て大寺へ順道之、天文五年六月廿八日世に」

是」
白飛希水と云、此時佐野の村中を押切て大川日橋川に合せり、

より此道宇内の渡りは橋と成て佐野の渡とす、其後慶長の地震に」

山崎前水湛へ菖蒲沢高寺街道廢て今坂_下を本道とせり、然るに」(31才)

又片門の渡り船頭今西明寺殿御印證_並芦名家先太守の」
添状持り、しかれは西明寺殿片門の渡りを越て新宮へ出玉ふ

か」
舊記に西明寺のわたりとあれば此所にて舟わたし有しにや、

天正」
年中平田輔範茸狩に来てこの松の本にて」

なれもまた思ひ出らめ古しへを雨のやとかせやすらへの松」

比丘尼平」
新宮の神所と慶徳の間の山之、若狭国小濱に住す八百比丘

の」

舊跡之、元亨建武の頃は新宮の城主平の時明の母從満大」
師_ニ此寺を再興して住せり、明星の井とて山門のところにもあり、この」

水いかなる旱魃にも不滅、霖雨にも不増と云り、開墓の尼此水を飲て」(31ウ)

八百年の壽をたもつとて延壽水とも號り」
尼祖曾茲修念佛 道場自涌箇靈泉」

天神所感浴之後 齡寿長延八百年」
智延艸」

不動たいら」
佛像運慶刻めり、新宮城下の時堰の水_上たる故に伏拝の本尊」

を此所に安置し奉るなり、今慶徳村に移せり」※12

濁川」
天文五年六月廿八日示現寺川濁川に合して是より川瀬」

荒て新宮の舊地多は欠落たりと_{云々}、其後又濁川の水上」
大平の山慶長十六年八月の地震にぬけ落て沼となれり」(32才)

此川一の御手洗川なり、示現寺川は天文六年迄は一ノ堰源太の方へ流」

れり、然し間往古は今のことくならて川の東西皆在家之川も橋有」

と_{云々}、此川參詣の人精をなす所之」
發句 ほんのふの垢や流るゝ濁川 貞祇」

櫛川 大檀二の鳥居」
濁川の東に有り、大木と大沢の間南へ流たり、西岸に大檀、

の」

鎧召

の西に当る、此所新宮二の鳥居建しと之、往昔六月大祭の時

櫓の御假屋建りとなり、此川岸迄新宮在家町云々

發句 御手洗や実の名にしをふ櫓川 是拙

三の鳥居二(32ウ)

今鎧召の東に鳥居田と云所有、貞享二年此所●り大成柱根をほり出せり、二本の柱の間四間ありと、是古しへの鳥居柱之と云り

此所に土中に鳥居石とて大石ありと云々

第六天 蓬生原の東にあり

新宮社より東へ行程五十余丁有り、新宮全盛の時一の大門と

す、今第六天村と云、又塩川の北、新宮三の鳥居、鎧召の東は二の

鳥居と云説もあり、或説に第六天は行基建りと云々

駒形 馬頭観音

傳に云、此駒形原創立は新宮に同し、源君東夷追討の後に戰場に駕玉ふ馬を神馬にひき玉へり、此馬をつなき草飼所駒二(33オ)

形原と云、此馬天上して空中にいはへ失たりと、其繋ける桜木を

以て馬頭観音を刻み駒形と崇め公命に随て塩川に馬市を

たつといへり、又本流の観音と云説有、舊新宮は河沼郡熊野堂

村の地なるを 源君陸奥守に任んし玉ひ御下向の時今の地

に

三所を移し造立まし／＼きとなれば此時に駒形原神馬所に

せりと、上江村東なり、延寶年中に塩川に移すといへり、来

歴の部

に委し、此馬空中嘶聲あること七日、遠近是を聞く、後に磐

梯

山に跡を留と、其所を厩かたけといふと云々

大沢村

此村新宮の舊記に東大木と有り、所謂内大木は今大木村、西

大木は二(33ウ)

今の田原なりと、今大沢村観音堂の跡村の旧記●會津川

の北岸にあり、此本尊今羽州米沢笹野の権現と崇むと

いへり、乱世の時此本尊失せり

名にしあふかひこそなかれ大沢の人を見るめのなしとおも

へは 大沢次房

鶴塚 大木と田原との間なり

むかし大木村に一人の長者あり、万寶にあきみつといへとも

子なし、一

の鶴を飼へり、其鶴千年の境に至れるにや失せり、夫婦悲し

みの

餘りに僧を供養し一の塚となせり、有夜其鶴彼の妻の夢に

まみへて云、夫婦前生に悪業有ていま子なし、われ妙法

の

とくにより人身をうく、汝か胎内にやとり家をさかやかさん、

ひとへに二(34オ)

観音の誓へを頼むへしとなり、果して其とし夫婦奇異の

思ひをなし一院を造立し観音を安置し導師に徳一大師

を頼み奉り是を初とし會津三十三所順礼、観音を世にみち

ひき玉へりとなん、大木観音開眼の時徳一大師の歌に

よろつ世の願ひ大木の観世音まよひのやみを照したまへ

や

限りあるうき世をさとれ鶴塚の千とせの跡も同じ道芝 直

昌二(34ウ)

来暦部

元明天皇^{四十三代} 六癸丑年會津郡山之郡ト分ツ

聖武天皇^{四十五代} 天平元^二年行基到耶麻郡松野村、一笈

之間於弥陀観音地藏三像營一字安置、慈福山千光寺號

又寺以北三森山西蓮寺宮為奥院僧坊三百六十宇也

光仁天皇^{四十九代} 高寺廢矣、往昔僧坊三千余宇在、此山三十代

欽明天王^{五十四代} 開山教師惠隆南岳之惠慈弟子也

河沼宇内村之山中舊跡有之

桓武天皇 五十代

延暦十二^{癸酉}年小川莊西村八幡艸創^二(35才)

平城天王 五十一代

大同丙戌年徳一建於野沢村金剛山如法寺安置観音像、此頃

堀内ト云者建於耶麻郡小布瀬郷布瀬山大同寺安置大日像

同丁亥年空海建於磐梯山麓惠日寺自刻丈六之薬師安

置之、此頃徳一柳津円藏寺ヲ建

同三^{戊子}年坂上田村丸因弘法ノ勸化建高寺惠隆寺、千手

観音於山上長二丈八尺、脇三二十八部衆長六尺七寸也

同五年积勝道上人日光二入

宇多天皇 五十九代

寛平五^{癸丑}年萬葉集成^二(35ウ)

安比豆祢能久尔乎佐杼把美安波奈波婆

斯努比尔世牟止比毛牟須婆左祢

醍醐天皇 六十代

延長二^{甲申}年三月十三日左下観音祢無頭観音

同五丁亥年延喜式成献 帝神名帳所謂會津郡二座

伊佐須美神社蚕養国神社耶麻郡磐椅神社也

村上天皇 六十二代

康保元甲子年空也上人建河沼郡冬木沢八葉寺

後冷泉院 七十代

天喜三^{乙未}年伊豫守源頼義征於凶賊安陪氏在奥州感靈^二(36才)

夢勸請於稲川莊塔寺八幡宮同勸請於熊野三所、今河沼郡

熊野堂村之地也

同五丁酉年六月三日源義家修造於塔寺八幡宮也

康平五壬寅年九月十七日安陪貞任亡又十一月二十九日^{云々}

傳曰、義家販洛之時會津社戰場駕玉ヲ所ノ連錢葦毛馬献神

鞍下鏡新宮社之重宝也、神馬原株櫻ニツナク、後馬嘶上天去

空中有聲、七日遠近聞之、此馬磐梯山ニ跡ヲ留、故謂厩力嶽

ト

又神馬株所ヲ駒形原ト云、人奇異ノ思ヲナシ櫻ノ木ヲ取

テ馬頭観音ノ像ヲ刻ミ一字ヲ造立シテ安置ス、是今ノ木

流村ノ観音也、又或記塩川村ノ観音也ト云、又同木也ト云^二

(36ウ)

今ノ新宮移時塩川ニ移カ不詳、恐クハ同木ノ説ナルヘシ、駒

形原ト云地鹽川木流両所ニアリ

白河院 七十二代

應德二乙丑年源義家公建熊野三所于耶麻郡始名新宮

也 傳曰、賴義公義家公最初勸請者河沼郡熊野堂村之地

也、後經二十餘年永保之始義家公又任鎮守府將軍陸奥守

入府故国土皆從也、有清原武衡家衡者據羽州金澤城叛也

義家雖攻焉固不降、故暫退軍於當郡暫抛于尾山村御館

山時感靈夢自河沼郡熊野堂村今耶麻郡新宮ノ地移造

菅玉フ故新宮ト云、今年造宮始寬治三年云々又曰社領百廿(37才)

余村東塩川北高額西極入杉山ヲ限、社僧三百六十宇祢宜

神主百餘人云々

堀川院 七十三代

長治二乙酉年八月義家公六十五歲而薨^云」※13

高倉院 八十代

治承三^云亥新宮前殿鰐口鑄造

銘曰 熊野山新宮寶前奉施入田四尺五寸鰐口一口

治承三年八月日

承安元辛卯 新宮寶器銘此年カ

銘曰 勸請新宮小守宮 地頭代左兵衛少尉藤原知盛^云(37ウ)

頭所代右兵衛少尉平国村

彌勒元年辛卯二月廿二日

又 勸請十五所宮

會津新宮 大勸進僧淨尊證一

彌勒元年^辛卯二月廿二日 横三即玄戸廣末

此年号未知、此年ノ前年梅桃九月花咲、故二世俗彌勒ノ出

世ト云ニヨリ私ニ作り書ナルヘシ、寬喜三^辛卯ハ新宮地頭相

續ノ頃也、天永二辛卯ハ鈴木木部頭所ナルヘシ、後考ヲ待ツ

安徳天皇 八十一代

養和元^辛卯九月二日越後国城四郎長茂會津出羽越^云(38才)

後之勢ヲ起向木曾、同九日信州横田河原ニテ惠日寺ノ僧

淨丹戰死、此頃大寺高寺ト相論ス、長茂大寺ト心ヲ合高寺

ヲ亡ス、此序掠新宮棧社領是向信州時不應催促コトヲ

憤テ也

後鳥羽院 八十二代

文治五^庚亥年右大将頼朝公奥州秀衡子泰衡ヲ亡シ玉フ、此

時會津四郡ヲ佐原十郎義連ニ賜ル、因茲社領悉没収

建久三^壬子新宮ノ長吏鎌倉上リ由來并社領没収ノ旨ヲ

右大将家ノ達高聞、社領二百町ノ印證ヲ賜、同年有信故

頼朝公文殊ノ影像ヲ新ニ為刻安置也、是運慶作也^云(38ウ)

同六年岩沢ノ二王造立銘曰 大佛工僧 仁助

奉造立金剛力士形像各一軀 木圖像僧 杲成

建久六^癸寅二月吉祥日始之 大旦那僧 琳覚

土御門院 八十三代

正治元^己未年正月十三日頼朝公薨玉フ、御年五十三

順徳院 八十四代

建曆二壬申一交了新宮大般若經書加

同年芦名六郎左衛門尉平時連新宮築城、新宮氏トス

後堀河院 八十五代

嘉祿三丁亥隆寬律師謫于奥州也、其地耶麻郡加納莊上三^云(39才)

ノ村願成寺也、同十二月十三日隆寬化于飯山故移骸骨來而

葬于上三宮也

後宇多天皇 九十代

建治三丁丑一遍上代新宮來歷南嶺二建一字、今山崎村北嶺二寺跡アリ、又黒川東時寺建」

伏見院 九十一代」

永仁二甲午黒川二信州下之諏訪ヲ勸請ス」

同四年新宮寶器之銘曰」

奉懸會津新宮證誠社御正躰一字」

永仁四丙申正月十五日 物部友安」(39ウ)

藤原氏女」

新宮若一王子神器施主同斷」

同中ノ御前神器同斷」

右藤原氏女者太守芦名修理大夫盛員之妣也、寶積寺殿金」

峯尊公大姉也、盛員中前代峰起之時於片瀨父子討死矣、高」

十八歲幼年成立間女主立、物部氏撰由也」

花蘭院 第九十四代」

新宮牛王形木裏曰」

奉寄進牛王判形木

願主 知城房」

文保二年戊午十一月二日 禪覺房」(40才)

●^{後方}醍醐天皇 九十五代」

元亨三新宮神器銘曰」

熊野山新宮證誠殿御正躰 願主 城仙房」

元亨三年癸卯十二月廿四日 妙性房」

又熊野山新宮兩宮結御前御正躰願主右同斷」

又中御前御正躰願主年号右同」

同四年新宮神器銘曰」

敬白奥州會津熊野山新宮證誠殿御寶前奉鑄懸」

三尺御正躰一面事」

右奉鑄懸三尺御正躰一面、志趣者為天長地久御領圓滿」(40ウ) 別者當莊地頭領家山門繁昌々々、殊者先長吏尊性龍華々々、々々必開覺悟被、敬奉鑄懸文也」而已」

元亨四年甲子晚夏廿八日 願主比丘尼法明敬白」

大旦那比丘尼從滿」

大旦那左衛門尉平時明」

助成結縁衆一万三百三十三人」

大勸進比丘尼道仙^并道觀」

筆者入寺住持希雪」

傳曰、時明者芦名六郎左門尉時連之孫也、所謂時連宗明」

時明明繼也、此頃時明母從滿大姉比丘尼寺再興、又入寺ノ希」

(41才)

雪者一之寺ノ法務也」云」

正中二乙丑新宮神器銘曰」

敬白奥州會津新宮御寶前奉鑄懸十一面御正躰」

正中二年晚冬十五日 鑄師兵衛尉 助成」

大旦那比丘尼 觀全」

大勸進 道觀」

大勸進比丘尼 觀々」

元弘元辛未年芦名遠江守盛宗綾金村觀音堂建」

建武三丙子新宮大般若未書曰」

建武三丙子 筆者 三位日俊郷筆」(41ウ)

光明院 九十七代」

曆應四辛巳新宮神器銘」

陸奥国會津山郡熊野山新宮證誠殿御躰」

大旦那妙悟」

曆應四年^辛己六月三日 大勸進比丘尼明月

大旦那平内次勞

大工 円阿

同子息定能

結縁衆十万人

貞和五年新宮大鐘鑄^二(42才)

銘曰

奉治鑄 奥州會津熊野山新宮社鐘一口

一山衆徒三十人

大旦那從滿大姉

同地頭平朝臣明繼

阿闍梨覺賢

結縁衆百余人

大工 景政

貞和五^己丑年七月二十一日 今年安政七庚申マテ三百九十年

後光嚴院 九十九代^二(42ウ)

文和二^癸己五月八日勝常寺鐘成

同三甲午下野国那須金丸八幡宮鰐口成、故有新宮八幡

宮懸、今三所之前殿^二有

延文元^丙申正月新宮大般若經修補、願主大旦那妙空書

是地頭左五門尉宗明也

後圓融院 第百代

應安元^戊申源翁和尚新宮來歷北山麓結庵、郡主狩來入室

深感威風建一字、號紫雲山慶德寺

伏按會津之郡主者芦名彈正少弼詮盛也、然慶德者新宮

之、此^{スレ}以北則概新宮氏所建也、又按經德者新宮城下之内

而小字ヲ村名トス、詮盛他領來有^レ建^レ寺有又狩新宮^二(43才)

氏開基必乎 此時新宮氏者芦名新宮左五門尉時明也

同八年四月廿三日黒川東明寺鐘成、同七月十四日源翁示

現寺入院

康曆元己未正月晦日新宮地頭芦名氏於北田討死

同二年新宮中宮鰐口成銘曰

奉^施入奥州會津新宮莊熊野山鰐口一口

康曆二年^庚申正月十一日 願主伊豫阿闍梨

筆主直指敬書之

康應二^庚午年新宮南宮鰐口成銘曰^二※14

奥州會津新宮熊野山兩所鰐口大旦那沙弥正宗^二(43ウ)

康應二年壬三月三日

沙弥政宗ハ太郎丸河内守入道也^云

明德五^甲戌年良鏡祖、心二人之僧新宮大般若經書加、六百

卷之内此筆者多シ

應永二^乙亥年正月十一日源翁到那須密破於殺生石

垂示曰

汝元來石頭喚殺生石、靈從何處來、性自何處起、現今證據

成佛性真如全躰、三摩曰會麼去々結句曰

法々塵々端的底 本来面目未曾藏

現成公案大難事 異類中行任度量^二(44才)

應永三^丙子年春源翁到于慶德寺夜坐、至三更之頃一女現

面前問曰是何人、答曰先受濟度於那須野、謝恩自今為擁

護神頓為白狐卷尾跪居、少焉奔南山、故號山稻荷山又称

卷尾山

同九年新宮次郎盛俊加納莊領主亡、佐原氏同年北田氏卜

心ヲ合黒川ヲ窺フ」

同十癸未正月晦日盛俊新宮城ヲ落去、而小布瀬ノ城ニ籠」

同五月黒川エ和ヲ乞フ」

同年處海新宮ニ細字法華經ヲ納経筒銘曰抄法華經 聖者處海」

新宮熊野山経筒 作者禪藤二(44ウ)

應永十年癸未二月廿九日 申口所弘尊抄取」

同十六己丑河沼郡垂川禪定寺炎上、此寺月堂和尚創七」ママ

七堂伽藍之地也」

欄光天皇 百二代」

同二十年新宮盛俊謀叛自黒川所被置郡代ヲ討、高館二籠」

同年新宮軍塩坪軍遠田軍」

同二十二乙未年十一月廿一日夜黒川ノ兵圍新宮高館ノ

城攻、自是毎年戦有テ大ニ亂ル」

同二十三丙申年黒川興徳寺鐘成」

同二十五甲辰年三月廿五日惠日寺炎上、丈六薬師像又燼二(45オ)

同二十六己亥年六月廿九日夜自新宮小川城攻落、同七月」

廿八日夜小布瀬城自黒川攻」

同年七月黒川々自今羽黒押切ル」

同廿七庚子年七月二日夜盛俊高館城落去、奥川城二籠ル」

又自黒川攻落之盛俊奥川城落去、越後国五十公野住ス」

同二十八辛丑年傑堂能勝天寧寺ヲ建、勝者楠正成子」

也云」

後花園院 百三代」

新宮熊野山牛王印曰」

新宮熊野常住之牛王寶印二(45ウ)

永享二年庚戌正月吉日 作者山岸坊上野」

永享五癸丑年十月廿三日盛俊兄弟掬小川城谷沢奥人々」

谷ニテ自害、此時相伴テ死者参河守尾張守等凡十人也」

同七乙卯年新宮若一女王子御前鰐口成銘曰」

奥州會津熊野山若一王子御前鰐口也」

永享七年乙卯十二月廿七日 旦那申口所毫順彫工」

裏二若一王子旦那熊宮秀家」

右若一王子五所ノ王子ノ一也北ノ御前二懸リ」

文安四丁卯年塔寺鐘成」

長祿二戊寅年六月廿日日輪二並出、同八月廿四日芦名氏欲」

攻於伊達氏起七千余騎之勢金上氏大将也」

寛正三壬午年四月八日日三ツ並出」

同四年正月元日日三ツ並出」

後土御門院 百四代」

後土御門院 百四代」

文明六甲午年六月廿一日法用寺鐘成」

同十六甲辰年八月廿四日盛高磐瀬合戦」

明應元壬子子黒川乱盛高入于伊藤氏宅、九月塔寺八幡華表」

ヨリ血流出為禳災自官府令誦般若」

同三甲寅年五月十五日盛高卒兵三千餘騎入長井経二二十」

余日事平矣、此年四月晦日ヨリ八月迄旱シ諸穀草木枯也二(46ウ)

ウ)

同八年己未正月盛高圍綱取城、二月五日落城、是松本勘解」

由居城也、同六日松本對馬被戮今年大饑饉」

同七戊午年八月二十五日巳刻大地震」

同九庚申年六月一日新宮若一王子再興成就」

棟札曰」

多聞持

諸成事大梵天王

江

聖衆天中天

諸戒事阿弥陀如来

少貳 佛阿弥 少貳 四位 三位 定寸

迦陵頻伽声

碍文師文殊師利菩薩

尾張〔48才〕

上 答參誠戒師积迦牟尼佛

申口之擁護三合左エモン五郎 流寸

哀愍衆生者

戒行事普賢菩薩〔47才〕

其外下人 百余人

我等今敬禮

大行麦觀世音菩薩

筆者了通

增長 廣目

諸行事釋天王

後柏原院 百五代

〔一行あき〕

文龜元辛西十二月十日大地震

當寺守護西海枝駿河守

同二年新宮證誠社再興棟札文曰但佛ノ文八若一王子二同

芦名修理大夫

大旦那行次子申口所

末書如左

新宮北御前若一王子奉造立

同大旦那之祖母同母甘藏

奉造立新宮證誠社二間一面一字

明應九年庚戌六月一日

新田筑後守

文龜二大藏壬戌二月五日

本願祐尊聖十穀

熊鶴丸之母新宮十日

芦名修理大夫〔48ウ〕

中

行次子長吏所

當寺守護西海枝駿河守

行次子五郎〔47ウ〕

祐尊聖

ニクコイヤコトラ〔新宮十日〕

大旦那築田右京亮

大工越後国鯖瀬住人祝藤貞吉

同大旦那ノ母

右ノ方下

其子亦五郎

旦那ノ子申口

其子德四郎

同子長吏

イマ次郎

同子五郎

次東サヘモン次郎ヒコ四郎小次郎小五郎

鍛冶大工 右馬太郎〔其子兼四郎〕

郎

ヒコ四郎サヘモン五郎太郎五郎三郎次郎

右マ次郎ヒコ五郎イヤ太郎大工祖父ヒコ

四郎

大工越後国鯖瀬住人祝藤貞吉其子又五郎〔49才〕

鍛冶大工黒川住人右馬太郎 袖取五十人

小工ヒコ三郎 サヘモン四郎

左ノ方下

申口弟子 山城 土佐 式部 栄厳 近

旦那ノ眷属 近江

兩對靄子エモン五郎 大イ三郎 又五郎

大鍛引マコ五郎 杣取百四人

筆者了通

右棟札ニ昔名修理大夫ト有ハ大守盛高公也、寺守護西海

枝氏ハ大守ノ一門ニシテ此頃威勢アル人也、天文九年黒

川諏訪社再興ノ棟札ニ其頃四天宿老ノ旗下ノ地頭地連

名ノ中ニモ西海枝宮内大輔ト筆頭ニ載タリ、是駿河守ノ

息盛輔ノ叟也、又此時築田右京亮行次嫡子申口所ヲ續、次男

(49ウ)

長吏所ヲ續リ、故ニ長吏ヲ末ニ書ナルヘシ、在廳ハ南宮速

守護シ申口ハ北宮結御前ヲ守護ス、長吏一山ノ長ニシテ

中ノ宮證誠殿ヲ守護セリト云、舊記ニ宮山ヲ長吏山、駿

河山ヲ申口山、ミタケ山ヲ在廳山ト云、按ルニ三別當ノ名

紀州本宮ヲ移スナルヘシ、長吏在廳申口連今猶本宮ニ有

昔時六條判官為義ノ智熊野別當教眞之孫葉三家ニ分レ

テ三所ヲ守護スト云、今紀州新宮奈智共ニ此名アル別

當ナシ、又棟札ニ有所ノ祐尊聖は何人ソ、新宮寺ノ法務ニ

シテ一ノ寺ニ住セリ、貞和二覺賢阿闍梨康曆ニ伊務

阿闍梨ナト書ル此寺ノ法務也、社職皆當山開興ノ時義ニ(50オ)

家公被立置所也、熊野ノ社僧者天台眞言相交レリ、弥宜神

職モ往古者又然リト云

同年十二月十六日常世氏被戮勝氏三橋氏小荒氏追放

同三亥七月廿日黒川癸兵陣于本宮山内兵士到于長井

口、同年新宮大殿若経修補経匣書曰

文龜三甲子伍月日大旦那築田右京亮行次

永正元年甲子年大雨雪天下大饑饉、同二年盛高父子有隙也

同三丙寅年慶徳寺僧清源建眞木村清源寺

同十三丙子十二月十八日辰刻日三ッ出白虹吐焉、晦日大水

同十四丁丑十二月八日盛高薨、同十八年辛巳二月盛滋薨ニ(50ウ)

同年五月二日盛舜被攻南山城、同六月猪代ト黒川ト戦

大永壬午佐瀬安石建見頃村長泉寺住法相從林光也、此頃

新宮寺雅仁阿闍梨住シテ宗綱ヲ立ト縁起ニ有、未詳

同四甲申年山内乱、同年百日早ス

後奈良院 百六代

享祿四辛卯年三月朔日一蛇出于西明寺渡一日一夜不流

下流

天文二癸巳慶徳寺一峯建於宮在家村長傳寺

同三甲午會津伊達磐瀨白川ノ四將岩城石川二將ト戦

同五丙申六月廿八日大洪水大川佐野ノ北ヲ押切新橋川ニ合ス

(51オ)

此時込ハ金上ノ南ヲ西ニ流、世俗是ヲ白鬚水ト云、此時又

示現寺川濁川ニ合ス

同七年三月十五日日ト黒川諏訪社炎上

同八年八月五日耶麻郡亂、同十年猪苗代謀叛、同十二年七

月廿一日盛氏卒兵到于伊南伊北

同年新宮社大祭礼相撲田楽日記曰

一番 かのう 十三番 なかを

二番 かいぬま 十四番 つかはら

三番 かのふ 十五番 もんでん

四番 あうきか うちちかひ 定本新宮社野 六月會相撲日記ニ(51ウ)

五番 あかふし 一番 左まつのぬま

支龜本正ノ

支龜相違見ル

六番 よろいのめ

七番 あらわけ

八番 中村一のせき

九番 あやかね

十番 たらふまる

十一番 たかき

十二番 おふき

二番 右●●●左○ 左ふしき

三番 右まんりき 左若くかは 貞享以前一切縁と云

四番 右つつかはら

五番 左つかしあらしき 今大沢

六番 右にしあらしき 今田原

七番 右あらかふし 貞享以後赤星

八番 左よりのめ 貞享以後箱付

九番 左あらかき

十番 右あらかき (52才)

右一所定如件

田楽日記

万力能力高木経徳より衆徒

四人数合八人

奥州會津新宮熊野長吏

天文十四乙巳正月吉日写之

右神前之役相撲當社ニ用事ハ義家公武衡追討之時計略

ノ故有テヨリ毎歲六月祭禮ニ用ユ、勝コト十五番ニ及者ニ

ハ長吏名乗ヲ与テ在名トス、今万力能力ト云村名是往昔

相撲ノ名乗ニ因テ也、往古ヨリ會津七太社ニ分ツテ鎮守ニ(52

ウ)

祭新宮社ハ耶麻郡ノ大鎮守ニシテ東ハ金川北ハ檜原南ハ

大川ヲ境トシテ西ハ奥川郷極入杉山ヲ限トス、然ニ右ノ

記ニ門田アリ、門田ノ莊ハ黒川郷方社ノ鎮守ニシテ然モ河

沼郡ヲ隔テハルカニ此祭ニ加コト如何トナレハ新宮落城

シテ新宮ノ民家居ヲ黒川ニ移ス、因テ古郷ヲ不忘此時迄

役者ニ加フト云、今黒川ニ有町名北小路馬場道場小路高野町

等ノ名新宮ノ田畠ニ呼也、又松野ヲ莊ノ並ニ一村別ニ書

コト故アルニヤ、今モ大晦日ニ市アリ、往昔會津七社ハ耶麻

新宮熊野神社同郡猪苗代警椅神社會津郡蚕養神社同郡

八角伊舍須弥神社同羽黒神社大沼郡高田ノ伊佐須弥神ニ(53才)

社河沼郡塔寺八幡宮是ヲ七大社ト云也、黒川ノ諏訪社ハ

門田ノ莊ノ鎮守トス、是永仁以来也

天文十六丁未八月八日盛氏長合戰、今年盛興誕生

弘治三年耶麻郡宮在家古四王建棟札曰

大納言伊藤藤原義貞

弘治三丁巳年八月吉日 大工越前国浅倉太郎左衛門

檀那 三瓶常實

正親町院 百七代

永祿元午年京知恩院及刃上人下向 天子御飯依僧也

太守盛氏除爵之繪旨携来、青木村示現山聖徳寺ニ五種ノ(53

ウ)

靈寶ヲ置

同六癸亥年新宮社葺替棟札曰

奉葺社一字

夫當社熊野三所権現靈神也、侗本地無量壽尊醫王薄伽觀

在薩埵三昇也、為衆生守和光日域垂跡為群族利全塵東土

現化貴可崇此神敬合此廟也、積星霜香久移居諸稍遙棟梁

朽損軒椽破壞、而當社申口隱居時尅築田左京兆政秀且報

恩且為意願飽足励無二懇篤被奉上葺者仰願當所靜謐

傳家門榮花子孫鄉内安全流寺中豊饒末代令獲二世安樂

願望給敬白ニ(54才)

永祿六年癸亥四月十日

奉選宮

勝常寺住寺賢性

當時屋形盛氏騎男盛興

社寺奉行 平田常範

上蒼求 政秀

右ノ方

三別當 長吏寛成

在廳真空

申口弟子大円 寶藏 文識 祐海

一位申口内儀ノ母二(54ウ)

平田駿河守 同内儀

築田仁九郎 同内儀

渡部中兵衛 經德孫九郎三

赤塚彦兵衛 同内儀宇都木小太郎同内儀

生江平八郎母 佐野治部少輔 同内儀

築田左京亮 同忠兵衛 同次郎五郎

申口乳長吏弟子民部

龍藏院 經德殿武藤和泉守

元龜三壬申新宮社領卜地頭領卜境目相論アリ、黒川家ノ臣

富田氏實和談之状曰二(55オ)

今般新宮田原問答之河原某為取喫免御領所下地田原

之分相付申候、雖然從新宮無相違彼河原江被人從田原

被防間敷之由申理候、其上彼地互田留聊成不可相

起候、平左固彈御間敷敷存候故御異見候所御納得祝

着之至三候、為後日如此一筆相渡申候恐々敬白

元龜三年壬申七月十三日 富田氏実判

寛文其記三詳二出ス 新宮三別當進覽二※15

天正三乙亥年六月五日盛興薨同年知恩院及州僧正來歴

同八庚辰六月十七日盛氏薨、号瑞雲院竹岩居士

同十二甲申十月六日盛隆寵臣大場ニシイセラル二(55ウ)

同十三乙酉五月十日夜政宗入田附口ヨリ乱入、同十一日関

柴合戰政宗無利歸

同十四丙年十二月廿二日龜王丸早世、盛隆ノ子也

後陽成院 百八代

同十五丁亥年三月佐竹義廣會津ノ家督續アラタム改盛重一

同十六戊子夏新宮神山ノ神木数十本枯、同年秋熊野ノ

池又一ノ寺ノ泉水旱

同十七己丑六月五日政宗摺上原合戰、盛重無軍利常州佐

竹工落去

同月新宮ノ社土某一山ノ證判ヲ盜テ政宗工降參、新宮ノ二(56オ)

長官ヲ乞、三別當噉訴、因之社土會津ヲ逃去、米沢ニテ山賊

ニ被害云、此時自頼朝公所賜ノ二百町ノ印證并開記等

ヲ失ヌ、是當山衰困ノ初也

同十八庚寅七月十三日政宗米澤工移、同九月五日蒲生幸

相氏郷黒川ニ打入玉ヲ

文祿元壬辰氏郷黒川ヲ名若松

同三甲午鎮下稻初穂施入

同四乙未二月七日氏郷於京都逝去、同年七月十三日蒲生

秀行會津工入部、今年新宮稻初穂無施入訴之官府札

明鎮下兩年分今年施入二(56ウ)

慶長三戊秀行野州宇都宮工移玉ヲ、上杵景勝會津二

入部

同六年辛丑八月廿五日景勝羽州長井ニ移玉フ」

同年九月廿六日蒲生秀行宇都宮ヨリ會津イ再入、此時」

新宮社衰困而破壊ヲ訴フ、来由ヲ紕玉フ、往昔 源君奉納

シ玉フ鞍鏡ヲ呈上ス、修補ヲ加社供ヲ寄附シ玉、其文曰」

會津於領分御知行五十石寄進候全可令收納者也」

慶長六」

十月十八日 秀行判

御墨印付文字ニ秀郷ト有、
蒲生氏ハ依藤ノ裔ト下、
然レハ先祖ノ母ヲ用ヒ来リ玉ヘ

新宮別当坊

〔57才〕

同十乙巳年自檜原山石森山黄金出ル」

同十一 丙午五月十一日蒲生忠郷誕生シ玉フ」

同十六 辛亥八月廿一日巳剋大地震、是ヨリ月ヲ越テ不止、此時」

新宮ノ神社佛閣倒テ三所ノ神殿計残、此後三社ノ前殿ノ」

外無造宮、此時山崎前大川ノ地形ユリ上テ流水湛四方七」

里ニ横流シテ新湖ト成ル、青木聖徳寺觀音堂湖水倒、越後」

海道高寺通スタレテ坂トニ移ス」

同十七壬子五月十四日秀行薨、号弘真院殿前拾遺覺山」※(別

筆)

静雲大居士」

同十九甲寅年蒲生忠郷新宮三所ノ神殿前殿修補」〔57ウ〕

シ玉フ、棟札文曰」

夫當山由緒者熊野三所権現奉勸請三所権現是也、本」

宮者弥陀如来應用撰取不捨大願光明遍照威光世、神」※(別筆・

終)

宮者医王逝化現一經其耳衆病悉除如来、那智千手」

觀音分身示現衆生福聚海無量尊主也、然處慶長十六」

天八月廿一日巳剋大地震、故悉以大破依去雖五濁亂」

滿瀆季太守修造給依、而當村衆并耶麻郡々類道俗男女」

蒙衆力集材木石俄從卯月至當月造畢也、依之今月今日」

新造長床供養、會津郡中參詣群類人々續踵如稻麻」

竹葦數萬詣衆無雲外郭土同證佛果起因也、尚以神」〔58才〕

前參詣万人永家門榮花子孫攘災與樂德益積万代不朽跡」

寶倉庫孕溢基也、殊當所静謐安穩無為社内安全百姓人」

民如意飽足如件、從往昔任先例醫王山勝常寺法務日道上」

人、催諸衆理起三昧法事并本願長吏在廳申口大同寺養林」

房龍藏院滝本坊別當太夫安濟老」※16

當時御屋形下野守殿、天下」

將軍家康公之御孫也、并三

奉行町野長門守稻田數馬」

助岡越後守、御城取次内堀」

伊豫守當所給人廿七人、肝」〔58ウ〕

煎三人、大工七郎左衛門、葺」

手掃部助、鍛冶彦七郎」

勝常寺常住日道上人」

寛永三才再在公所新宮寺之重寶呈上官府、其中二八幡太郎」

義家公昔年東夷追討之時戰場乘玉ふ所の鞍と鏡有、鞍の前」

山形に以金義家之二字同後ノ山形ニ置心明鏡如臺と有、當」

社第一寶也、無返與」

同四年正月四日忠郷薨」

同年丁卯五月五日加藤左馬介喜明公會津入部シ玉フ、同」

十七日國中ノ寺社任先例賜供産、此時霖雨頻ニシテ洪水溢及」

〔59才〕

遲參ス、遲參ノ不義ヲ以奉行終不判談、徒ラニ此時失社領」

法職暫絶」

同八^辛末九月十二日喜明於江府薨、号松花院殿」

後光明院 第一百十一代」

同二十^癸末年太守明成貶石見吉長」

同年八月八日 保科肥後守正之公會津二人部シ玉フ」

正保元^甲申秋延行院新宮社修補ス 棟札寫追加ニ在リ ※17

同二^乙酉三月廿四日新宮社萱供養、此時迄別當絶タルコト十

九年、末社末寺皆他山ノ法ヲ續テ宗旨ヲ改流寺ヲ離、延行

院自然ニ新宮寺ノ住職ト成、若松弥勒寺ノ法流ト成ルニ(59ウ)

新院 第一百三代」

寛文四^甲辰年 太守公新宮社ノ来歴ヲ有 御礼依」

貴命友松氏興有社參内殿二人テ鎮座ヲ明シテ尊躰各寸尺ヲ

改メラル」

傳曰、氏興依 貴命參詣シ玉ヒ當社ノ来由ヲ詳ニ糺シ玉ヒ」

社僧ニ向テ曰今度鎮座ヲ可糺蒙 貴命ヲ内殿ノ神扉」

ヲ開カルヘシ、重慶曰往古ヨリ秘密ニテ別當社司ト云」

トモ直ニ尊体ヲ拜スコトナシ宮殿修補ノ時二ハ七日ノ精

ヲナシ深更丑刻ヲ得テ燈ヲ滅シ白布ヲ以面目ヲ隠シ」

新菰ヲ身ニマトヒ遷宮ヲ奉スル例也、押テ拜ル者神罰ニ(60

オ)

遠からず譬となるのみ傳へ侍り、氏興曰譬と成るは輕事之」

即時に死とも君命之、何をいとふへき、速に扉を開くへし、

村長何」

そ存し当り無きや否謹曰御戸開田と云あり、此内殿を開た

る」

興の云」

汝か言然り、如^{コト}當社は御戸開の神事有、其者の領に必せり、

別當」

速に御扉を開へしとなり辞するに詞なく神扉を開く、即」

内扉に入玉へ寸尺を改玉へ前方御糺の時弥陀薬師觀音の」

像之と云と有り、固之某貴命を蒙れり、御束帯の神躰六尊」

※18

ト一々指教玉へ神扉を閉させ外陣に退き玉ふ時證誠殿の」

御鉢の内に四五寸計の白き小蛇あり、氏興曰當社は靈社に

てニ(60ウ)

座す故臣今日の糺し不直有やと白蛇を出し給へり、汝等近

く」

居寄り能々是を可見置、近士の曰至小なる是白蛇か、對曰白

蛇」

白龍に等し、變形する時は至大と成りて雲を凌ぐ、至小なる

時は」

粟粒に等し、鱗に障る事なかれ、障る時は忽害を為す」

と戒玉へ汝等是を見ヨと宣ひ小刀のみねを以て頭より尾に

及て撫玉ふ事二三遍、金石に當る如き響有り、少馬^{スウマ}ありてか

き」

消如く見へすと云々、又氏興村長に曰往昔前殿高さを問」

玉ふ、村長謹て縁の下馬上に有も障らすと、氏興曰汝能知

れ」

如此の大社に下馬あり、禮を知る者可駕成、武士は丈尺に疏

し」

早く曉^{サハ}さしめん為其器を以譬を言也、其義を誨んか、譬へ」

(61才)

て可云事は一言を揚る時は不乘事明々けしと云々、又社領と

地頭領と出入ありし時芦名の家臣富田氏實元龜三年

自筆和談の状證誠殿内陣の神扉の内の方に張付置けり

知る者なし、氏興自ら剥し玉へ是後世の重器とも可成者也、
不

可漫とて渡し玉へり

同年新宮社從 宦府修復シ玉フ

同年新宮社為賑御花畑ヨリ杉苗若干下シ賜リ社地ノ四壁

二植サセラル、同菅勝兵衛 御代参

同年新宮寺法務重慶有 貴命祈願所ヲ歸舊例

從宦府御書付曰〔(61ウ)

覺

殿様 御年五十七

奥様

筑前守様 御年廿二

同御新造様

市正様 御年十六

今猶御所勞氣ニ被成御座候間其旨を被存別而御息災御延候所

之御祈禱專一二候

右御安全瀨長久之御祈禱抽丹誠一候被遂行者也

九月吉辰

菅勝兵衛

新宮村熊野三所権現

赤羽市右エ門

井深茂右エ門

新宮寺〔(62才)

同五乙巳年國中舊記ヲ糺シ玉ヒ有於風土記御撰、此後舊事

雜考御編集、新宮ノ遺記兩書ニ悉載玉フ、同年諸山ノ遺記

可呈上有貴命其時ノ大意曰

東奥會津耶麻郡熊野山新宮者津陽城行程三十五里而今

當郭之乾也

當宮者昔時 後冷泉院之御宇多田滿仲之孫裔源賴義公

同八幡太郎義家公東征、而赴奥州欲於夷賊安陪貞任宗任

討、天喜康平間爭鬪之時祈于熊野三所権現而願譽揚於精

銳中意遊飯洛、則築三社於東奥將成其誓願、而到奥州觸軍

威於四圍拔武勇於甲兵悉擊殺於貞任宗任之一簇平治国〔(62ウ)

家、東国之群士恐懼於義家之武威而竟畏服矣、義家歸洛陽

後賜賞叙任從五位出羽守也、於茲東面築於三所権現廟基

康平五年定地得此郡號名熊野山新宮附供産也、加施宮前

創高閣藩籬中靈堂末社東葉師堂文殊堂西有阿弥陀堂

南虚空藏堂北有十王堂又末社會諸神列其間也、社僧務

職奉從而祭此神魂表祝禮奏舞樂于殿上以治神事之制也

偉哉、靈瑞應現鳴世年々六月十五日貴賤運心不遠數百里

之風烟來詣于宮前及今矣、時世推移靈蹤大半穿破、而供産

之斷矣越慶長中前津陽太守蒲生秀行公命社職問於義家

創建之證來社職諾告舊因呈上銘義家姓名鞍鎧於公殿矣〔(63才)

故太守感得、而屬為先之例附社供五十斛也、同十六年秋地

震連日振動、而岳顛摧河水涌溢宮社間欲没倒達于太守之

高聽奉命修壞宮廢社也、寬永年中加藤喜明公就封于津陽

時准舊例賜供産於諸寺社專受其稅也、於是當宮從者又要

獻於先矩之證判赴城下、恨暴雨頻々河水激漲行程判斷尚

矣、故時移不達公聞、又關於社領舊例也、自尔以來靈堂末社

自氓絶而唯有三社高閣而已、然後寬文三年僧申某要修廢

社奏宦府達希望於 當位貴太君之 公聰奉祿興營宮殿

高閣重肇 始也、是非所謂神之遺風乎、吾寺院者從來社

僧職冠社僧中故號熊野山新宮寺、雖然年曆遙而住職之階」(63ウ)

數又社絶矣、大永中雄仁阿闍梨住吾寺續、其絶起宗綱新謂

是中興之宗師也、其後嗣次亦断矣、近来日道有林養宥慶

野釈^某唯四世附屬寺院恭敬宮殿奉從者也、列于津陽弥

勒寺之末流有慶稟密灌於前弥勒寺宥盛法印自是歸

弥勒寺裔也、當社開闢以往至當稔曆算五百四年坎、當

寺中興後百四十餘年也、艸創是同當社洪基今茲春之

孟依鈞命往々顕着於諸山之舊記當社是年代阻隔而雖序

次不明略述來由之大意以呈 官府謹而監焉

維時寛文五乙巳年二月下幹

當社別當熊野山新宮寺三光院」(64才)

真言沙門阿闍梨重慶

同年六月 太守君新宮三所 御社參

同九^己酉年八月十六日筑前守正經公會津^マ御入部

同十二^壬子年三月新宮社御修復有」

延宝七^丁未年會津七太社之鎮座^ヲ紘玉才友松氏興 御代參

玉山講義御附録御奉納^{上御社}

貞享元^マ甲子十二月十八日 太守公於江戸薨給、猪苗代磐梯山

麓見称山二葬奉號 土津靈社

靈元院 第百十三代

延寶二^甲寅年六月新宮社有御修復、大奉行山田利兵衛」(64ウ)

船尾九右衛門小奉行也、同年九月十五日雪降二尺許

同四^丙辰年自四月至八月不雨降

同年新宮社大祭田樂相撲日記天正年中兵乱時紛失百年^{ニシテ}

今年出、同八^庚申年閏八月六日諸國大風、別^{シテ}坂東烈高潮江戸

靈巖

嶋深川本庄佃島家流人多溺死、東海道悉柔吉原戊洩往還絶回

富士根方^一越^レ船、横須賀城下人馬溺死、荒井舞坂大變驛路並

木吹

倒、同十月下旬ヨリ至十一月下旬長庚星現、自西至東幅三尺長

三十間

許、十一月十八日有一星吐白氣、自坤至艮長如布引

同九^辛酉年十月三日 太守正經公薨給

天和元^辛酉年六月五日新宮社御修復有、大奉行船尾久太夫

(65才)

小奉行山田利兵衛也

同年三月朔日 太守正容公 御入部

同年春新宮文殊像紛失、同四月北ノ澤ヨリ出

同三^癸亥年九月二日南ノ山塩屋郡三依郷五十里村山崩湛

水成湖水

同年四月 太守君 御元服、同十七日日光山 御代參

貞享二^乙丑年三月鎧召村鳥井田ト云所ヨリ大成柱根二本

堀出、兩柱ノ間四間餘、是昔年新宮全盛ノ時二ノ鳥居建リ

ト石場土中ニアリト云々

東山院 第百十四代」(65ウ)

同四^丁卯年 太守公四月十日 御上洛

元禄四^辛未年九月廿四日雪降コト三寸許

同年新宮寺住僧文雅福島般若寺移寺移轉、後住塩庭村塩庭

寺ヨリ入院正意ト云、當年迄新宮寺住左二記、正保元年有慶

万

治二年ヨリ玄長房重慶ナリ、貞享二年ヨリ真慶也

同五^壬申六月新宮社御修復有、小奉行塩田助之丞也

同七^甲戌年四月廿七日 太守君新宮 御社参

同年五月八日午尅松野村觀音炎上也、行基菩薩創立從天平元

已至今年九百六十六年也、脇士共三十三^三寐灰燼矣

八^乙亥年九月金銀吹替曰二世三元禄判(66才)

同四月廿日御太夫西郷氏有 貴命、小川庄岩屋平惟持

加納庄半在家村義連碑新宮村時連墨蹟改玉ヒ新宮社参アリ

同十二^己卯年五月新宮文殊像狻座共若松再興始

同十三^庚辰六月新宮文殊堂柱建、同七月朔日文殊像弥勒寺

迁久、同八月廿三日新宮迁、同廿五日開眼供養、導師弥勒寺

宥

胸僧都、讀經僧廿八人

同十四^辛巳年文殊戸帳掛願主大澤村外島重玄

同年八月文殊堂罽口成銘曰

恭惟 文殊師利法王子者諸佛智母久遠導師也、徧

滿身於法界接引生於覺路矣、曰若直昌之妻女信心頓發(66

ウ)

而為現當二世安穩扶樂令鑄箇法器收掛着宝樓、就余請其

銘余不獲辞叨綴拙語充

厥銘曰

鱷象器也 中虚外円 跳出炉鑪 掛在宝前

音透兜卒 響徹黄泉 一切生類 醒煩惱眠

十方魔種 破増上謾 其劫無尽 其德無辺

何以較矣 何以量焉 仍為之銘 令冶工鑄

別當阿闍梨 宥見

願主砂越渡辺直昌妻

冶工江州住(67才)

于時元禄十四年 巳八月廿五日

現住少林釋沙門 淨智謹銘焉

(一行あき)

文殊菩薩再興記

(一行あき)

維時元禄十二^己卯之歲夏五月、田部左次兵衛吉延高橋半右衛門

吉

平拜歷會津三十三處觀音堂之次進臻于耶麻郡熊野山

新宮別當宥見楫二子語曰、曩時寛治年中源將軍義家

公奉 勅征東奥逆賊清原武衡家衡之時遙致懇祈於南紀

熊野山、唱凱歌之時遂勸請三山於當州矣今之新宮其一也、而

(67ウ)

寄附以南鹽川北高領西極入杉山邑都百餘村二百町烏頼

巖^巖及、其後元曆文治之際于戈茲^茲四海属昇平鎌倉右

幕下授賜會津於佐原義連、當此時舉郡寺社領悉遭没収、吾

住僧某抱憤怨而自詣鎌倉詳述當山創業之由来而直訴庭

右司加糾察、而聿達公聽其言昭晰莫可疑於是乎拜載元領

完復之御印矣、公素有故信文殊菩薩聞我山濫觴如斯不耐

歆羨即下賜、運慶之所刻師利薩埵像^并狻座、是廻公平日所

尊崇之靈佛也、僧某拜鉤恩之辱而歸即安置于當山、以降星

霜五百許歲、寺基之久至堂宇蕪滅之像傷廢如斯然而窮巷

貧陋力難奈何之從思過耳、二子喟然歎曰、吁有謂哉吾輩(68

才)

素早微雖力不足荷大事是之耐忍之宜修補之力所不及、募

衆加助之師夫思焉、宥見喜氣溢眉宇二子退矣、於是夏六月

荷駄像并狻座來假安置、彌勒寺教衆拜祝且從志投施錢財

矣、高橋了故者吉平之父也、嘗教孫兒爲僧爲新其學惠進爲願

主與大澤邑郷長外嶋次重暨砂越邑渡部直昌勳力相議課

佛工勝茂修造一年餘、竟以元祿歲次庚辰秋八月十五日佛體

円成狻座又具足焉、同廿三日復于舊山先是別當宥見發憤

扣退邇檀門普乞寸鐵尺寸施與而營建一字、同廿五日恭徒

狻座新唱開堂之儀矣、四方雲集瞻仰稱贊也、願以此功德歸

仰之老弱結縁之緇素共蒙現當之利益二世之悉地焉記」(68ウ)

以貽後日云爾

高橋 了故

田部左次兵衛吉延

高橋半右衛門吉平

元祿十五^{壬午}之歲秋八月廿五日

外島惣左衛門次重

渡辺傳六郎 直昌

別當比丘 宥見

寶永三^{丙戌}十二月上旬大寒シテ諸木多クシミ割ル、同十八日ヨ

リ東

風大雨、同廿日洪水

同四^{丁亥}年四月十日卯尅新宮ノ西堅石山崩落、大川上下三

(69才)

百八十余間築留下流一滴毛不通、是ヨリ下モ下ケ繩ト云測迄往

来ノ

道トナル、川上八北八田原村、南八舟越筑篋屋敷村、東八下遠

水横流シテ如湖、十一日朝ヨリ崩ル岩石ノ間ヲ如堰掘テ滴ラシ

ム抜山和メ

十二日卯尅一度ニ拔湛水引テ如元、同年六月十五日新宮薬師

同

十二神將再興成就シテ若松ヨリ飯堂、又同日金銅弥陀毛帰堂也、

此

弥陀ハ先年堂宇顛倒ノ時失シテ五十餘年ニシテ今日歸堂也、惠

心

僧都ノ作ニシテ往古本地堂ノ弥陀ト云々

同年八月十八日新宮如意輪觀音同湯峯塔佛虚空藏再

興成就シテ飯堂

同月廿五日再興ノ諸佛開眼供養、施主為祈禱大般若」(69ウ)

轉讀又金銅如来像中ニ納有リ如左

耶麻郡新宮金銅如来御腹籠覽書

むかし八幡太郎義家公貞任を亡し玉ひ御願圓滿のとき

此所に熊野三山を移し善美を尽し御建立有し事精しく

旧記に見へ侍りければ略之、其社地に弥陀薬師十二神將虚

空藏觀音文殊地藏其外寶頭盧大黒二王大師の像たうとく

ならひ御座しましけるにそ霜年経りてあるひはみくし斗り

残り又は御手足散乱しけるをば集め積置けるを是を見る

人悲しめとも心のみにて誰取立る人もなかるゝに、元祿二^{丁亥}

年の頃高橋半右衛門田部左次兵衛といへる人會津順禮の」(70

才)

とき參詣し是を見るに忍ひす新宮寺住職宥見

法師などゝ相かたらひ四方信人の助力を加へて文

殊の尊像は再興せり、服部何某は文筆の達人なる

故精かく記て菩薩の像中に籠たり、残りの諸佛」を取立る事は中々人力の叶ひかたかるべきをこは「そもいかなる因縁ぞ、かの高橋氏義平一人の念願」にて日夜心を盡し住僧と相ばかり十方旦那をす、」め寶永四年佛師勝茂を頼みつゝに再興成就し」侍りしぬ、しかはあるに縁起の目録に有し恵心僧都「(70ウ)の御作御長一尺二寸の弥陀いつこにおはしますやら」ん、行系しらすになりにき、高橋是のみ心にかゝり」諸佛第一の本地の弥陀なくてはいかゝ有へきと思惟」志近きうち新佛を一尺二寸にと心けせけるに有時亡」母の忌日にて菩提所浄家の大運寺へ詣侍りしに」住僧良當上人出て對面し十念事終りて見に」方丈に見馴ぬ古き佛一躰おはします、取あへす高橋」申尋は此如来はいつこよりそと問ふ、上人答てされはど」よ是は元來金田浄栄法師の宅に安置し玉ひし」に餘りに尊とく見らせ玉ふを●^佛家に物しては空「(71オ)おそろし、後はいかにものするともしはらく方丈」にとて頼れけるに幸また近きあたりの寺新」佛あらたむるの時そのうちかしてんやといへる、いつ」そへまいらせたりければ是頃これへ歸らせ玉ひき」御覽候ことく爰にも方丈あればいつかたにも望の」信人あらはかしまいらすへきなどゝ語られける」高橋ふ思儀の思ひをなし立よりつくゝ^{る方}「^奉」に疑ひもなき恵心の作にてしかも御長一尺二寸」あり、こはそもいかなる事そと胸うちさきはき急き」立歸り彼の浄栄居士の跡繼金田市郎左衛門かた「(71ウ)

一行始終しかゝと語る、ことさら兩人は一門の中」なり、市郎左衛門聞てことの外に歎喜しさあらは幸」ひの事や新宮へ寄進奉るへし、抑此如来は我」先祖より段々傳へて其始をしらす、しかるに●^に」かゝる佛縁に逢てかく寄附し奉るも高橋より兩」親^并我等迄も頓證菩提を祈ることこそ嬉し」けれ、かゝる結縁にて子葉孫枝も栄行末も頼も」しとて感涙を催す、昔善光寺にて恵心僧都」靈夢に感て四十八躰の弥陀の尊像を鑄玉ふ」よし其一は斯の所にありと云傳へしにいつの時にか失「(72オ)たりしにそれかあらぬかはさた●^かならねと此の寺」の縁起目録候長一尺二寸作は恵心僧都之、末の」世にも不思議の御事あるものかな、ことさら高橋」氏新佛心掛時節思ひもよらす大運寺にて拜」み奉りし事一かたならぬ妙えなり事やと人々」申あへり、高橋氏父の名了故、金田氏の父の名」は浄栄、此両法師若時は三尺の秋の霜を横たへ」何れも俗性いやしからぬ人なりしに俱々に佛道」に志し深く浄土の安心を究めなか年の後は精を」して手に念珠を放たす日に佛名怠らす、更に「(72ウ)勝劣なき後世者にて両眼両手のことく對の善人なりと」世に沙汰せり、果して正念臨終をとけ玉へり、其子又達」かく佛道を信じ親の志を繼ぬれば孝心即佛」心とかやの佛語に違はず、二世安樂基也、扱又高橋氏」さのみ名ある富の身にもあらて諸佛を再興し昔」の春に歸らしむること古人所謂絶たる繼き廢」

たるをおこし常人の中々不及所なり、また先の月

高橋病急にして眼花飛命葉既に落んと其時

醫師も手をつかねて千死一生といへり、其時佛に

向て願けるは我全し命を●しむ事はあら●(73才)

中秋の末には我願望み成就す●し其時露と●

失るは何の残心かあらん、夫迄の命をあらたし●

頼しに程なく病も愈て諸佛をこゝろのまゝに納

め奉れり、且又奇特共有しは神宮寺の本尊にて候はし

ます、是も恵心僧都の御作にて四十八躰の其一なりしと

かや、新宮へ納め奉りて弥勒寺の定玄房法印を頼み

熊野の御廣前にて大般若を轉讀し十方旦那奉加

のかたゝを祈禱し其家々へ御札を配るとぞ聞し、有

かたき志しなり、我輩拙く才乏して深心を尽事

あははされとも其趣を大概記して金田高橋の(73才)

願に任せ聞所をすこしく下書し侍ぬ、此書中いふ所聞

ことに偽なし、見る人疑を生し玉ふことなかれ、此所の

住僧宥見如来を寄進せしは金田市郎左工門義重廣博

●大運寺の住職は良當上人再興願主は高橋半右工門

義平佛工は若松城下勝茂なり、仍而聞書如件

寶永四丁亥年秋八月 此所金田高橋一家之牌名有之略

又同年諸佛再興覺書有り後々のため記す事左の如し

東奥熊野山新宮は昔時由緒の靈●なりといへとも御本地の

堂塔一度こほれ落てより參詣の人も断絶し●本地垂跡の神躰

●(74才)

●空しく廊閣の内に朽、或はみくし落或は御手足落て秋の●

●の霞におかされ只さ●にの戸帳をいとなむ●香花つむ人もな

くたまゝ

讀經のこゑと聞しも蜂虻の羽音になん侍りける、予覺へす涙

落て

あわれ力を合する善縁もかなせめて御手足を續奉る計の修補

をも

なさはやと思ひ別當宥見にかくと語る、阿闍梨答て破壊

の堂舎を見て修補の心なきは持戒の人と謂とも三惡道に脱

す

●ん仏門の金言忘る道義には侍らねとも衆旦いつとなく旧

例を

背き寺産日々に喪ひ朝夕の煙もはかゝしからず、法務我が

時に

至て絶なんとす、是をさへ愁るに足らず、如何してかゝる大

願に及へき

涙をおさへて●されしかはそれより爰かしことそゝのかし侍

れと(74才)

是そと頼拝施主も侍らざりしに佛の御引合にや、若松

の善者高橋吉平田部吉延順礼して元禄十二の秋來

りぬ、幸に此人々を進て思ひ立し事を語り侍りければ

●此やんことなき靈像の廢れておはしますを見て我

れもいやまし信をおこしいかて睨には見奉るへきとて別

當坊にも約して歸りぬ、其後文殊の尊形狛座爰かしこより

拾ひ求て両客の許に送り侍りしに志ある人も世を憚りて

更に勸化の施主もなく既に其年も暮なむとす、爰に

高橋吉平の父了故、氣異なる夢の告ありて初て此文殊」

の尊形を●しきいの思ひをなして願頭と成、其●●(75才)

●人を動て再興なし奉らんとす、又大澤の郷長次重●

氏●別當岩見の勸化に因て修補大概に成りぬ、折●

世に瘡瘡を煩ふて死するもの幾人とて又數をしらす、然るに」

誰教とはなれども此文殊に祈り奉れば奇特ありと云し」

程こそあれ、靈不靈は衆人の信と不信によることなれば頓に」

利生を得て昼夜となく奉りつたふ、依て彌勒寺に移す、猶」

参詣の道俗いやまし賽錢雜穀の餘澤多により御堂」

一字を建立し元禄十三年庚辰八月廿三日再興成就」

若松より新宮に移し奉るに名残の雨そぼふり少時有」

て天晴南風そよ吹て送り奉る様にぞ見えし、道すから」(75ウ)

賽錢●て人夫漸つかれ日も夕陽に傾きぬ、然に塩川」

の村老鎮守の舊例を思ひ在所の人を語らへ奉乃人夫に代りて」

送り奉りぬ、是を始として遠田貝沼に及び道すからの邑郷橋を架」

路●廣めて新宮まで送り奉りぬ、折ふし夕闇に送りむかふ」

人夫参詣の緇素明松をとほして往來の火塩川より新宮」

までひとしと續しかは遠境の人々あやしみつとに起て問答しかは」

文殊入堂のこと世に廣く同廿五日開眼なりぬ、導師は彌勒寺の」

宥陶法印、讀經の僧二十八人なり、商人は高麗橋にみちく参詣の」

道俗は馬場坂にみてり、是よりして廿七日迄を三日の會式とは成り●」

此次に葉師の尊像を●再興し奉らはやと信心の施主●侍●(76才)

し●同十五年●大澤の長次重の弟重次の母の菩提の為●

●●●施入す、又郷長の男貞宣、其外若松風間氏藤倉安藤氏を初●

とし施主多かりければ此趣を高橋氏に告ぐ、吉平大に悦て願頭」

と成て門葉の人且志有る信友をすゝめて再興せんとす、爰に」

沙●淨念とて田原村に侍りしか語て曰、我此次て十方を勸化し」

て後の善縁となさん、しかはあれと何を以てか古記と人に語り」

旧例の空しきことを歎ん、答て曰寛永年中しばらく住僧絶て」

より旧記皆紛散して此後又今の昔を見るかことくならん事を」

思ひあそこ爰より取集せるに虫のねしきに閉文字も切々になれり、●をあつめて勸化の為に綴り置る一卷ありし」(76ウ)

かは何れ●学はされは文足らず、習はされは手顛顛して人に見すへき」

同年住僧實宥新宮寺ヲ建、寅年ヨリ地形築今年建諸人夫」

慶徳組中ヨリ勤ム、八月八日ヨリ大風雨、十日夜大地震大洪

水、寛永ノ洪水ヨリ高キ事四尺此時之次第記御池村ノ」

端西光寺々内ニ舩ヲ繫ク、坂下塩川邑中舩ニテ通ス、新宮馬

場坂中程迄湛、掘出ノ下迄水湛、東北能力南山三郷路ヲ限、

田」

原大木大沢浸テ如湖、猪苗代湖七尺湛戸口ノ橋流此時●●」

五十里ノ沼●テ如奮、此所天和三●●テヨリ四十一年●●」

(79才)

街道荒タリ●ニ如舊年関東絹川筋大洪水、人馬多溺死●●」

城大破、奥州越後大洪水云」

同六辛丑年正月 大膳大夫様 御當厄御祈禱於当社修行」

御札献上」

同九甲辰年十二月楊梅桃李花咲實ル、自四月至六月中旬雨繁」

自六月中旬至七月中旬旱」

同十二丁未年八月廿八日 徳千代君新宮 御社参」

同十四己酉年八月十五日新宮鳥居建高二丈五尺笠木六間也」

是往昔鑑召郎ノ東鳥居田石場之間尺を用て建、今乃地古来の」

華表の間●五間有之、本願實宥法印中條景廣也、大工棟梁●●」

(79ウ)

松南町小林彦兵衛安晴其外助力衆棟木の合口度泰記之、此日

参」

詣群集、又大門左右並木蛇彫出棟上終と不見」

同十五庚戌年新宮三社葺替成、本願實宥法印中條度」

泰、此時三社之内殿御厨子南北内殿ノ上檀成、大工繁右衛門、
鍛冶」

彦七郎也」

同十六年九月十日 太守君正容公薨給奉號」

徳翁靈神 八月晦日三社神鏡無故倒有凶變三所、太守君薨シ玉

ふ」

同●實宥阿闍梨寺を附ニ續會秀一神宮寺ニ閑居」

同二十乙卯年三社差萱成本願中条度泰三月●●●●●」

十●日迄ニ成●●(80才)

同二十一丙辰年拜殿指萱始本願中條景廣父子之二●●」

三月十四日ニ終ル、文殊堂鐘撞堂まで葺替成ル、十五日萱●●●●●」

同年二月十九日阿闍梨實宥於神宮寺、寂年六十一」

同年五月元文ト改元」

櫻町院 第百十六代」

元文二丁巳年五月自初旬霖雨降續、六月中旬より雨風烈」

所々山崩谷埋る事多、六月十五日止雨御祈禱有御守札献上」

同廿一日大風雨、同日辰下刻宮山自半腹豎十間余横南北」

十八間拔崩、神木十九本倒る證誠殿前、五尺余押出本」

柱二本折、其外長押高樓等悉破壊、南宮前エ九尺余押ニ(80ウ)

●●柱七本折る及大破、雖然神殿穩ニして幣束神鏡無倒」

社僧神威ニ在る、同廿二日大風雨大洪水故不能於凶變 官

府」

達點止す、同廿三日夜中より引水、同廿四日舩ニて田原ニ移リ大

木大沢」

の間舩ニて通す、道中洪水不自在故に木流通り新宮を辰上刻」

出起西ノ下刻若松着達 官府此時云、洪水天文の白鬚水より」

三尺下水と云」

同七月二日夜丑刻壞社、御神躰北宮へ御迁宮」

同三^戊午年壞社修補希望達 官府然れも御省略●故
●止翌年^{己未}年壞社修補被 仰出〔(81才)〕

鎮守下邑郷」

新宮庄々内本庄三十五村」

●川 上遠田 下遠田 第六天 源太屋敷 太田 一ノ堰

上高額 下高額 清治袋 塚原 太郎丸 高吉 菅井」

渋井 柴城 荒分 長尾 綾金 宮在家 松野」

慶徳 堀出新田 能力 萬力 鎧召 沖 貝沼」

赤星 大澤 大木 田原 新宮 山崎 真木」

新宮庄小布瀬郷二十七村」

小布瀬原 川吉 川隅 下村 寺内 船岡 木曾」

●野 館原 三山新田 上林 洲谷沢 早稲谷 堂山〔(81ウ)〕

●● 中反 宮古 三方 大谷 小土山 吹屋 西海枝」

萩野 利田 中山 赤岩 大蘆」

新宮庄野尻郷十四ヶ村」

井谷 八重窪 橋屋 戸中 橋立 柴崎 瀧坂」

滑沢 樟山 原 新門 平明 漆窪 高目」

新宮庄奥川郷二十ヶ村」

大船沢 小綱木 真ヶ沢 中町 新町 道目 吉田」

向原 杵山 升岡 塩村 出戸 下町 中ヶ沢」

山● 小山 梨平 宮野 小屋 極入」

東庄五十九ヶ村〔(82才)〕

金川 馬場新田 三橋 深沢 田中 竹屋 松崎新●^甲

上原新田 南屋敷 中屋敷 常世 金森 上窪 下窪」

別府 二井田 新井田谷地 高木 下小出 上利根川 下利根川」

中ノ目 宮目 金沢 辻 雄国新田 小沼 吉沢」

館 高柳 熊倉 中里 三城目 布流 堂畑」

上勝 下勝 西中明 東中明 京出 平林 稲村」

下臺 小田附 稲田 上田 漆 入田附 中田付」

関柴 下柴 下吉 檜原 関屋 樟 上川前」

下川前 大塩 ●^新田十二ヶ村不見之」※22

岩崎郷八ヶ村〔(82ウ)〕

上岩崎 下岩崎 中村 天井沢 宇津野 栗生沢」

熱塩 水沢」

加納庄百木郷三十六ヶ村」

小荒井 大荒井 村松新田 北原新田 高島 吉志田」

上三宮 下三宮 見頃 岩沢 細屋 讓屋」

鷺田 下谷地 根岸 五目 上野 針生」

赤崎 金屋 黒川 日中 野方沢 百木田中」

中川原 岩尾 山岩尾 半在家 五分一 賢ヶ谷」

藤沢 沼平 背戸尻 板ノ沢 一ノ戸 撫木」

以上一百九十九ヶ村有往古より新宮鎮下二百一邑と云●〔(83才)〕

右々内八十年成との新村多し、しかれば此外二又赤枝入倉西

落●^倉町屋を加ふ歟、東は金川を限りとあればまた違へり、後

人の糺しを待つ」※23(83ウ)

※1宝庫本「是ミナ其縁をひく成へし」

※2宝庫本「神の名高し」

※3宝庫本「恋ぬれきぬをあくまで着てし会津川 泉州堺」

夕立恋 過たらぬ水に浮名流して 右奥

同 山鳥のおろの鏡の身にしあらは

寄鏡恋 隔る中の影は見ましを 直儀

※4宝庫本「任笑」

※5宝庫本「越後海谷氏女 小倅女」

※6宝庫本「蓬萊方丈糸いじう」

※7宝庫本「神います好文木の匂ひかな 一竿
梅に明て心も清しはつ神楽 魯卜」

※8宝庫本「千早振る神の恵ミの枝たれてかつ色みするみきの梅か枝 同
雪中梅 折てみは花や分れん白雪の降り重なる軒の梅かえ 同

月前梅 春の夜の月の影添ふ梅の花深き色香を空にしられて 同

※9宝庫本「梅花 遠薫 咲花の心をそ見らね春風のさそふにしるき遠の梅か香 同

同 梅薫風 さそひ来る風にしられて軒近き垣ねのよその梅そゆかしき

同 水無月中旬に語て此御神は梅桜松をいたふ愛し給ふと聞ければ

香をそえし涼しき風を松梅の花の桜木春を忍ひて 繁一

かしは手の清めや梅の初香 素盈

雪に青き松のすかたや神心 為雲

影清し神の鏡に梅の花 松林

※10宝庫本「落城すと旧記にあり時連は」

※11宝庫本「前に可書落爰にてす」

※12宝庫本「稲荷山 不動たいらと慶徳の間也応永三年玄翁禪師造立し給へり年
代の部に委し」

※13宝庫本「八月十八日」

※14宝庫本「在厂慶疑剛字高瀬小旦那御子別当吉原敬白」

※15宝庫本「右和談之状証誠殿ノ内陣ノ神扉ノ内ニ張付置リ無知者然ルニ寛文四
年春蒙 貴命友松氏興参詣アリ内殿ニ入玉ヒ御鎮坐ヲ明ラシメ玉フ
時は不可漫宝器ノ内工可入置トテ手自剥シ渡シ玉ヒ寛文ノ記ニ詳カ
ナリ」

※16宝庫本「于時慶長十九季甲寅林鐘十五日」

※17宝庫本「棟札写脱漏而追加ニ有リ」

※18宝庫本「神体六尊御鎮座坐シキ是ハ何ノ尊是ハ何ノ尊ト一々指教玉イ」

※19宝庫本「増且鎮下二百余村の助力を以て護摩堂を建んとすは皆衆旦信仰の深
きによりり過にし元禄年中」

※20宝庫本「同五戊子五月新宮社御修復鎮下ヨリ役夫ヲ勤ム 同月晦日新宮寺有
見寂矣実有ニ跡付統」

※21宝庫本「享保新金ハ享保三戌年出一匁二粉有リ宝永判ト同位ノ由ニテ宝永判
ハ二朱ニ可通用御触有リ」

※22宝庫本「大塩 松崎新田 馬場新田 金川統也」

※23宝庫本「後の人これを糺し給へ」

※(別筆)



菊池研介『会津資料叢書 第二』大正六年十一月(国立国会図書館デジタルコレクション) <http://dlndi.gop.jp/>

『喜多方市史 第四巻 考古・古代・中世 資料編Ⅰ』平成七年六月 喜多方市史編纂委員会

『喜多方市史資料叢書 第7集 諸家文書3(近世・近代)』『新宮伝記』熊野神社文書

(新宮村)『平成二十年三月 喜多方市教育委員会(書誌情報として以下が示されている。四、資料表題の次に以下のものを示した。(喜多方市資料目録)による)』
○○○○家文書(番号)「整理番号 部門 項目 差出人又は筆写 宛名 年代
形成立 備考」、『新宮伝記』熊野神社文書6 VII 5 文化 歴史・地誌 近世
大判縦帳 写本 G-187 熊野神社 諸家文書II」

吉田東伍『大日本地名辞書 奥羽 第七巻』明治二十九年六月八日初版 昭和四十五年三月二十五日増補版 富山房

『会津家世実紀 第二巻』昭和五十一年三月 吉川弘文館

『新編会津風土記 第二巻』平成十三年二月 歴史春秋出版

真壁俊信氏校注『続神道体系 論説編 保科正之(一)』平成十四年二月 神道大系編纂会

白井哲也氏『日本近世地誌編纂史研究』平成十六年二月 思文閣出版

(注一)本論では、菊池研介『会津資料叢書』以降、平成七年発行の『喜多方市史』においても『新宮雑葉記』と統一されて呼ばれていることをふまえ、『新宮雑葉記』と呼ぶこととする。

(注二)『玉藻の草子』の常在院系統のテキストにおいて、退治された玉藻前の体内から出た三種類の宝物(仏舍利・宝珠・赤白の針)のうち、白い針が三浦介から源頼朝に献上される。その後、下野国那須野にて殺生石を濟度して砕いた源翁は旅を続け、陸奥国会津黒川の満願寺へ立ち寄る。その寺は佐原義連(三浦大介義明の息子、三浦介義澄の弟)の菩提所であると語られる。(昭和女子

大学蔵絵巻)其後、玄能和尚、陸奥会津黒川まんくはむ寺に居住ありとや、

寺は、さはらの十郎よしつらの菩提所といへり)、サントリー美術館蔵絵巻

「そのうち、けんおうおしやう、みちのくあひつこのほり、くろ川のさとま

んくはん寺にきよちうあるとかや、かの寺はさはらの十郎よしつらのほたい

しよと云々、学習院大学日本語日本文学研究室蔵巻子本「けんわうをしやう、

みちのくあいつこのほり、くろ川まんくわんしにきよちう有とかや、彼寺は

さはらの十郎よしつらのほたひしよといへり)』『新編会津風土記』においては、

巻之六十五「半在家村」の「墳墓」に「佐原義連墓」、古蹟」に「満願寺跡」と立項

されている。「佐原義連墓 村南二町ニアリ、義連会津ヲ賜ハリシ事東鑑ニ

見エサレトモ、文治五年九月奥州羽州等ノ吉書始ノ条下ニ、面々ノ賞不レ可

勝テ計フトアレハ、此時ナト賜ハリシナルヘシ、サレハ其子孫四郡ノ地ニ列

布シ、中ニモ此村ハ其孫三浦介盛時カ領セル所ニテ、青山城モ程近ケレハ此

地ニ葬リシト見ユ、然レトモ義連ノ卒年詳ナラス、東鑑ニモ正治元年五月ヨ

リ後ハ其名見エス、建久四年四月ノ条下ニ三浦左衛門尉アレトモ、兵衛尉義

村ヲ左衛門尉ト書セル所アレハ、義連トモ定カタクシ、建永二年六月ニ和泉・

紀伊兩國ノ守護ハ者、佐原十郎左衛門ノ尉義連カ職也、義連卒去ノ之後未レ被レ補

セ、其替ラトアレハ、其間ニ卒セシナルヘシ高橋(八)月二日卒シト云フ者レモ、直野(如)ク、

ニ五輪十基アリ、家臣ノ墓ナリト云、荒穢年久クシテ知モノ稀ナリシカ、肥

後守正之封ニ就テ後、家臣ニ命シテ封内ヲ巡ラシメテ其事ヲ知り、村民一戸

ニ米ヲ与テコレヲ守ラシメ子孫ノ爲、且不朽ヲ図テ寛文八年山崎柯ヲシテ碑文

ヲ作ラシメシカ、其志ヲ卒スシテ逝ス、元禄八年肥後守正容コレヲ建、碑石

高一丈・広二尺九寸余・厚一尺八寸、方附高一尺八寸・六尺四面、碑文如左

…(略・碑文の写し)、「満願寺跡 小名阿寺沢ニアリ、何ノ頃廢セシニ

カ詳ナラス、コノ辺リニ満願寺跡ト云字アリ高橋(四)月二日卒シト云フ者レモ、直野(如)ク、

(注三)渡辺直昌本の珠盤による序文には、渡辺直昌がこの熊野神社は「靈蹤」である

のに「村民悉知其由者鮮矣」と歎き、「或記或文或詩或賦及和歌三十一字狂言綺語等」悉集作「書一篇」而為「使望」請為「之序勅」化于遠近上、そこで請われて序文を執筆したと経緯が語られている。中条度泰本の序文には、惜哉残簡ノ旧記腐「朽」空「匣底」ニ豈「不」ル歎息「覽」レ之「以」ニ「尽」テ「舐」ル「脱簡」ヲ「忽」焉「ト」シ「濺」キ「レ」涙「ヲ」嗚「呼」噫「嘻」斯「ヲ」弃「擲」セ「者」今「ノ」之「如」ク「レ」視「ル」カ「昔」後「之」之「視」ル「コト」レ「今」ヲ「亦」々「復」々「如」ト「ケン」レ「此」矣「令」ニ「シ」テ「博」覽「ヲ」「摸」写「シ」テ「而」奉「ニ」納「シ」之「ヲ」欲「ハ」ス「使」ニ「シ」テ「後」人「ヲ」覺「ニ」濫「觴」ニ「ヨ」永「ク」耀「中」ニ「サ」ン「ト」ラ「ミ」山「ノ」之「洪」基「ヲ」也、「旧記」が朽ちてしまうことを歎き、後の人のために新宮熊野神社のはじまりを伝えようと撰写して奉納したとある。

(注四)友松氏興 ともまつ・うじおき 会津藩家老。元和八年(一六三二)三月三日高知城下に生まれた。父の名は莊右衛門氏盛、母は安西八左衛門の女で。幼名利益、通称を勘十郎といい、而齋と号した。十三歳のときに信州高遠の城主保科正之に仕え、累進して禄高二千石の家老となった。山崎闇齋について宋儒学を考究し、大河原養白・荒井真庵が会津に藤樹学を伝えると、進んでその講義を聞いた。神道は吉川惟足に、国学歌道は正親町公通について修め、その性は剛毅にして博学、正行の江戸在勤中は留守中の藩の治世を委されて、国老の田中土佐とともに果断の政治をおこない、その佳話も多い。山城淀十万石の城主であり、石州流の茶人でもある稲葉正通は彼を評し、「会津の友松は悍馬の如し、是れを禦し得る者は正之のみ」と言い、山崎闇齋もまた「諸国の士人で為すある者、方今、天下に共に語るべきは土佐の野中兼山と会津の友松勘十郎に及ぶものなし」といい、老中酒井忠勝も「勘十郎は言行二なく、古今の名臣である」と評した。寛文(一六六一)の頃、正之の命を受けて領内を巡見し、山川の地形・土俗・物産・戸口・社寺・古跡などを調査し、あるは古器の銘・古文書・伝説などを集めて『会津風土記』を編み、同六年(一六六六)に完成させた。寛文八年(一六六八)には正之に「家訓」の制定を建言、寛文十二年(一六七二)十二月十八日、正之が死去するや二千石の禄を

返上し、晩年は土津神社の建設に力を尽した。また同社の永代祭祇料のために松原川より三里余の水を引いて翁島の北に土田村の開墾を行いその田畑をもって祭祇料に当てた。これが今日の土田堰であるが、今日のように測器などのない時代のことであるから、夜間に提燈を用い、水路の落差を測量したという。その知謀と努力とは、今も土津神社の東側より磐梯山麓を横切って流れる土田用水堰のその清冽な流れがこれを物語っている。氏興は貞享四年(一六八七)二月二十九日、六十六歳で没したが、生前すでに子孫の絶えることを覚悟し、墓碑銘も自分で作り、その祭祇も青木村の人々に依頼し、その生涯は誠実剛直そのものであった。神霊号を「忠彦靈社」という。墓は青木善龍寺の裏山、大窪山の西の峯頭にあり、その巨大な墓碑には「東奥散士友松氏興之墓」と刻まれ、傍にはそれよりひと周り小さな妻の墓が並び立っている。主な著書に『孟浩録』『土津神言行録』『見称山由来記』のほか、自撰歌集『不学而集』『氏興詠集』『百首和歌』などがある。『不学而集』は延宝七年(一六七九)の撰で、和歌四十首を収めている。『氏興詠集』は貞享四年(一六八七)春二月、病にかかり友人の手をかりて詠草六十三首を抄録、正親町公通に呈して添削を乞うたときの歌集であり、『百首和歌』も、友人に浄書してもらった自撰歌集である。…(後略) 小島一男氏『会津人物辞典(文人編)』歴史春秋出版 平成二年十二月

(注五) 平成二十七年二月、田嶋一夫氏の指摘による。

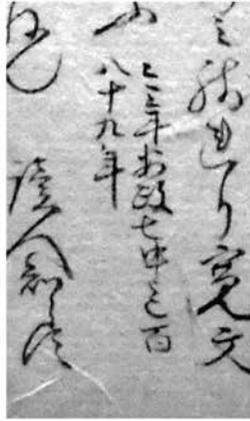
(注六) 喜多方市史編纂委員会『喜多方市史 第四卷 考古・古代・中世資料編Ⅰ』平成七年六月

(注七) 『福島縣耶麻郡誌(耶麻郡役所 復刻版昭和五十三年八月二十三日発行 歴史春秋社)』第十九章 人物 第三節 文学者及芸術家による。「渡辺直昌 渡辺直昌は初め河沼郡砂越村に住し後耶麻郡小荒井村に移り医学を業とせり先祖は嵯峨源氏にして北条氏滅亡の後鎌倉を退き会津に下り盧名氏に仕ふ盧名氏滅亡の後民間に下り医学を業とせり直昌は通称を傳左衛門医名を玄説と

いふ寛文七年正月十八日に生る七八歳の頃より百人一首三十六歌選等の歌書を弄ひ九歳の時下荒井村の蓮華寺に学ひ十三歳の時若松の医師岩田適慶・同知足の門弟となり医術を修め十五歳より郭内の歌人小泉康定の門に入りて和歌を学ひ又諸国の和歌の宗匠を訪ねて其流を汲み京都にては無曲軒長伯・水田長憐を師と頼み詠める歌を御歌所内大臣中院通躬公・武者小路大納言実陰卿の覽に供し感賞に預りしことあり或時は和歌道を較へんとて諸国を行脚し津々浦々まで尋ね行き或時は歌道修行の為深山幽谷を涉り数年を過せりと
いふされは和歌に冥加ありて伊勢・鹿島・下加茂等の神社へ奉納歌合の選に当り其外住吉・須磨・明石・塩釜・江の島等の名所旧跡に和歌を残せるもの多し又信仏の念深く壮年の時は百万遍然誉上人より老ては吉野比蘇寺朴道禪師より血脈を賜はりしといふ彫刻又世に勝れ若年の頃初め虚蔵、框の般に七福神を彫り入れ柳津虚空蔵へ奉納し時の太守保科正容公の御感じ預れり齡八十余歳に至るも耳目正しく心も衰へず隣国の和歌添削に日を送りしか
宝暦二年正月八十六歳の高齡を以て歿す著書新宮雜葉記等若干あり墓は安勝寺に在りて法名を洗雲了夢居士といふ

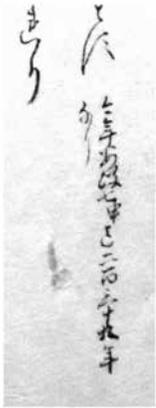
(注八)

23丁オ

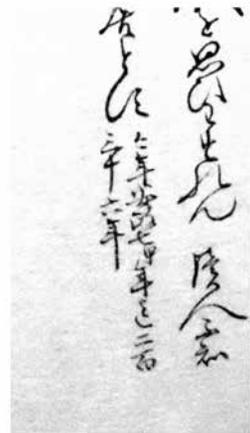


25丁ウ

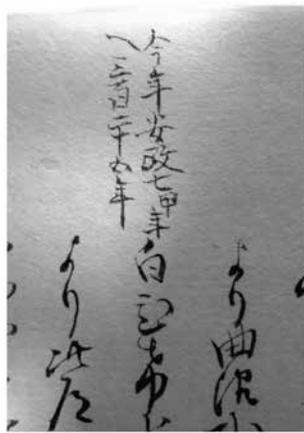
古館条



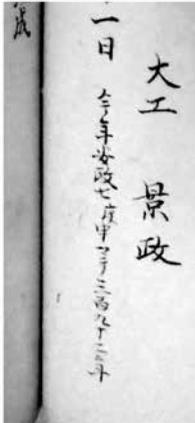
25丁ウ
小山新田条



31丁オ



42丁ウ



樋口一葉の研究

—「まことの詩人」の淵源を考える—

伊 狩 弘

1

樋口一葉なつは明治五年三月十五日、太陽暦では五月二日に東京府第二大区小一区(現千代田区)内幸町一番屋敷、東京府構内長屋にて樋口則義(四十三歳)、たき(三十八歳)の次女として生まれた。明治五年は十二月三日が太陽暦の明治六年一月一日になった年であるが、遡つて太陽暦に換算すると、一月は花袋、三月は藤村、五月には一葉が誕生した年であった。父則義は甲斐国山梨郡中萩原村重郎原の農民樋口八左衛門の子であったが、同じく中萩原村青南の古谷たきとともに安政四年四月に江戸に出、以来様々の職業を経て、一葉の生まれた時は東京府権小属という地位を得ていた。権小属は下級官吏で、月給二十円程度と考えられる。以後則義は中属になったが、明治九年末に一旦退職し、十年十月には警視庁警視局備になり、明治二十年六月に依願退職するまで十年ほど警視庁に勤務した。明治二十年六月に兄の泉太郎が大蔵省出納局配賦課雇になったわけで、泉太郎の月給は八円と伝えられるが則義は小金を貯めて処々に貸付していたし、兄は官吏になったわけで樋口家の運勢の頂点と言えよう。泉太郎はこの時既に肺結核に侵されていたと見られるが、三か月ほどで退職、その三か月後に亡くなった。一葉はその前年、明治十九年、十四歳で歌塾萩の舎に入塾し、明治の才女の仲間入りをし

つつあったとも考えられるが、樋口家は衰運の一途を辿り、明治二十一年、則義は黒門町の家を売却し樋口家は以後借家住まいとなる。その年に則義の始めた荷車請負業組合は失敗し、則義の出資金も戻らないまま翌年二十二年七月に則義は病没した。周知のように次男虎之助は明治十四年に分籍され陶器の絵付師成瀬誠至に弟子入りしていたので一葉一家は母たき、妹くにの女ばかり三人となり、許婚のはずだった渋谷三郎からは金銭的の足許を見られた結果婚約解消を告げられた。明治二十三年、一葉は萩の舎の内弟子となったが、下女のように扱われ、九月に本郷菊坂町に引越したがもっぱら洗濯と針仕事によつて生計をたてるありさまとなった。こうして明治二十年六月を境に三年余りのうちに一葉は父と兄と自宅を失い、家産と生活の糧を失い、婚約者を失うという憂き目に遭うことになった。十五歳から十八歳までのことである。この間に大きい出来事は萩の舎塾において田辺花圃を知ったことであろう。花圃と文字通り交わつた接点は一葉という作家を世に出す大きな契機になったと思われる。花圃が明治二十一年六月に逍遙の校閲を得た後に『藪の鶯』を出版し、三十三円二十銭の稿料を得たことが一葉の小説家への執着心の元になったのは間違いないささうである。当時の三十三円は大体今の三十三万円に相当し、文筆が生活の手段になり得ることを実例を以て一葉に示した効果は大きい。『藪の鶯』という小説そのもの

は明治の欧化主義や官僚主義を否定し、質素儉約的な日本の女徳を称揚した、花圃の主張の強く出たもので、そうした筆法が災いしてか結局花圃は作家として成功するところまで行かなかつた。田辺花圃龍子は田辺太一蓮舟の子に生まれ、明治二十五年十一月、二十五歳で『日本人』の三宅雄二郎雪嶺と結婚した。花圃と一葉はいろいろな意味で関係が深く、滝藤満義が「総じて花圃作品の特徴は、強烈な自己主張と教訓を戯作調の文体に盛った、啓蒙主義的なところにあつた。これがやがて後輩の一葉に水を開けられる所以にもなるのだが、彼女が作家一葉の産婆役を果たした功績はまぎれもないし、それに花圃初期作品の扱ったテーマや素材、例えば利発で古風な娘の活躍、筒井筒の恋、家の零落、妾や玉の輿の問題、己が運命や男達への怨念、夫婦の不平等が、いずれも後年の一葉小説の主要なそれになつてゐることも確かである。もつとも両者の作品の結末に明暗の差があるのは境遇のしからしめるところであらう。」と述べているとおり、テーマや素材面でも二人には共通するところがある。だが、滝藤の言うように花圃は代々与力の田辺家の子であり、夫の雪嶺も加賀藩儒医の家柄で、雪嶺の硬骨漢ぶりも有名である。だから一葉とは境遇に大きな違いがあり、明治欧化主義に非を鳴らした点では一葉と花圃に共通の心情があつたかもしれぬが、花圃らの国粹主義を陽とすれば一葉のは飽く迄陰性のものであつたと言える。一葉はしかし次第に花圃をライバル視するようになつたと見えて、二十七年二月、下谷龍泉寺に住んでいた時期に中島歌子から花圃が家門を開く、和歌の塾を主宰することを聞いて次のように『塵中日記』に認めた。

二月二日 年始に出づ きるへきもの、塵ほども残らず よそ
の蔵にあつけたれば仮そめに出んとするものもなし 邦子のか

らうして背中と前袖と糸りさまくにはぎ合せて羽をりたにき
たらましかばふとははぎ物とも覚えざる様に小袖一かさねこし
らへ出たり これをきて出るに風ふくごとの心づかひものに似
ず(中略)種々かたる師君のもの語に三宅龍子ぬし家門を起し給
ふのこゝろのよし さるは雄次郎君の内政之いとくるしくたら
すかちなるに例之才女のかゝる方におもむくこゝろ深くかくと
はおもひたれ成へし 師は我れにもせちにすゝめ給ふ いか
て此折過ぎず世に名を出し給はずや(以下略)

花圃が歌門を開くと仄聞した一葉は雄次郎(雪嶺、雄次郎は幼名)
の収入が乏しいために才女花圃が内助の功を發揮しようと計画した
のだろうと想像を逞しくした。実は花圃が近所の女学生に『紫式部
日記』を教えたのを歌子に咎められたのだという。更に一葉は田中
みの子の許を訪れた時のことを叙しながら花圃をかなり厳しく批判
する。

二十七日 田中君を牛込に訪ふ(中略)談は中嶋の師が上なり
品行日々にみだれて吝いよく甚敷哥道に尽すこゝろは塵ほと
も見えざるに弟子のふえなんことをこれ求めて我れ身しりそき
てより新米の弟子二十人にあまりぬ よめる歌はと問へばこそ
の稽古納めに哥合したる十中の八九は手にはとゝのはず語格み
だれて哥といふべき風情はなし 坐に他の大人なかりしこそよ
けれ なけかはしきおとろへ方と聞ゆ 田中君などが詠草一月
にも十月にも満ぞくに直しなど与へられたる事なしといふは偽
のみにもあらざるべし かねて我が上にも知ることなればかゝ
る中にこの有様を知りつくしたる龍子ぬしかこれに身を投して
家門を開かんとすと聞こそおほろげのかんがへにはあらざるべ
し 秋の紅葉のさかりは今一時なる 師が袖にすがりて我世の

春をむかへんとするの結構此間にならずあるべし

右のように一葉は様々に邪推して、「すべててんぐがたきの世」だと嘆いているが、零落の自分の運命を逆恨み的に世の中に転嫁して独りよがりの憂き晴らしを日記という閉ざされた世界で謳歌しているのが、児童的であろう。しかし二十二歳の娘の心の奥にこのような情念が満ちていた、そのことは一葉文学の成立と性質を考える上で重要だと思われる。田中みの子も家門を開くようなことを言っていることを受けて「此人もとより汚濁の外にたちてすみ渡りたるころならぬはしれとおもて清くしてうらにけがれをかくす龍子なとのにく、いやしきによしけがれはけがれとして多数のすてたる此人にせめては哥道にすゝむ方だけをはげまさんとて也 右もにこれり左もにこれり 師も龍子も此人も何れにこのうなるをあれをすてゝこれをたすくるは時のよはきを見るにしのびず 人はたのまぬ義をおこし而我れから苦悶に身をなやます我か浅はかさあはれむにたえたり」と、随分な八つ当たりの誹謗である。が、繰り返すよのだが「おもて清くしてうらにけがれをかくす」というように一葉が世の中一般を諷視した、その僻見が一葉文学を成立させるエネルギーになったと言えないだろうか。このような独りよがりの子供じみた邪推は一葉日記に散見され、一葉という作家の裏面本性が露呈したようにも捉えられようが、既述したとおり一葉の運命は十五歳を境に大きく暗転し、少女時代にあつたものを次々に失い、丸裸同然になる。下谷龍泉寺で商売を始めてからは僅かに残つたプライドまでも捨て、裸一貫の肝が据わつたようである。「我はもとよりうきよに捨て物の一身」という言葉も引用した二月二十七日の日記中にある。勿論こうした大時代がかつた開き直り、粹がりは落ちぶれてた自分の自己劇化、自己粉飾でしかなく、結局は自己満足以外の

何物でもないだろう。が、そのような自己粉飾的主体を仮構したればこそ、穿ちと僻目のような一葉文学の主題が稀有な古典的美意識を保つて現前することになつたと考えられるのではないか。その辺は後に回すが、萩の舎の中島歌子とともに三宅花圃は世の中の実相を一葉に示した教材のような存在で、それが真の実相であるかはさておいて一葉文学成立にとつて重要な契機であつた。

さて樋口一葉という女性・作家は存命の時から何かしら謎めいた魅力や偶像的神秘性のような雰囲気、オーラを持つていたようだ。一葉自身が日記を見ても分かるとおり、自己劇化したい性情の人でもあつたようだ。当たり前のことだがそれは一葉が女性だつたから、女性らしい女性だつたからなのだろう。つまり細々した心情の綾を操るが如き陰日向のある女性、時には饒舌であり、時にはじつと下を見て頭も上げず、それでいて相手の一寸した特徴を見逃さず値踏みでもするように神経の棘を研いでいるといったことである。できれば、日記に見られる壮士まがいの大言壮語によつてむしろ一葉像と、一葉に直接会つた人たちの、例えば御殿女中のようなだつたといった桃水の評などから考えられる一葉像とが余りに違い過ぎる。

『文学界』の仲間で面識のあつた藤村は後に次のように述べた。

近頃は種々な方面に偶像破壊者が起つて来た。美術界が左様だし、劇界が左様だ。新派の婦人がしきりに一葉破壊を企て、居るのも、矢張それだ。

一葉の破壊が始まつたのは、あの日記が公にされてからのことだ。もし一葉にすぐれた處があるなら、それは破壊された後でもすぐれたものに相違ない。あたかも好く出来た城は、残つた後の城址としても好いやうなものだ。

一葉はThinkerとして特色のある人では無かつた。一葉の日

記を公にしたことは、彼女の艱難な生涯と幾多の興味ある挿話とを展げて見せたには相違ないが、一面に於ては彼女の最も不得手なところを併せ開放した趣がある。芸術とは何ぞや。恋愛とは何ぞや。それらの問題を思考する上には今日の婦人は幾倍かの有利な位置に立つて居る。偶像破壊者はその弱点に乗じて起つて来た。(中略)

破壊された後の一葉には何が残るだらう。大音寺前の活版屋に成つて見ても矢張り相違ない。当時の文学の空気の中で、あれだけ自分の創作を日常生活に近づけたことや、あの才気のある風俗の観察や、女としての激情なぞは一葉の価値を定めさせるものであらうと思ふ。

正直に言へば、私は女としての一葉をあまり好まなかつた。あれほどサツパリした人であつたにも関わらず私には女といふものを全くヌキにして一葉を考へることは出来なかつた。一葉の日記を見ると、彼女の方でも亦た私には殆んど交渉の無かつたことが分る。けれども女としての彼女を私が好まなかつたからと言つて、それが彼女には何の関りも無いことだ。彼女も亦た私の尊敬する友人の中でも好んだ人もあるし、好まなかつた人もある。

藤村の言う「女としての一葉」は、所謂セクシャリティとかポラプチュアスとかいうことではなく、微妙に陰日向のある、自分の世界に閉じ籠りがちな性質を言うのだから。しかし藤村は別の文章では「女史の会話は、機知、冷嘲、同情相交つて、殆んど応接するに違がない位であつた。また多少物を誇大にするやうな癖があつた。世間に苦勞した人だけあつて談話の間にも、人の為に嘆き、自己を嘲り、冷熱並び到るといふ趣があつた。」と述べている。才走つた機知

の女性一葉と「女としての一葉」は、同じ一葉像を結ぶものであるうか。

藤村の友人の馬場孤蝶はほぼ同じ頃に次のように述べる。

何時であつたか、相馬さんが一葉論をなされて、一葉は前代の女の最後の女であつたと云ふ様な事を言はれた、と思ふ。日記で見るとさう云ふ明らかに認められる。いやそればかりでは無い。飽くまで女性らしい所が諸処に認められる所謂盾の両面を見る事が出来ないのが先づ並の女の本性なのだが、さう云ふ如何にも女らしい処が日記には沢山ある。男であつて見れば、人に対しても物に対しても自分の方からばかりは判断しない。是々の事がある人が言ひ或は話したが、自分には斯う云ふ風に思へるけれども、それはたゞ自分がさう思ふのみで向ふの人の心持なり或はその事件そのものなりは自分の思ふのとは反対の事ではあるまいか、と云ふ風に立脚地を変へて考へ直して見る余裕があるのだが、婦人になるとさう云ふ余裕は余り無い。一葉の日記にはつまり主張一点張りで見たり解釈したりして行かうとする女の狭い所が如何にもよく出て居る。それが私共にとつては非常に面白い所だと思ふ。事実を知つて居る私などから見ると、明らかに一葉が誤解して居る部分のはつきりと分る。一例を挙げると、廿九年の事かと思ふのだが、戸川秋骨と平田禿木の二人が或る雨の降る日に一葉の家を訪ねた。一葉は忙しかつたので居留守をつかつた。すると二人は着物が余り濡れて居るから乾かしたい、と云ふので座敷を借りて少し居た。一葉はその間奥の方で隠れて居たのであるが、その日の所には居留守だと疑つて上つて来て家探し同様な事をした、と憤つて書いてある。秋骨禿木の両君が、居ると知りながら上つて人を

困らせると云ふ様な人でない事は、両君を知つて居る人々は何人も保証する所であらうと思ふのだが、一葉の方では直ぐに両君に悪意があつたと断定して、憤つて居る所が如何にも面白い。面と向つて話した処で私に見えた一葉は、そんな場合には笑つて書きさうなものであるのだが、さうでない処が余程面白い。もつとも一葉がさう思ふまでには、前には親しかつた二人の人に対して誤解に誤解を重ねて多少の悪感を持つて居つたので、さう云ふ見方をする様になつたのであるが、私から見るとその誤解の径路が如何にも女らしく、又当時の芸術家氣質の若い人々の心持を一葉は理解し兼ねたと云ふ所が、明らかに認められる。一葉は戸川君などを大分誤解して居る、同情を求めると云ふ様な場合を直ぐに恋愛と解釈して居る。(中略)さう云ふ所から見ると一葉は如何にも僻むだ婦人のようであるが、その僻み方が真正面の僻み方で私には心持が悪くない。如何にも女らしい単純な僻み方だ。⁴⁾

孤蝶が紹介した相馬御風の「樋口一葉論」⁵⁾は前年の『早稲田文学』に書いたもので、御風は論の末尾に「現在如実の人間生活、殊に女性としての人間生活には、過去の文学史上に於ては一葉位深刻に考へもし、観もした人は少ない。併し又それと同時に自然とか、自然と人間の関係とか、神とか仏とかさう云つた風の、云はゞ人間そのもの、本体的存在問題について、一葉位考へなかつた人は少ないやうに思ふ。一葉の観た人生は、たゞ人間と人間との存在関係に外ならなかつた。」と述べて、御風は一葉が形而上的世界に無関心無意識でただ現実の、とりわけ女の運命にのみ素材も関心も極限されていたと言ふ。それは一葉の短い人生の後半半分が、殆ど金銭的尽瘁に終始し、病氣にも祟られながら辛うじてか弱い女の意気地によつて支

えられたものであるから、形而上的思惟に至らなかつたのは当然と言へる。さらに御風は次のように一葉論を締めくくつた。

一葉の悲哀は、あらゆる日本の女の悲哀の権化であつた。彼は此の限りなき悲哀を担つて、「人の声も聞えない、物の音もない、静かな、静かな、自分の心も何もぼうつとして物思ひのない」境へと去つた。そこには神もなかつた。仏もなかつた。たゞ一様に灰色の霧に包まれた、荒漠限りない滅亡の世界であつた。

一葉はやはり古い日本の最後の女であつた。彼は又最後の江戸の女であつた。

御風の言わんとすることは、一葉が個人意識に目覚めぬ封建的な婦人で、家や家族と一心同体には結ばれている女であつたという意味であろう。一葉の時代は社会通念的に男尊女卑であり、民法などの法律上も女性の権利は低かつたことから女三人の家を保持することは容易なことではなく、金銭面だけでなく他人から侮られぬようにするために一葉は自然と意固地にならざるを得なかつたと思われる。日記にも度々金銭などに関係して他人を誇り罵る場面があるが、母や妹を助けて家を守ろうとする余り、他人に対する度を越した悪罵になつたのだらう。明治中期の日本は弱者や没落者を救済出来るほどの社会力や包容力はなく、むしろ弱者の犠牲の上に近代化を進めざるを得なかつた。藤村の『家』や『夜明け前』を見ても分かるが、明治の近代化の波は封建社会的な固定した穏やかな人間関係を壊しながら進んだのである。馬籠と妻籠の島崎家と木曾福島の高瀬家の没落の上に藤村の近代文学が成立したこともそうした時勢の象徴の一つと言えよう。御風は糸魚川の旧家の出身で糸魚川に隠棲してから良寛研究に打ち込んだ人であるから、一葉の文学が余りに市井的な

人情悲劇に終始していることが物足りなかったのかもしれない。

では一葉はどのような女性作家だったのか、文学史的にも人物的にもそれほどに謎めいた不可解な作家だったのだろうか。関良一が六十年前にまとめたものを参考にすると、関は、「これまでの一葉観は、基本的には、^④抒情詩人風に、芸術派の作家とみる型、^⑤虚無的なリアリストとみる型、^⑥文明批評家肌の、人生派の作家とみる型」とさらに「^⑦古風な、前近代的な、いわゆるlast woman of old Japanとみる型と」、その逆に、「^⑧進歩的な女性の先駆者とみる型」がある。そして「一葉の人柄を、^⑨下町風のおてんばな、したたかものとみる型と、^⑩士族の娘らしい、しとやかな山の手風のお嬢さんタイプとみる型」もあるようだ。この中で^④は露伴・緑雨・鷗外の「三人冗語」の『たけくらべ』評が最初のピークで、鷗外の「まこととこの詩人」評価がその代表で、孤蝶の一葉評価はそれに続くものであるという。が、緑雨はそこから除かれる。そうした「まことこの詩人」的な評価は大正文壇に於いて一葉天才の評価が定まるにつれ国文学者たちに受け継がれ、本間久雄、湯地孝、塩田良平に流れているのだと言う。^⑧の評価は緑雨に端を発するようで、関によれば緑雨は抒情詩人的な一葉と一葉文学の裏面に潜む「うらみ・憤り」・ペシミズム―あるいは、ほとんど肉感的というべき女の生理のようなものを発見した、すくなくとも発見しかかった」のだと言う。それを継承したのは和田芳恵の一葉研究で、和田は厭世的だがたくましい実生活者でリアリストとして一葉を捉えたのではないかと関は考える。^⑥の一葉観は『青年文』の田岡嶺雲辺りに発する。横山源之助が晩年の一葉を二葉亭に紹介しようとしたことを重視するところから発して、一葉には「文明批評家的傾向があり、さらにすすんで現実を改革しようとする実行家としての素志」もあったと関は一時

は考えていたが、次第に^④^⑤へ移行してきたと言う。^④は既に見たとおり御風の見解で、平林たい子あたりに通ずる。^⑤は^④に対するアンチテーゼで「一葉は近代の自我なりヒューマニティーなりに目覚めた女性であると論ずるところに、多少のあふなさをともなった魅力」があり、和田芳恵や長谷川泉などがやや同調しかけたが、関自身はこの見方にたいして相当消極的である。^⑥を強く打ち出したのは後述する三宅花圃で、^⑦の見方は花圃への反対の立場をとった一葉の親友伊藤藤子であった。関の考えでは花圃の方があると見ている。そして^⑧に見せかけた張本人は一葉自身で、男性作家に示した一葉の保護色というか擬態的な像が流布したけれども、実像は花圃の辛辣な見方がより妥当だろうというのが関の見解である。関は次に^④^⑤の問題に関連して一葉の文学史的位置づけは、勝本清一郎の説（「一葉・われは女なりけるものを」『自由婦人』昭和23・8（9）を有力とし、一葉文学は「紅葉・露伴を中心とする元禄文学復興の延長線と、「文学界」の初期浪漫主義との中間にあった」という勝本説に加えて、「桃水はもとより、浪六などという、もうひとつ通俗的な文学との関連が考えられてよい」と述べている。こう見て来ると一葉という女性像も文学史的位置付けも否としていて何処に真相があるのか実に分かりにくい。一葉はそれほど分からない作家なのかという疑問が逆に湧き出してくる。

そこで本稿では一葉の生涯と文学を彼女の十五歳以降の喪失的人生と併みという観点から論究したい。周囲に居た作家・友人や、学者まで含めた多くの人々から見た多様な一葉像という点では、喪失の一人一葉の自己顕明、mystificationたる一葉、神秘化する一葉という面から考え、そのような様々の作用が輻輳増幅して一葉legendのようなものが次第に出来上がったのではないかと仮定に立つて、

一葉レジェンドの解析を試みたいと思う。但し喪失は一葉自身の喪失の人生というだけでなく、明治日本の近代化による喪失若しくは疎外という大きな枠組みの問題として措定出来る。さらに一葉は小説の道具小道具にしばしば子供を用いた。一葉にとつて子供とは何か。むろんそれは一葉の子供時代が発想の母体であろうが、一葉にとつて子供とは永遠に喪失するものではなかったのだろうか。或は子供だけでなく、人間一般と置き換えることも可能かもしれない。子供は成長するに従い子供時代の美しさや大きな希望、総じて穢れない時空を喪失し、遂には汚穢に塗れた薄汚い大人に成り果てて行く、それは本当ならあつたかもしれない自分を疎外することに他ならない、といった一葉の喪失観または疎外観的諦観が根本となつて一葉の美しく哀れな文学作品が結晶したと思われる。それは十五歳からの一葉が自然に身につけたものである。さてそこへ行く前に一葉の文体という問題を考察することは是非必要に思える。

2

樋口一葉の文体と文学について考えてみたい。明治時代の女性の文章は、概して雅文、擬古文で、封建時代以来の文語文体を引きずつていた。そのことに關して、平田由美は、「森有礼文部大臣の名による懸賞論文募集において一等賞を得た中川小十郎、正木政吉の『男女ノ文体ヲ二ニスル方法』(『大日本教育会雑誌』明治21年3月、4月、引用者注)では、言文一致文体の採用こそが良策であると主張されていた。この懸賞論文が機縁となつて、中川、正木の兩人が『答案論文の趣旨』であつた言文一致の文体を世に拡めんと欲して夙に文章家を以て我々が認めてゐた山田(美妙)氏を引き入れて」(中川

小十郎「いらつめ」と言文一致(上)』(『立命館文学』昭和9年6月)引用者注)発行したのが、女性向け文芸雑誌として名を馳せることになる『いらつめ』である。女が言文一致体を獲得することの困難さと、この雑誌がそのことにおいて果たした役割とについては第四章に詳述するが、しかしながら雅文体はもちろんのこと、「文を談話のやうに認めた投書募集に対して思いの丈を等身大の形で表現しえたくぐれて有声なことが、近代国民国家の『国語』としての言文一致体制に組み込まれることはなかった。手紙をはじめとする女性の書き物が言文一致体によつてなされるようになるのは、ずっと遅く、日露戦争後のことである。」と言う。平田は注の中で『それから』の梅子の手紙を引く。『蒲団』の「四」には芳子から時雄に宛てて「言文一致で、すらすらと此上ない達筆」の手紙が届く。恋人の田中が六時に新橋に到着するという報せで、「先生——実は御相談に上り度いと存じましたが、余り急でしたものだから、独断で実行致しました。」と始まる。作中時間を花袋の年譜に照らすと、明治三十八年九月ということになる。ともかく女性が普通に言文一致体を書くようになるのは明治の後半であろう。が、一葉の時代にもさまざまに文章の試みが為されていたことは、花園・紫琴・賤子らの文章を見れば分かる。そこに言及する前に森鷗外の『たけくらべ』評はよく知られるものだが、「まことの詩人」という一葉評価の元をなすものであるから引用したい。

第二のひいき。兎いはん角いはんと思ひ居たりしことも、その言葉こそ同じからね、先づ前席の人の無碍自在なる弁才もてて演べ尽されたる心地すれば、われは口を杜いでも止むべきかなれど、さてはまた余りに残惜しかるべし。大音寺前とはそも、いかなる処なるぞ。いふまでもなく売色を業とするもの、

余を享くるを辱とせざる人の群り住める俗の俗なる境なり。されば縦令よび声ばかりにもせよ、自然派横行すと聞ゆる今の文壇の作家の一人として、この作者がその物語の世界をこゝに扱みたるも別段不思議なることなからむ。唯々不思議なるは、

この境に出没する人物のゾラ、イブセン等の写し慣れ、所謂自然派の極力模倣する、人の形したる畜類ならで、吾人と共に笑ひ共に哭すべきまことの人間なることなり。われは作者が捕へ来りたる原材とその出したる詩趣とを較べて見て、此人の筆の下には、灰を撒きて花を開かす手段あるを知り得たり。われは縦令世の人に一葉崇拜の嘲を受けんまでも、此人にまことの詩人といふ称をおくることを惜しまざるなり。且個人的特色ある人物を写すは、或る類型の人物を写すより難く、或る境遇の Milieu に於ける個人を写すは、ひとり立ちて特色ある個人を写すより更に難し。たけ競出で、復た大音寺前なしともいふべきまで、彼地の「ロカアル、コロリット」を描写して何の窘迫せる筆痕をも止めざるこの作者は、まことに得易からざる才女なるかな。（『めさまし草』明治29・4、）

鵬外は、「此人の筆」にかかると「人間の形したる畜類」までが「まことの人間」のように描かれる、巧緻の筆さばきに驚嘆して、いかにも詩人の才覚があると称賛しているので、小説がリアルに現実を描いていて、文学的な構想、主題と内容の深さ、プロット展開の妙などが優れているとの総合的な作品の質に言及しているのではない。また、大音寺前は売春業の余得に与ることを恥辱と感じない人達の住処で、「俗の俗」の場所であるが、その人たちに何らかの人間的な同情や愛情をもって創作されているとも言つてはいない。そもそも『たけくらべ』の登場人物は殆ど子供から大人に移行しつつある子供

で、直接に売春業者の余得に与る者ではない。『たけくらべ』には遊女や亡八などは間接的にしか出てこない。要するに一葉は「ロカアル、コロリット」を背景に子供の世界を淡く描いたのであり、吉原遊郭の実態を描いたわけではなかった。つまり筆さばき、雅文体の優美な筆致が一葉作品の勘所なので、口語文に置き換えてしまうとその持ち味は減殺される質のものではなからうか。

一葉は本格的な日記や小説を書き始めた明治二十四年の春、十九歳の時から日記は雅文、擬古文に一貫し、小説は地の文は雅文で会話は文語文的と口語的と使い分けをしている。が全体的には雅文体と言つてよく、明治中期の言文一致の趨勢や花園や逍遙の欧化主義的傾向には同調しなかった。

一葉の文章は、日記『若葉かげ』（明治24年4月）で見ると、次のようである。

卯月十一日 吉田かとり子ぬしの澄田河の家に、花見の宴に招かるゝ日也 友なる人々は、師の君のがりつどひて共に行給ふもおはしき おのれは、妹のたれこめのみ居て春の風にもあらぬかうれたければいてやともになとそゝのかして誘ひ出ぬ
花くもりとかいふらんやうに少し空打霞みて日のかけのけさやかならぬもいとよし 上野の岡はさかり過ぬとか聞つれと花は盛りに月はいくまなきをのみ愛るものかは いでやその散かたの木かげこそをかしからめといへはならんか岡の法師のまねひにやといもうとなる人は打ゑみぬ さすがに面なくて得いわず成ぬるもをかし 我すむ家より上野の岡は遠きほとにてもなかりければまた朝露のしけきほとに來にけり 聞けんやうにもあらず清水の御堂の辺りこそ大方うつろひたれと権現の御社の右手の方など若木なからまたさかり也き さと吹風のひやゝかなる

にぬれたる花ひらのふゝきと斗散みたるゝはいとをかしくておほふ斗の袖もかな(大ぞらにおほふばかりの袖もがな春さく花を風にまかせじ)『後撰集』引用者注)といはまほしけれと例のと笑はれんかうしろめたくてやみぬ 澄田川にも心のいそけはをしき木かけたちはなれて車坂下るほどこゝは父君世にい給ひし頃花の折としなれはいつもいづもおのれらともなひ給ひて朝夕立ならし給し所よとゆくりなく妹のかたるをきけはむかしの春もおもかけにうかふ心地して

山桜ことしもにほふ花かけに

ちりてかへらぬ君をこそ思へ

心細しやなといふまゝに朝露ならねと二人のそてはぬれ渡りぬ山下といふ所よきりてむかし住けん宿(徒町3丁目33、引用者注、現在の東上野二丁目、上野駅の東南の辺り)のわたり過るほとよの移り行きまこそしるけれ

このように日記は、地の文も会話も共に雅文体で、『更級日記』や『徒然草』を思わせ、内容も桜の散る様子に亡き父親の思いを重ねた古めかしいものである。

二年三か月ほど経った日記、下谷区龍泉寺町へ転居した直後の『塵之中』(明治26年7月25日)を見る。

落ふれてそてに涙のかゝるとき人の心の奥ぞ知らるゝとはげにいひける言葉哉 たらぬことなき其むかしは人はたれもたれも情ふかきもの 世はいつとてかはりなきものとのみ思ひてけるよ 人世之行路難は人情反ふくの間にあるこそいみしけれ 父兄よにおはしましける昔しの人もこゝにかく落はふれぬる今日の人も見るめに何れかはりも覚えされど心ぎまのいろいろをみれば浮世さながらうつろひぬる様にこそおぼゆれ

右のように一葉は人情の移ろいやすさを嘆いているようだが、じつはそのように世の中を見る自分という殻に入ることである種の自己防衛、つまり自分の陣地に逃げ込むための防衛線をいろいろに張り巡らしているのである。二十歳を少し越しただけの女性にこのように巧妙な自意識の盾を作らせたのが明治初中期の日本だったと言えないだろうか。

亡くなる少し前、最後に近い日記『みづの上日記』(明治29年7月20日)を見る。

七月二十日 雨風おひたゝし 午後二時ころ計らす三木君幸田君を伴ひ来る はしめて逢ひ参らす 我れは幸田露伴と名のらるゝに有さまつくつくうち守れは色白く胸のあたり赤く丈はひくゝしてよくこえたり物いふ声に重みあり ひくゝしつみていと静かにかたる めさまし草に小説ならずともよし何か書きもの寄せられたし こを頼みに来つるなりといふ、

七月二十日午後二時頃に三木竹二が露伴を連れて来て、『めさまし草』に寄稿するように、そして合作小説の相談など、三時間も長居した。一葉はその内容をかなり詳しく日記に記した。翌々日は緑雨が来て、『めさまし草』に参加するのはやめる方がいいと忠告し、そこで日記は終わった。

以上、日記の中から三件を引いたが、小説の方は構成意識が先に立つて筆勢は穏やかに抑制されているが、日記は一葉の感情が露骨に表れている部分もあって、一葉の肉声に触れる感じすらある。が、文体は決して擬古文の枠を出ない。頑ななまでに擬古文体の様式を守っている。これは一葉のポーズというか、一葉が短い一生の間に貧苦と病氣と世間の逆風に抗うために取った最後の砦のようなものであったかもしれない。

田山花袋は『近代の小説』(大正12年2月)の中で次のように回想して述べている。

さう言へば、此頃『一葉全集』が縮刷になつた。私はそれをもう一度読んで見た。かの女などは、近松、西鶴、それからずつとつゞいた雅俗折衷体の最後のものであるやうな感じがした。あそこであつた文章を書くものは絶えた。さう思ふと、一葉女史その人が、はつきりあの時代の——明治二十七八年頃の女を代表してゐるやうな気がした。『たけくらべ』『行く雲』『濁江』などを『めざまし草』の大家の連中の中で、露伴が一番多く推稱したのも成ほどと點頭された。ことに、あの日記を和文で書いてゐるなども、十分にその人の教養の何物であるかを示すに足ると私は思ふ。(六)

一葉の短かい一生も、明治文壇では特異なことゝしなければならなかつた。私は幸にしてか、不幸にしてか、一葉には逢つたことはなかつた。しかし、あながち縁故のないことはないのであつた。私が一番始めに『都の花』に『新桜川』といふ作を発表した時、かの女も『うもれ木』といふ作を花圃女史の紹介つきで始めてそこに出してゐた。『都の花』の当時の編輯人であつた藤本藤陰を私が始めて神田の仲猿楽町に訪ねた時、藤陰氏が『面白い女の作家が生まれたな……田辺さんからの紹介ですが、めづらしく男らしい作家です……。女とは思へないくらゐしつかりした文章です』と言つたことを今でも私は覚えてゐる。

当時の新興文学の芽としては、かの女は決して新しいとは言ふことは出来なかつた。その教養も全くお嬢さん風と言つて好かつた。かの女は矢張歌の会に出て老人などに交つて歌を詠んだりしたものゝ一人であつた。恐らくかの女にして、もう少し

その周囲に新しいグルウプを持つてゐたならば、もう少し新しい方に出て来ることも出来たであらうが、桃水などをその師にしたゝめか、それともまた、あつた古い文体に興味を持つやうな気分であつたのか、あつた若い心をあの古い文体の中に埋め尽して了つたのは惜しいやうな気がした。(中略)

それに、不思議なことには、あの時代になつても、あつた雅俗折衷の文体がかなり同時に勢力を持つてゐたといふことであつた。それはまさかにあの文体が将来の文体になるとは思ひもしなかつたであらうけれども、露伴が書き、一葉が書き、緑雨が書き、後には鷗外すら物好きにあの真似をして、『染ちがへ』などゝいふのを書いたくらゐであるから、あつた文体もかなり同時に持て囃されたには相違なかつた。しかし国木田独歩などは、その頃から、さうした文体の不自由なのを説き、何うしてあの若い一葉があつた文体に頼つたかと訝つてゐた。花袋の『新桜川』は明治二十五年十一月の『都の花』に載せたもので、謡曲の『桜川』を翻案としたもの、「常陸国真壁町に、高山新蔵といへる一人の男ありけり。」と書き始める文語文体である。一葉『うもれ木』は「描き出だすや一穂の筆さきに、五百羅漢十六善神、空に楼閣をかまへ、思ひを廻廊にめぐらし」といつた露伴風の文体、構想の物語であつた。文体も小説の中身も大きく変化しつゝあつた明治中期において、一葉は何を吸収しどのような文学を目指したのか。花袋の言うように「新しいグルウプ」が近くにあればより新しい方向に進めたかもしれない、しかし一葉は創刊時から『文学界』の同人的位置に居たわけで、花袋が『文学界』に接触する一年半も前に天知や禿木を知っていたのであるから新しい思潮に全く遠かつたとは言えない。花袋が独歩と交友したのは明治二十九年十一月十二日に玉茗

と訪ねたのが最初で、独歩の作った「ライスカレー」を食べたことが『東京の三十年』に書いてある。それは一葉の死の十一日前であるから、独歩が一葉の文体について語ったのは一葉の死後のことであろう。ともかく独歩も花袋も藤村も明治中期には文語文体ではあるが、一葉のような雅文体ではなかった。では一葉はやはり和歌の稽古のような古風なお嬢さん芸を身に付けたけれども、小説に関しては花圃に倣って原稿料を得たいがために書いたが、特に新文学を開拓するような意気込みはなかった。文壇に参加するという気持ちも希薄だったと言えるかもしれない。そうした点に触れて、塩田良平は一葉が桃水に会いに行つた頃、どの程度桃水の作品を読んでいたか不明であり、桃水の芸術に理解があつたかも分からぬ。一葉の家では当時『朝日新聞』をとつていなかった。桃水に弟子入りした後、朝日を借覧したようだ⁸と推測し次のように述べている。

であるから、桃水の連載小説はあまり読んでおられないらしく、初対面の日に「君が著作の小説四五冊を借りておるくらゐである。又当時の一葉の現文壇に関する知識はうすく、紅露をはじめとして新進作家のものはわざわざ買ふ資力はなかつたとしても、余り借りても見ておなかつたらしい。(一葉が文壇人に注意し出したのは桃水と知合い、更に自分が書き出してからのことである)彼女の文学修業は、それまではあくまで歌道修業であり、従つて勉強も古典が中心であつたことは免れない。

従つて一葉が桃水に近づかうとしたことは一に文学の手ほどきを受けようためであり、もつと打算的に考へれば姉弟子の田辺龍子のやうに早く作品を商品化したためであつたと考へてもさほど失当ではない。もし一葉がもつと小説を読み文壇の動きを知つてゐたならば、抬頭してきた新進作家に近づき、戯作

系統の桃水を選ばなかつたかも知れないともいへる。

塩田はかく述べるが、明治二十五年前後の文壇を眺める時、やはり紅露追鷗が中心で緑雨、浪六がその周辺に居るといつた状態である。その中で桃水の『胡沙吹く風』が『東京朝日』に明治二十四年十月から約半年間連載されていたのであるから、戯作的とは言つても一葉が桃水に師事したのは、桃水の小説を読んでいたかいないかに関係なく、さほど間違つてはいなかつたと言える。問題は桃水に師事して一年余りで例の野々宮菊子の嫉妬心などによつて桃水と絶交し、さしたる指導を受けられなかつた筈である。では一葉の所謂奇蹟の十四か月を為したものは図書館通いなどの独学によるものであろうか。⁹

幸田露伴は次のように述べる。¹⁰

一葉の作は、西鶴を彼女が読んで、西鶴の自由大胆さの影響を受け彼女の平安朝文学以来の文学の殻から釈放された時から其光りを放ち出したのである。其の以前、即ち学校教育、和歌和文の先生の教育の桎梏の内に在つた間のもものは、それ等の教養が矢張り一葉の為に大なる力になつたには疑ひ無いが、所謂習作時代に属して、観る可きものは乏しい。

露伴の言う「西鶴の自由大胆さ」が一葉をどのように変えたのかがはつきりしないが、文体や小説の結構などは初期から晩年までそう変わつてはいないとも思える。ただ、晩年に至つては緑雨の言う「冷笑」が社会の裏側の事情を多少とも僻みつぽく描き出し、貧弱者の目を通して見る世の中の実相としての文学が優艶な筆致で描き出された。そこに一葉独特の優美で哀切極まる市井文学が生れたのであろう。

明治二十年代の文体がどのように推移したかは難しい問題だが、

一葉が作家に立つきっかけとなった三宅花園の『敷の鶯』（明治21年6月）は、

男「アハ、ハ、ハ。此ッ、レデーヌは。パアトナア計お好で僕なんぞとをどつては。夜会に来たやうなお心持が遊ばさぬといふのだから。

甲女「うそ。うそ計。さうぢやムリ升んけれども。あなたとをどるとやたらにお引張りし遊ばすものですから……あの目がまはるやうでムリますんで。其おことわりを申上たのですワ。

（中略）

と互にかたらふこの二嬢は。数多群衆したる貴嬢中にて水ぎはのたちたる人物。先細かに評せんには。一人は二八計にして色白く目大きく。丹花の唇は嚴格にふさぎたれどもたけからず。右のように男女の会話で始まっていて、逍遙の『当世書生氣質』を模した筆致である。

これを同じように男女の会話で始まる『にこりえ』（『文芸倶楽部』明治28・9）と比べてみると違いは明瞭である。

おい木村さん信さん寄つてお出よ、お寄りといつたら寄つても宜いではないか、又素通りで二葉やへ行く気だらう、押かけて行つて引ずつて来るからさう思ひな、ほんとにお湯なら帰りに屹度よつてお呉れよ、嘘吐きだから何を言ふか知れやしないと店先に立つて馴染らしき突かけ下駄の男をとらへて小言をいふやうな物の言ひぶり、腹も立たずか言訳しながら後刻に後刻にと行過るあとを、一寸舌打しながら見送つて（以下略）

『敷の鶯』と近い時期に発表された若松賤子『小公子』（明治23年8月）25年1月、『女学雑誌』は次のようである。

セドリツクには誰も云ふて聞かせる人が有ませんかつたから、

何も知らないでみたのでした。おとつさんは、イギリス人だつたと云ふこと丈は、おつかさんに聞ゐて、知つておましたが、おとつさんの歿したのは、極く少さいうちでしたから、よく記憶して居ませんで、たゞ大きな人で、眼が浅黄色で、頬髯が長くつて、時々肩へ乗せて坐敷中を連れ廻られたことの面白かつたこと丈しか、ハツキリとは記憶してゐせんかつた。

キリスト教系の『女学雑誌』は萩の舎で和歌を学ぶ一葉とは無縁であつたに違いない。もう一人福田英子・中島湘烟とともに明治民権派女性の代表清水紫琴「こわれ指環」（明治24年1月、『女学雑誌』）は次のようである。

あなたは私のこの指環の玉が抜けておりますのがお気にかかると、そりやアあなたのおつしやる通り、こんなにかわれたまゝまではめておりますのは、あんまり見つともよくありませんから、何なりともはめかへれば、宜しいので……ですが私の為にはこの指環のこわれたのが記念でありますから、どうしてもこれをはめかへる事が出来ないのです。ああ月日の経つは誠に早いものでこの指環をこわしてから、もはや二年越になります。こうして見ると花園、賤子、紫琴それぞれに近代的文章を工夫しているのが分る。対するに一葉に相似するところの田澤稲舟の『しるばら』（明治28年12月、『文芸倶楽部』）は次のように始まる。

神田川の流に沿うて、門の柳の糸細く長く風に靡きて、御神燈の影くらき待合菊のやの奥座敷、六畳一間を小意気に作りて、床には蜀山の讀したる鳥文齋が遊女の横物、真偽は知らねど楊柳観音の置物さすがに取り合せをかしく、あまりの事といはれをきけば、なびけといふなぞなぞ、いかさま商売柄にはありうちのなし。

一葉より年少で、明治二十五年に尾崎紅葉に弟子入りした北田薄氷はどうであったか。『黒眼鏡』(明治28年12月、『文芸倶楽部』)の書き出しは以下のようである。

日中は熱さに萎れて見えし庭の草木も、夕方の打水にいと涼しくも風情変れる心地よさ。庭下駄軽く音たて、娘のお秀は立出でぬ。見れば今を湯上りと覚しく、薄化粧したる顔は桜色に染まりて、房々と濃き頭髮を品よき高髻に結び、夏は誰しも好ましき淡白したる中形の浴衣に、友仙縮緬の帯配合よく団扇片手に四方を眺むる姿の美しさは、之を何にか譬ふべき。

このように並べて見ると、一葉・稲舟・薄氷はやはり擬古文、雅文の古めかしい文体である。強いて言えば一葉晩年の文章は『にごりえ』冒頭を見ても分かるように、躍動感臨場感があり、現場を見ている一葉の呼吸が伝わるような力強き衝動感があり、擬古文体と雖も一葉独特の完成を見せているのが著しい特徴といえる。同時代の紅葉が文章に凝ったことはよく知られるが、例えば『三人妻』(明治25年3月〜5月、『読売新聞』)の書き出し「あるやうで無いものを金銭とて、天下の人の寐言にまでいうて欲しがらざるはなし。信に此金銭の獲難きことの不思議さは、鉄を吸ふには奇妙、磁石といふ神通力あるに、此は何したものと、金時計買ふ人の後に、過難に立てる納豆売の独語道理の至なり。」は、洒落気はあつてもやはり戯作の域を出ない。『多情多恨』(明治29年2月、『読売新聞』)では「鷺見柳之助は其妻を亡つてはや二七日になる。去る者は日に疎しであるが、彼は此十四日をば未だ昨日のやうに想つてゐる、時としては、今朝のやうにも想ふ。余り思ひ窮めては、未だ生きてゐるやうにも想つてゐる。」と言文一致体になっている。この話の中の鷺見柳之助の亡妻への恋着、友人の妻お種との恋のような恋でないような愛着

も面白いが、たとえば『にごりえ』のお力・源七の貧窮者の運命悲劇愛、『十三夜』のお閨・録之助の不遇無力者の負の連鎖愛といった一葉の冷笑性の滲んだ情話から見るとインパクトが弱いようである。しかし、一葉の小説はやはり雅文体を基礎とした古風な筆致にその本領があるので、言文一致や西洋風の外来語を交えたような近代的な装いは古い人情話の風合いにそぐわず、むしろ興趣を殺ぐものでしかなかったと思われる。その点、樋口答子は、次のように述べる。¹⁾

一葉の文学を決定するものに文章の修辞法がある。

初期作品の平安朝、元禄の擬古文を、一葉独自の女性らしい感覺的觀察と描写による、繊細で美しい文学として再現したのも、一葉生来の素質と共に諸種の経験、そして少女時代からの古典教養と一方ならぬ努力の成果で、どの要素一つ欠けても傑作の誕生は見られなかったであらう。そして、その小説には源氏物語を始めとして王朝物語、近世の雅俗折衷の文体がみられるが、それに対して、一葉の日記には枕草子、徒然草の影響が強く認められるのである。

右の所説は概ね妥当なものであらう。また、和田繁二郎は下のように論じている。²⁾

一葉は「閨校」(明治二五年三月)以前には、比較的彼女の実生活に密着したと見られる習作を試み、かつ文体も擬古的ではなかった。それが徐々に、悲劇的な物語世界に移行し、「閨校」を処女発表作とするに至っている。文体も擬古文になってしまっている。これは、基本的に、これまでの女流作家のように、新しい教養がなく、新しい思想が胚胎していなかったことによつて見るとよいと思う。花圃の『藪の鶯』に触発されて小説を志したというが、『藪の鶯』のもつ理想主義をどのように受けと

ったのであろうか。結局、彼女は、前時代的な「英雄豪傑の伝任侠義人の行為」にあこがれるところから、また王朝物語的な感傷へつながる文学的世界に、さらに江戸末期の戯作類の興趣にインタレストを感じる女性であったのである。それが二三の男性との接触により、なかんずく桃水に対する恋情の実体験により、男女の感傷的な情調の世界に没入するに至ったものと見られる。その舞台の設定も、義理人情を基本とする旧時代的なもので、〈家〉への認識も必ずしも現実的なものではなかった。

(中略)

結局、一葉はそれ以前の女流の抱懐していたような新しい教養や思想をもつことなく、作品の面で、女性の生きる道を探り、また問題を提起するような作品をものすることがなかった。しかし、その反面、みずからの実生活の不如意から、現実への注目を深め、女性の置かれている立場をも直視するに至った。また、その現実のなかから、理想らしいものもまざるようになり、明確な主義主張とまではゆかなくても、何らかの視点に立つて、現状を提示するという、リアリズムの作家として名をあげるに至った。そのような現状の提示であったために、女性の悲劇をどのように提示しているのかを疑わせるような面もなくはないが、当代では、そういうリアルな提示だけでも十分に存在の意義が認められるものと思う。

一葉を「リアリズムの作家」と捉えたり一葉作を「リアルな提示」と捉えたりするのは少し躊躇われるが、『にこりえ』を深刻小説の中に含めることもあるので、全く見当違いとは言えない。しかし一葉は桃水との恋愛によって「男女の感傷的な情調の世界」に導かれたばかりでなく、やはり人生の半ばに大きな暗転があり、普通の女性がし

なくてもいような辛酸を嘗めた。利発で自意識の強い少女が成長する過渡期に世の中の裏面、真の裏面でなかったとしても一葉にとつて十分裏面であるような世の中の真実を知ったために世の裏側を衝くような、所謂冷笑的なスタンス、自己韜晦のポーズを体得したのではないか。この辺に関しては先述の関良一も多少触れていた三宅花圃の辛辣な見方が参考になる。その皮肉な批評はおそらく意地悪さの表れとか一葉への対抗意識などではなく、旧幕臣の娘でありながら様々の苦労を経験し、政教社の雪嶺は定職を持たない国粹主義思想家で貧苦などは全く気にしなかった。花圃も雪嶺と同じく世事に無頓着で、「結婚の翌日にはもう執達吏に攻められた」といった家計の破綻も平気だった人であるから、何の含む処もなく見たまま感じたままを述べたものと思われる。

私が夏子(一葉女史)を初めて見たのは、歌子先生の処でした——中島歌子です。(中略)「今まで知らない人だが……新しく来たのかしら」などと思ひながら見ておますと、髪などを恠う——変つた結び方にして、(一つは髪が薄かつたからでせうが)そればかりでなく起居拳動も何となく変つてゐて、ぢきに「元禄風」といふ様な感じが起りました。「まあ祇園のお梶(江戸中期祇園の八坂神社付近の茶屋の主人で歌才のあつた女、引用者注)とても言ひたいやうな人だ」と思つてをります(以下略)

十四五歳から歌子先生の世話になつて、塾に居たり又家から通つたりして居ましたが、其初は家は品川の方。後に父を失ひ住居も転じました。最う頻りに作をする頃は根津に居りましたので、其家(家)がもと銘酒屋をした家でした。傑作「にこり江」のお力は直ぐ隣の銘酒屋の女で、それをモデルにしたものです。

家は銘酒屋がかりで御座いませう。それに女ばかりの世帯

——男の兄弟もありましたが厄難で勘当の姿でしたから、母親と夏子と国ちやんといふ妹と三人きりの女世帯。それに夏ちやんがお世辞がよくて、宛然待合のお神様のやうだなどと申された位でしたから自然行き善いものと見えまして、始終男の書生が遊びに行つて居りました。(中略)

さう美麗な、といふ程の人でもありませんでした。けれどお世辞の実にいゝこと、それは最も人を逸さない——客待遇の実に上手な人でした、抜け目のない、気のおけない、まあ下町風と言つた様で、何か恚う人に摺り付くやうにして物を言ふ、といつた風でした。(中略)

随分苦しい生活を致したので、それを考へると可哀相な思に堪えません。もう少し生活に苦しませなかつたら、如彼天折(二十五歳歿)も致さなかつたでせうし最つとまだ暢びてゆけましたらうにと真に可哀相に存じます。店に荒物を並べて売りましたので、根津からまだ夜明前——真暗な内に家を出て、神田の田町まで買出しに行つて、歸つて来る頃は既う午前十時になる、といふ様な事をよく致したさうです。さうして疲れた身体で又考へたり筆を執つたり致したのでございます。

かうした逆境の人でしたから、妙に僻んだ感情を持つて居りました。歌子先生の処に居つた頃から、いろいろの人の事をいろいろに申してをりました。例の皮肉な観察は宜しうございませが、中には誤解や僻みに思はれる事も少なくないのです。先生に対しても同様で、先生の方ではそれは善くしてやるのですが、何うもそれに不足でした。(中略)

けれども一方から考へますと、かういふ僻んだ感情が却つて作の上には善かつたのかも知れません。拗ねた僻んだ感情や観

察が、あの小説には総てに見えて居りますので、それが又あの人の作の傑れた所です。さすれば僻んだ感情や観察力を作つた逆境も、強ち呪ふべきものではないかも知れません。固より生来の天才が主で御座いましたらうが……

花圃は物に拘らない性質であつたが、先の三宅美代子によると忘れつぽい人であつたから、多少の思い違いはあるようだ。「銘酒屋がかり」は少しおかしい。が実際は大体花圃の言う通りだったのではなからうか。伊東(田辺)なつ子は花圃とはかなり異なる、控え目な一葉像を描出している。平民組三人の仲間意識による欲目とも言えるが、他方は自分を幾通りにも演技仮装できる一葉の身のこなしに欺罔されたのかもしれない。

ここで花圃の言う僻みを考へてみたい。僻む、僻み、僻目などというと歪んだ性質と一般的には思われる。つまり物事を素直に受け取らず、歪めて考へる性質である。しかし一葉の場合は様々なものを喪失することによりそれまで抱いていた俗念や幻想から目覚め、視野が狭い、即ち未熟で狭量ではあつても彼女なりに新たな透徹した目を獲得した事によつて、普通の人の目には見えない真相が見えだした。それを僻みと言へば言えるだろう。花圃の言う「拗ねた僻んだ感情や観察」がそれである。僻み的にはあるが、一葉は次第にモノが見えて来たのである。例えば遊女や私娼のような最底辺の卑しい女に一片の真心があり、龍泉寺町の「かたぬ乞食など様の人」(『塵中日記』明治二十六年十一月十五日)にも真心があるといった僻目、奥様と言われる女にも裏があるといった僻みである。世の中のそうした裏の真相は近代化の波のなかで起きて来たことで、社会の組織化、西欧化や金力主義の横行といった諸事情によつて齎されたものである。一葉はそこまで看破することはできなかった。それゆ

え喪失の美学という日本文学の伝統的な曖昧な抒情性に流し込んだ
きらいはある。しかし見方によつては近代の闇に切り込んだとも言
える。

3

一葉は日記を書き始めた明治二十四年四月から晩年、亡くなる
少し前の二十九年七月までほぼ同じ文体を貫いた。先述の樋口芥
子は、一葉の文章に枕草子の影響の強いことを論じているが、小説、
日記ともに独特の雅文体を書きとおした一葉の書くことのスタンス
は考える必要がある。一葉の生涯と文学の根本が、両親の庇護のも
とで夢や希望のあつた利発な少女時代から一転してそれらを悉く無
くして行つた喪失感にあることは確実のように思える。明治時代と
いうすべてが新しく伸びて行く時代にあつて、時代の裏側に閉塞さ
れた一葉一家はすべてを失つて行く。表側の明るい世界に対し、一
葉の陥つた世界は裏、陰の世界である。そのことが一葉に擬古文体
を強制した真因ではなかつたか。古めかしい文体に固執することが、
せめても一葉の時代へのレジストだつたのではないだろうか。擬古
文が依然として主流であつた明治中期とは言え、雅文に固執したよ
うな一葉の文体は紫琴、花圃、賤子らに比べるとあまりに保守的古
典的であつた。概括するに、父兄を亡くし、金銭や家を無くし、許
嫁を無くしプライドをも擲つた一葉において、喪失による目覚めが
文学の根底を作つたと言えよう。喪失とは日常に埋没した生活から
目覚めること、曇つていた目が目覚めること、その結果、ある意味
で花圃の言う僻みのような直観が生れる。一葉がどこまでそれを意
識していたかは不明だが、僻み、僻目は物事を素直に受け取らない、

歪めて受け取ることであるが、僻みが世の実相を照らし出すことも
一面は正しい。一葉の場合、喪失感の生んだこの僻みが文学的切り
口を作つた。そしてその自己劇化、自己粉飾の作用を文章化する際
に最も適したのが雅文体であつたと云えよう。更に時代に対する呪
詛のような感情も物語を生み出す力となつたと思われる。一葉がど
ちらかと言えば古めかしい世界、例えば祭りに集う子供達、子供は
一葉の子供時代と重なる永遠の喪失者なのだろうし、子供の時空と
いうユートピアは文字通りどこにも無い永遠の喪失であろう。或は
十三夜の月見団子や大晦日などに文学的要素を見出したのも、因襲
や迷信、節句や行事などの無意味な賑わいに近代社会の失つた人情
や共同体的共生意識を感じ取つたからだと考えられる。古い世界は
じつは封建時代の桎梏や制約が人を擲めていて、自由も個人もない
とは言え、近代主義の制度や金銭主義によつて侵されない人情や身
分の固定的世界に安住出来た時代であつたのかもしれない。そこで
は発展も変化も皆無に等しいけれどもリジッドな共同体社会が温和
低水準に持続していた。一葉は明治近代を生きつつもその日向と日
影とを実感することで時代から取り残され蹂躪される旧社会の怨嗟
と泣訴を美文に結晶させる芸を体得した。逆から言うとも一葉を追
詰めた明治近代に對置するものとして、貧者の人情社会を持つて来
るしかなかつた。『十三夜』のお関と高坂録之助が幼馴染の淡い恋心
に浸つていた時期、そこには既に近代化の荒波が近づいていたのだ
ろうが、少年少女はまだ気付いていなかったが、お関がまた「十七
の御正月」であるから満年齢でいうと十五歳でしかない少女を「奏任
の髻」となる原田勇が通りすがりに見初め、荒波が人をさらうよう
にお関を奪い取つた。やがて可愛い玩具に飽きた原田は獲物を鬻る
ようにお関を苛む、というのは一葉の穿つた社会解剖、洞察であつ

たわけだが、そのことをお閨が父に愁訴しても、父親は「百年の運」を取り逃がすわけにはいかぬといってお閨を家に戻す。父齋藤主計は、お閨の訴えを聞いて、原田家対齋藤家の対等の家としての対決の構図を取り得ない。齋藤家の父であるという権威は明治時代の機能社会には通用しないことを齋藤主計は知っているし、一葉は齋藤主計一家と高坂録之助一家の負の連鎖を時代の陰画のように描いた。貧者の人情は薄暗い十三夜の月夜に、齋藤の父母の涙、録之助の人力車とともに哀愁となつて消えた。齋藤家は原田の鼠屑によつて弟亥之助が昼間は役所の小間使い、夜は夜学に行き、将来は安心といった見方も出来るかもしれないが、それは明治以後の官僚社会に対して余りに楽観的な見解で、明治以後の近代日本はいろいろの「閨」の社会だったので、「閨」から漏れた人々は簡単に排斥蹂躪されるのだ。蛇足だが、田山花袋の兄実弥登などはいいい例で、岡谷繁実の後ろ盾を得て職を得たけれども、官僚組織の争いが起きると塵芥のように吹き飛ばされてしまった。

一葉は、明治という時代や世界と日本という構図についてそのよくな本質的な意味を洞見することは到底出来なかつた筈である。日記にも時々時代がかつた大言壮語が見られるが、英雄豪傑に憧れた子供じみた夢の続きでしかない。が、近代の意味などの巨大で深遠な問題の本質が二十歳を過ぎたばかりの女性に分かるはずもないので、そこに一葉の怨情と艶麗の憂悶が胚胎し、さらに和歌の抒情が加わつて一葉の詩精神を醸成したものと考えられる。大きな希望と希望の崩落・喪失、意地・矜持と鬱屈と憂悶、古典教養と現実の落差、そのようなものが総合して一葉の奇妙に美しく、閉じられた詩の世界を作つた。近代小説として見る場合、そこには社会性自立性内面性があまり存在せず、時代劇や草双紙のような運命悲劇に終始

しているきらいはある。しかし美しい文体の効果と相俟つて一葉文学は明治近代の陰画か影絵のような儂い美学を達成した。贅言すれば近代に於ける喪失の問題は近代文学の根底に横たわる問題で、封建時代的共同性や定型的人生の喪失、身分と地位の喪失、文人墨客的風流の喪失等々の問題は様々に変形しつつ文学の主題になつたものと思われる。

(1) 滝藤満義「田辺花圃」(樋口一葉事典、おうふう、平成8)参照。

(2) 島崎藤村「偶像の破壊」(『文章世界』大正1・12、『後の新片町より』に収録)参照。

(3) 島崎藤村「一葉女史に就いて」(『中央公論』明治40・5)参照。

(4) 馬場孤蝶「日記を通して観たる樋口一葉」(『早稲田文学』明治44・12、引用は明治文学全集「樋口一葉集」による)

(5) 相馬御風「樋口一葉論」(『早稲田文学』明治43・1、引用は明治文学全集参照。

(6) 関良「二葉観の問題」(樋口一葉 考証と試論『有精堂出版、昭和45・10、初出は『金城国文』昭和31・10)参照。

(7) 平田由美「女性表現の明治史」(平成11、岩波)参照。

(8) 塩田良平「桃水側から見た一葉」(昭和31年6月、『二葉全集』7、筑摩書房、引用は明治文学全集参照。

(9) 参考までに、半井桃水「業平竹」(明治23年9月)を引用する。

(『祐経』)ハテ合点の行かぬ、今小林が吹挙すいぎよにて呼出したる二人の者、誰やらに似たハ似たハ(十郎)似たとハ(五郎)誰に(十、五)似ましたな(祐経)オ、サ我一家の因みある河津の三郎祐泰に(十、五)何と……(中略)……幕府盛世の頃寺社奉行を勤めたる松平兵部少輔と云へるハ禄高十余万石を領し当時権勢家として持囃されしが殊に其奥方綾羽の前は文学武術の諸道に達して才知も又凡常ならず男勝りと聞えたり

- (10) 幸田露伴「樋口一葉」(『改造』昭和2・2、引用は『たけくらべ』作品論集)参照。
- (11) 樋口荅子「一葉日記と枕草子」(『明治大正文学研究』昭和31年4月)
- (12) 和田繁二郎『明治前期女流文学論―樋口一葉とその前後―』(桜楓社、平成元)
- (13) 三宅花圃「女文豪が活躍の面影(一葉女史が事ども)」(『女学世界』明治41年7月)
- (14) 三宅美代子「花圃のことども」(『明治文学全集月報19』昭和41年8月、筑摩書房)参照。
- (15) 田辺夏子「わが友樋口一葉のこと」(『婦人朝日』昭和16年9月)「一葉の憶ひ出」(昭和25年1月、潮鳴会発行)但し引用は『一葉の憶ひ出』(新修版)『(日本図書センター、昭和59年)による。

中原中也の詩のスタイルについて

鈴木 こそげえ

中原中也の詩のスタイルについてはこれまで多くの先行研究で述べられてきたが、しばしば言及されるのがその音楽性の豊かさについてである。これは七五・五七調等の整った韻律の詩が多いことや、リフレインの多用、独特なオノマトペの使用といった特徴によるものであろう。

その一方で、リズムの流れを突然崩すような破調や転調を採り入れている点も中也詩のスタイルの一つの特徴とされている。しかし、このことが詩の完成度を下げている訳ではなく、むしろ中也詩の魅力の一つと言えるのである。本稿では、この転調や破調を含んだ定型詩というスタイルの形成について考察している。

この中也独自の詩のスタイルは、中也自身が詩の出発点と位置づける「朝の歌」から既に見られる特徴であるため、第一章では短歌を制作していた少年時代からダダイズムとの遭遇、さらにそこから「朝の歌」へ至るまでの歩みを辿った。中也は短歌を嗜んでいた両親のもとに自身も短歌を作り始めたが、やがて文学に傾倒するあまり中学を落第し、一人京都へ移ることとなる。そこでダダイズムを知った中也は、自身もダダ的な詩を書き始める。ただし、日本のダダイズムはヨーロッパとは異なり、芸術運動として広く浸透したわけではなかった。中也が衝撃を受けた『ダダイスト新吉の詩』(中央美術社 一九二三・二)の著者である高橋新吉もダダ詩の視覚性にま

ず惹かれたと言い、後にダダから離れている。中也がダダイズムに傾倒したのも、主張に共感したというよりも、堅苦しい家庭や短歌の体系化された美的秩序から解放されるように感じられたためであろう。中也のダダ詩は破壊の要素が弱かったが、既成概念を崩そうとするダダイズムに中也はある種の純粋性を見出していたのではないかと考えられ、後年の〈名辞以前の世界〉への希求へと繋がるものが感じられる。

ダダ的な詩から「朝の歌」のような端正な詩へと至るきっかけになったとされているのは、フランス象徴詩の影響である。これは劇的な変化であるように感じられるが、中也のダダ詩はダダイズムの作品としては破壊の要素が少なく、中也が筆写していたランボオの「酔ひどれ船」のようなフランス象徴詩と全く質の異なるものではなかったと考えられる。

第二章では、形式と韻律の定型性について考察する。「朝の歌」以降、中也は形式や韻律の整った作品を多く制作するようになった。形式面では「朝の歌」をはじめとしてソネットを頻繁に使用しており、行分けが全くされていない詩篇は少ない。同時期でソネットを多く用いた詩人には他に立原道造がいた。しかし、立原の多くのソネットにはテーマ的にも視覚的にも一貫したものが感じられるが、中也のソネットは内容も視覚性も作品毎に異なっている。また、中也は

初期にソネットを多く書いており、ダダから離れようとする時期に、定型を用いることで新たな詩を模索していたのではないかと考えられる。中也自身が散文で書くといつまでも詩が完成しないと語ったという回想も残されているため、うたいたいことを詩に昇華するための枠組みとして定型が必要とされたのかもしれない。

音数律に関しては、中也はダダから離れる時期に五七調を主調とした作品を多く書いていたが、やがて七五調を用いることが多くなり、後年には七七調の作品も多く書かれた。しかし、たとえ主調となっていないとしても、これらの韻律が取り入れられた作品が中也詩には多い。このことには、まず少年時の作歌の経験が影響していると考えられる。短歌を作る際に、文語と口語を混用することで韻律を調整していたと思われる作品があり、作歌を通してこの詩法を身に付けていったと考えられる。また、宮沢賢治や北原白秋といった他詩人からの影響も指摘してよいだろう。

伝統的な韻律を取り入れることで、中也は激しい感情を詩に昇華することができ、しばしば道化調と言われる歪なりズムを生み出すことにも成功していたのではないだろうか。また中也は詩を「うた」ととらえていることが芸術論から伺え、こうした伝統的な韻律の使用もこの詩観が根源となっていると考えられる。

第三章では、中也詩の音楽性を形成する重要な要素であるオノマトペとリフレインについて考察する。中也は自ら独創的なオノマトペをつくり出すこともあったが、既存のオノマトペを通常とは異なる対象に用いたり、リズムや視覚的効果を生み出したりするなどして使いこなししていた。中也の少年時の作文には、こうした後年に繋がるようなオノマトペの使用が既に見られ、その後他作品の影響なども受ける中で自身の詩法として確立されていったのではないかと

考えられる。また、オノマトペは対象となるものの手触りを感じることができるものであり、中也は新たにオノマトペをつくり出すことで、自身の芸術観における「名辞以前の世界」から言葉を自らの手で掴もうとしていたのではないだろうか。

リフレインは、繰り返しすることでイメージを増幅させることのほか、視覚的・聴覚的効果を発揮させることもできた。また、初連と最終連が同一であるもの、冒頭の詩句と最終連の詩句が同一あるいは類似である循環構造の作品も複数存在する。このような繰り返しのリズムや循環構造を取り入れることで、詩は歌の性質を帯びてくる。中也は民謡や童謡に関心を抱いていた時期があり、西洋音楽を愛好していた。このような音楽への志向が、繰り返しのリズムを多用することの根源にあると考えられる。

第四章では、転調・破調という詩法について考察している。第三章までに見てきたように、中也詩には伝統的な形式や韻律、オノマトペやリフレインによって構成された音楽性の高いものが多かった。その一方で転調・破調を取り入れ、部分的にリズムが崩された作品も多くある。韻律が途中で切り替わったり一部だけ異なっていたりするものもあるが、文体を切り替えるかたちでの転調・破調がなされた作品もある。また、視覚的な変化によるものも多い。この詩法の形成に影響を与えた可能性のあるものとして、まず考えられるのはダダイズムである。文体の切り替えによる転調・破調がある詩と関連して、中也のダダ的な詩にも常体と敬体が混用されたものがあり、これは高橋新吉のダダ詩にも見られる詩法なのである。

中也の詩の出発点と位置づけられる「朝の歌」は転調・破調を含む五七調文語詩であるが、それ以前のダダ詩にも転調が取り入れられた作品が存在した。ただし中也の少年時代の短歌にも字余りが多く、

一三歳の時には破格語法を意識していたことを後年中也が書き記しており、この頃から破格的なものへの同調を感じていたことは否定できない。「朝の歌」をはじめとするダダから離れていく時期の作品に、「朝の歌」同様の五七調主体の詩篇がいくつか存在したが、それらの作品のほとんどに転調・破調が取り入れられている。この時期ダダから脱却しようとする際に五七調の整った形式の作品を試みていたと考えられるが、同時に転調・破調という詩法の試みもなされていたと思われる。

中也の詩に表出される転調・破調の根源には、一八歳の時の恋人との別れや周囲との絶えざる衝突といった、私生活における衝撃や動揺があつたのではないだろうか。中也は転調・破調を自在に使いこなしていても、形式的にはソネットなど整ったものを後年まで使っていた。作品空間を確実に保ちながらも、韻律や形式が完全に整えられた詩では伝えきれない、うたおうとする内容の生々しい手触りを転調・破調によって残そうとしたのではないだろうか。

伝統的な形式や韻律が使われることの多い中也詩において、突然のリズムの切り替えや異なる文体の挿入などは歪な印象を与えるものである。しかしそのことによつて、端正な芸術作品として完結することなく、複雑な陰影が与えられていると言えるだろう。中也はソネットや五七調・七五調等の音数律、オノマトペやリフレインによつて詩としての枠組みやうたの響きを与え、転調・破調という詩法を用いることで、それだけでは伝えきれない生の感触を表出しようとしたのではないだろうか。

「古代文学における禁忌」 要旨

鈴木 翠

禁忌は文学にとってどのような意義を持ち得るのか。それが本稿の骨子となる問いである。

禁忌について意識したとき、わたしたちはいかに自分がさまざまな禁止にとり囲まれながら日々を営んでいるかを自覚するだろう。禁忌は規範の一位相としてわたしたちの発言や行為を抑制する不文律といえる。そして不文律である禁忌はひとを外面(禁忌)だけでなく内面(忌避意識)からも抑制する。それは文学の場においても例外ではない。語り手や歌い手の禁忌意識は説話や歌のありかたに作用し、作品世界の秩序や登場人物の言動にも反映する。したがって文学における禁忌を研究することは、現実世界の禁忌が作品世界にあらわれる禁忌とかわつてどのような語りや歌を生み出すのか、禁忌がどのように文学を“現実を超えていくもの”として成立させ得るのかを明らかにする意義をもつだろう。

さて、本稿では冒頭の問いを説明するべく『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』を主な考察対象とし、全四章構成で論を進めた。特に古代文学にこだわったのは、日本文学の源流ともいえる古代文学における禁忌のありようを探ることが、ひいては日本文化に通底する禁忌のありようを探ることにつながると考えているためである。以下に各章の概略を記し、本稿の要旨とする。

「禁忌」という語は現在、原義を“はつきり印をつけられる・くぎられる”とするポリネシア語「タブー (taboo, tapu)」の訳語とされる。学術語の「タブー」とは、異常(≡神聖性、不浄性、危険性、非日常性などを帯びた言動や事物)と正常(≡俗性、清浄性、安全性、日常性などを帯びた言動や事物)とを明確に区別し、互いの接近や接触を禁じることで超自然的な災難を避ける禁制のことを意味している。この概念に対応する「禁忌」の概念は本来古代中国で成立したもので、中国においては“神による吉事を受け、凶事を避けるために忌避するべきものごと”を指した。この「禁忌」という語と概念が日本の知識層に伝わったのは八世紀以前のことであった。ここで注意すべきは知識層に属さない当時の日本人がこの概念に見合う概念を持ち合わせていたのか、もし持ち合わせていたのならばそれはどういった概念かといったことであり、結論からいえば、当時の日本人は「禁忌」の概念に相当し得る「イミ」という独自の概念を持ち合わせていたと考えられる。異常なものにかかわることで生じる超自然的な災いへのイミ(忌避)は異常なものに対する“く”してはいけないうといった厳格な禁制、すなわち禁忌を生み出すことになり、この禁忌ははじめ個人の態度にあらわれ、やがて共同体内に伝播し共有されていく。そして禁忌が共同体の規範になるとともに、禁忌の侵犯は「ツミ」としても受け止められた。ツミは異常性(特に聖性)を帯びた

ものに対する侵犯行為、もしくは共同体の秩序を破壊する行為のことをいい、「ケガレ」といった異常性(不浄性)と密接に結びついている。このツミの脱却には「ハラヘ」という宗教的かつ社会的儀礼が必要であった。(序章)

この禁忌およびツミを内包した説話や歌を古代文学に求めてみると、決して少なくない数の事例が散見される。その事例がどういった禁忌意識の上にあるのかを考察するにあたって、まずは『記』仲哀条にみられる「罪の類」、すなわち「生刺・逆刺・あ離・溝埋・屎戸・上通下通婚・馬婚・牛婚・鶏婚・犬婚」を古代における原始的なツミとして指針にした。これらのツミはおよそ①身体損壊の禁忌(生刺・逆刺)、②稲作妨害の禁忌(あ離・溝埋)、③齋場冒瀆の禁忌(屎戸)、④性にまつわる禁忌(上通下通婚・馬婚・牛婚・鶏婚・犬婚)といった四つに大別できる。④の範疇には恋愛の禁忌(人目人言の禁忌、人妻との恋愛の禁忌)および姦淫の禁忌(近親姦の禁忌、采女・斎宮・尼との姦淫の禁忌)が含まれており、それぞれ異なる禁忌意識に起因する禁忌となっている。

次に、①～④の範疇に属さない事例について、どのような忌避觀念にもとづいて特定の事物や言動を禁忌としているのかを検討し便宜上分類してみると、およそ(1)ことばの禁忌、(2)方位の禁忌、(3)死の禁忌、(4)見るなどの禁忌(視覚の禁忌)、(5)神および神聖なるものに対する禁忌、(6)食の禁忌、(7)夜にまつわる禁忌というように分類できた。これらの禁忌は、(1)はことばや名前の呪力へのおそれ、(2)は東の方位にかかわるアマテラスへのおそれ、(3)は死へのおそれ、(4)は真実の姿を見る・見られることへのおそれ、(5)は神に由来する異常性(聖性)へのおそれ、(6)は家畜殺

害によるケガレ発生や食物の呪力による負の状態への感染に対するおそれ、(7)は視界のきかない(＝人間の手の及ばない)闇という空間へのおそれからくるものであった。(二一章)

このような種々の禁忌は、散文形式の文学(説話)および韻文形式の文学(歌謡)のどちらにもうかがうことができる。まず説話における禁忌は必ずその「侵犯」と「侵犯の結果」をとまなう形で語られており、侵犯の結果はおおよそ侵犯した側(侵犯者、または侵犯者が属する共同体)にとつてのどうしようもない不慮の事態や死を含む破壊となつている。この語りかたはひとつの話型として成立しているといえよう。記紀および『風土記』の説話で語られる禁忌は、天皇が王権を保持する正当性の裏付け、王権争いにおける敗者側もしくは天皇による統治における不穏分子の排斥の原因、神のもつ威力の強調といった役割を担わされている。また、禁忌侵犯に至る者の心理について叙述することは、ひとの内面にわき上がる感情がいかに抑制しがたい強烈さをもつものであるかを語ることもあった。

次に『万葉集』筆録の歌において、禁忌は恋歌の内によまれることがひとときが多い。恋歌における禁忌は恋の重大な障害として、一方では逢瀬や関係の発展がままならない煩悶や嘆きなどをあらわし、一方ではその抑圧を凌駕しようとする想いの激しさをあらわす。禁忌をよみこむことでもたらされる切実な情緒は、歌垣や饗宴といった社交的な場を盛り上げるために必要とされ、その要請はやがて禁じられた恋の相手としての人妻といったモチーフを創出することになったと考えられる。(三一章)

以上のような古代文学上の語りや歌にみられる禁忌のありようは、その文学を享受していた古代の人びとの禁忌に対する意識のありよ

うを照らしだす。そのありようは少なからず現代のわたしたちにも重なるものである。古代文学を通して日本人の禁忌に対する意識の源流を探ることは、日本人としてのひとつの人間の真実を探ることにつながり、禁忌の文学性とはそういうところに垣間見えるのではないだろうか。古代から現代に一貫して存在する禁忌を通して考えてみるならば、例として「近親姦の禁忌(インセスト・タブー)」があげられる。この禁忌は、養老律の制定(七五七)から旧法の制定(一八八九)まで文律においても明確に禁じられてきたものであった。養老律は唐律を継受して編纂されたものだが、養老律における近親姦の禁止は父祖の妻妾を対象にした規定であり、唐律に比べて明らかに狭い規定範囲かつ軽い罪刑に修正されている。この縦軸の近親姦の禁止は、『記』仲哀条および『延喜式』祝詞「六月晦大祓」からもうかがうことができ、これらのツミには親子関係に代表される縦軸の人間関係が共同体の秩序を成立させていることを前提にした忌避意識がはたらいている。すなわち、親子関係といった縦軸の關係に男女の性行為という横軸の關係を介入させることで親子関係、ひいては共同体の秩序を破壊することへの忌避意識である。こういったツミの根底には常に共同体的な抑圧と個人の情動との相克があるだろう。人びとが「大祓」という国家儀礼であらゆるツミの消滅を求めたのも、抗いがたい情動に起因するツミがひとが誰かとともにいきることを阻害することのないようにという祈りであり決意であったと思われる。

また、近親姦といった場合、親子関係といった縦軸の近親姦もあれば兄弟姉妹間における横軸の近親姦もあるはずだが、兄弟姉妹間の近親姦をツミとする直接的な言及は古典文学には見受けられない。これは、記紀にみられる天皇の系譜記事や軽太子の説話を見る限り、

異母の兄弟姉妹間での婚姻を認める一方、同母の兄弟姉妹間の婚姻を禁忌としていた事情によるものだと思われる。この差異は、古代の婚姻形態である招婿婚が妻方同居にもとづく生母中心の強い親族意識―近親姦における近親の意識を生じさせることとかわつていよう。生母が同じ兄弟姉妹の間には強い紐帯が育まれ、この紐帯はオナリ神信仰やヒメヒコ制を成立させることになる。中央集権国家の設立とともにこのヒメヒコ制は排斥されていくが、人びとの意識のおくかに同母の兄弟姉妹間の紐帯の強さは底流しづづけた。そのことはこの紐帯を下敷きにした説話や歌からも察せられ、記紀にみられる同母兄妹姦の説話、すなわち軽太子の説話が語られる基盤もここにあるだろう。軽太子の悲恋伝承部分の語りかたにおいて『記』と『紀』には無視できないちがひがある。それは、同母兄妹姦について『記』が同母の兄弟姉妹の紐帯の極致であることを重点的に語ろうとすることに對し、『紀』は政治的な重要人物である軽太子が起こした国家的事件として語ろうとするということである。この相違は禁忌侵犯の結果のありようにも認めることができよう。『紀』は、皇太子である軽太子を罰することはできないという政治的判断にもとづき軽太郎女を流刑にしたと語り、共同体に災いをもたらすツミを流すハラへをおこなっている。一方『記』は軽太子の流刑地での兄妹心中を語り、同母兄妹の紐帯に根ざした恋情を認めない世の秩序から兄妹を解放するといった意味をツミのハラへに重ね合わせている。これは、ひとがひとであるがゆえに禁忌を犯してしまうことへの甘受が文学への昇華としてあらわれているということではないだろうか。現実においては禁忌侵犯としかいえないような事柄を「語る」もしくは「歌う」ことは、その事柄にかかわるひとのこのころのありようを添えることであり、その事柄からひとつの人間の真実を見

出すことにつながる。こういったところにこそ、禁忌が、現実を超えていく。文学の場にあらわれてくることの意義の一端がうかがえる。(終章)

喜久雄（編）『日本語音声と日本語教育』（1992 年度文部省科学研究費補助金重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」D 1 班研究成果報告書），187222.

戸田貴子(2003)「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究』7-2号，日本語音声学会.

畑ゆかり・山下直子(2011)「語彙指導を目指したカタカナ語の指導の試み－韓国人日本語学習者の場合」『日本文化学報』48号，日本比較文化学会.

松崎寛(2004)「韓国語話者の日本語音声－音声教育の観点から－」『音声研究』3-3号，日本語音声学会.

KJK1は好きなアイドルをきっかけにバラエティー番組や雑誌を活用した学習戦略を使用しており、KJK2は試験で高得点を取ることが学習戦略になっていることが明らかになった。またカタカナ語に対する意識も異なり、カタカナ語の習得と学習戦略が必ずしも一致するものではないことが明らかになった。同じ学習環境下においても、個々の学習スタイルによって学習戦略の使用が異なる結果となったが、それがその学習者にとって役に立つものであれば、その学習者にとって有効な学習戦略と言えるのではないだろうか。

4. 日本語教育への指導の提言と今後の課題

カタカナ語の指導をするにあたって求められることは、指導する側である教師が日本語におけるカタカナ語の増加やその使用状況について把握し、今後避けては通れないということを十分理解することである。まず学習者の意識の観点から、学習者がカタカナ語に対して興味を持ち、役に立つと実感できるようなカタカナ語指導を心がけることが重要である。そのためには学習者の興味をひき、必要な情報や知識が得られる教材を使用することが効果的だと思われる。また、多様な学習戦略を提示することも大切である。学習戦略は個人の学習スタイルや環境などによって異なるが、外部の働きかけによって改善できるものであり、海外で学んでいても学習者であっても楽しくカタカナ語を習得するきっかけをすることができる。そのため、学習者が意図的に学習戦略を使用できるようにサポートを行うことはもちろんのこと、より多くの学習に対するカタカナ語の学習戦略のパターンを明らかにすることを今後の課題としたい。

注釈

- ¹ 「学習者が知識を効果的に構築しようとする際に用いる方策・手段・及び自らの学習能力を促進させる操作」また、「学習をより効果的に、また楽しく行えるようにするための学習者自らの創意・工夫」のことを指す(伊東 1994, p.98)。
- ² 自身の言語能力の足りないところを補う戦略。
- ³ 目標言語の母語話者の友だちを作ったり、その言語を話すためのサークル活動などに参加したりといった戦略。

参考文献

- 伊東祐郎(1994)「日本語指導法：個性と学習戦略からの一考案」『留学生日本語教育センター論集』20号，東京外国語大学。
- 馬瀬良雄・中東靖恵(1998)「日本語教育における外来語表記の諸問題－韓国語母語話者の日本語学習者の場合－」『フェリス女学院大学文学部紀要』33号，フェリス女学院。
- 大平雅也(1995)「日韓外来語音の対照研究」『日本語教育論集』11号，日本語教育研究部会。
- 姜 枝廷(2006)「韓国人学習者の日本語の文字表記に見られる音声項目の誤用－長母音を中心に」『大学院論集』3号，杏林大学大学院国際協力研究科。
- 助川泰彦(1993)「母語別に見た発音の傾向 アンケート調査の結果から」水谷修・鮎澤孝子・前川

一方、正答率の低かった語はJJKとKJKともに(1) 長音記号が2つ以上含まれる語と(2) 特殊拍が複数含まれる語で、長音を始めとする特殊拍が複数含まれている語であった。

表2 グループ別正答率下位5位

JJK			KJK		
誤答率 順位	問題及び正答	正答率N=30 (正答率)	誤答率 順位	問題及び正答	正答率N=30 (正答率)
1	(9)セーター	5 (16.7%)	1	(12)シャンプー	4 (13.3%)
2	(12)シャンプー	10 (33.3%)	2	(11)エスカレーター	5 (16.7%)
3	(11)エスカレーター	12 (40.0%)	3	(9)セーター	6 (20.0%)
3	(13)サービスセンター	12 (40.0%)	4	(13)サービスセンター	8 (26.7%)
4	(15)コーナー	14 (46.7%)	5	(14)キャッシュカード	10 (33.3%)
5	(14)キャッシュカード	15 (50.0%)			

JJKとKJKのグループ間で環境による有意差があるかどうかを χ 二乗検定で分析した結果、(11)、(23)が10%水準で(10)、(20)、(24)が5%水準ですべての問題においてJJKの正答率が有意に高いことが確認され、日本で学習する方が多くの場合に誤答が減り正答率が高いことが統計的に証明された。つまり、学習環境がカタカナ語習得に大きな影響を与えていると思われる。

3. フォローアップ・インタビュー調査

カタカナ語がよく書け、よく聞ける学習者はどのような学習ストラテジーを使っているのか、環境により使用している学習ストラテジーに違いがあるのかなど、カタカナ語の学習を促進する要因を明らかにすべく、質問紙調査の結果で正答率が高かったJJK 2名とKJK 2名から任意4名を対象にフォローアップ・インタビュー調査を行った。

インタビュー 番号	実施日	正答数 (正答率)	学習歴	性別
JJK1	2015/ 8/ 1	23 (92.0%)	3年	男
JJK2	2015/ 8/ 4	24 (96.0%)	9年	男
KJK1	2015/ 9/16	22 (91.7%)	6年	女
KJK2	2015/ 9/16	25 (100.0%)	6年	女

3.2. フォローアップ・インタビュー調査の結果と考察

成績上位群の4名のうち3名はカタカナ語の日本語化規則を利用して長音の有無を類推していることがわかった。従って、カタカナ語の日本語化規則を習得することで、高得点へと繋がったと思われる。また、学習ストラテジーについては4名全員が異なった学習ストラテジーを使用していることが明らかとなった。JJK1は社会的ストラテジー²が高く、日本人や日本社会に積極的に接していることが動機づけになっており、一方のJJK2は知らない言葉をメモするなど補償ストラテジー³を積極的に使っていることがわかった。

能性が推測される。また、教材によっては「コンピューター」としている教材もあれば「コンピュータ」としている教材もあり、表記にゆれが見られる語もあった。

2. 調査概要

日本で学ぶ韓国語学習者(以下、JJK)と韓国で学ぶ韓国語学習者(以下、KJK)の学習者を対象に学習環境とカタカナ語の習得との関係を明らかにするため、質問紙調査を実施した。調査協力者は東北大学に留学しているJJK31名と韓国の大真大学校で日本語専攻をしているKJK35名である。実際には66名を対象に調査を行ったが、このうち6名はカタカナ語の表記において20問(全25問)以上が空欄であったため、分析から除いた。

質問紙調査で出題した調査語は『初級みんなの日本語』(スリーエーネットワーク)のI・IIからカタカナ語を選出し、大平(1995)、松崎(1999)畑・山下(2011)を参考にして韓国語学習者が音声誤用を起こしやすいといわれている(1)長音記号が2つ以上含まれる語、(2)特殊拍が複数含まれる語、(3)日本独自の和製外来語、(4)非外来語でカタカナ表記されたもの、(5)原音[f]を含む語の5項目を設定した。

2.2. 質問紙調査の結果と考察

JJKとKJKのそれぞれでのグループで正答率の高かった語は(3)日本独自の和製外来語や(4)非外来語でカタカナ表記されたものが多いことがわかった。また、こうした語は韓国語学習者の苦手な長音が含まれていない語が多いため、正答率が高かったと思われる。さらに韓国語の外来語の中には「カラオケ」などの日本語のカタカナ語から借用した語が多く存在することも正答率が高かった要因だと考えられる。

表1 グループ別正答率上位5位

JJK			KJK		
正答率 順位	問題番号及び正答	正答数N=30 (正答数)	正答率 順位	問題番号及び正答	正答数N=30 (正答数)
1	(20)マンション	29 (97.7%)	1	(3)カラオケ	28 (93.3%)
2	(1)コンビニ	28 (93.3%)	2	(18)アルバイト	27 (90.0%)
2	(4)マンガ	28 (93.3%)	3	(5)アニメ	26 (86.7%)
2	(18)アルバイト	28 (93.3%)	4	(20)マンション	25 (83.3%)
3	(5)アニメ	27 (90.0%)	4	(25)ナイフ	25 (83.3%)
4	(16)ドイツ	26 (86.7%)	5	(1)コンビニ	23 (76.7%)
4	(25)ナイフ	26 (86.7%)	5	(4)マンガ	23 (76.7%)
5	(6)パンダ	25 (83.3%)	5	(6)パンダ	23 (76.7%)
5	(22)インスタントラーメン	25 (83.3%)	5	(16)ドイツ	23 (76.7%)
5	(24)フロント	25 (83.3%)			

修士論文題目及び内容の要旨

韓国人日本語学習者におけるカタカナ語の習得と学習ストラテジー

安田 佳奈枝

はじめに

本論文は、韓国人母語話者のカタカナ語の習得と学習ストラテジー¹の関係性を分析し、カタカナ語習得上における問題点を見出すと同時に、広くカタカナ語の習得状況を把握することで日本語教育におけるカタカナ語教育の一助となることを目指すものである。

日本語と韓国語は語順が同じであることや、中国語から入ってきた漢語(韓国語では漢字語)を使用している点から非常に似た言語とされている。また、韓国にも外来語が存在するため、韓国人母語話者にとって日本語の外来語の習得は容易であると予想される。しかし日本語と韓国語では音韻規則、音韻構造が異なるため同じ言語から取り入れたのにも関わらず発音や意味が異なる場合が多い。そのため、専門分野を学びに来る韓国人日本語学習者(以下、韓国人学習者)にとって専門用語としてよく使われるカタカナ語の習得は深刻な問題の一つである。そうした中で、日本(JFS)と韓国(JFL)の異なる環境で日本語を学んでいる韓国人学習者を対象にカタカナ語における習得状況と学習ストラテジーの関連性について明らかにすることが本論文の目的である。

本論文の具体的な内容は①日カタカナ語の習得の困難点と日本語教材を分析する、②学習環境とカタカナ語の習得との関係を明らかにする、③カタカナ語の習得と学習ストラテジーの関連を調べる、④カタカナ語の指導法や教材への提言を行う、の四点である。なお、②は質問紙調査、③はフォローアップ・インタビュー調査の結果をまとめることとする。

1. 教材分析

助川(1993)と戸田(1999)によると日本語学習者の特殊拍(長音、促音、撥音)には問題があると指摘されており、その中でも特に長音に関する知覚が困難であるとされている。長音に関しては、韓国人学習者においても習得が困難であると報告がされている(馬瀬・中東 1998, 姜 2006, 畑・山下 2011等)。

カタカナ語にはこうした特殊拍が多く含まれているため、カタカナ語学習を目的として作られた教材2冊と総合日本語教材の2冊、計4冊の教材を対象に特殊拍の出現数や教材で扱われているカタカナ語の内容について分析を行った。分析項目は①長音、②促音、③濁音、④半濁音、⑤撥音、⑥拗音の6つである。

その結果、4つの教材中3つの教材で長音の出現頻度が最も高いことが明らかとなった。日本語学習者にとって長音の習得が困難であるとされているのにも関わらず、このように長音の出現数が最も高いというのは意外な結果であったと同時に出現数が多いが故に長音の習得が十分にできていない可

メン神官団の庇護を受けながら、彼女がファラオとして長くエジプトの地を治められたものだと考える。

神であると公言していること、アメン神が第18王朝においてとても信仰の篤い国家神であること、そのアメン神を祀っているのがアメン神官団である、ということから言える。

そして、理由の二つ目は第18王朝において力を持っていたそのアメン神官団に関係している者たちの存在である。アメン神官団の「アメン」とは第18王朝から国家神として信仰されていた神であるが、第18王朝に入るまではただの地方神でしかなく、あまり信仰を集めていなかったとされている。では何故そのアメン神が国家神にまでなるまでの信仰を集めることが出来たのであろうか。

それは、第二中間期・第15・16王朝(前1795～1550年頃)に出現した「ヒクソス」の存在が大きい。ヒクソス²とは「異国からの支配者」という意味である。この意味からもわかるが、当時は異国の者がファラオとして君臨していた。この事は、エジプト史における最初の異民族支配であり、後世には恥ずべき暗黒時代として語り継がれていた。

第17王朝(前1650～1550年頃)になると、異民族支配からの脱却とエジプト人による国土再統一を目標にして、ヒクソスに反抗する姿勢をとるようになってくる。そして、第18王朝の創始者であるアハメス王(イアフメス1世)が見事ヒクソスとの争いに終止符を打ち、エジプトに王権を回復させることに成功したのである。そのヒクソスとの戦いの際に、加護を願い、祈りを捧げたのがアメン神であり、第18王朝を一貫として信仰される神になったのだ。

このようにして国家神にまでなり篤く信仰されたアメン神を祀っているアメン神官団は王の代行として国の祭事を執り行う権限を委任していた。しかし実際に遺された役人たちの碑文を見てみるとアメン神官団に関係している者の碑文がないのに対し、ハトシェプスト治下には4人も遺されている。しかもアメン神官団の長であるアメン大司祭のHAPUSENEBの碑文も遺されている。このことからハトシェプストが、アメン神はもちろんだが、神殿や寺院を建築しアメン神官団を手厚く擁護したことを示していると考えられる。何故そのようなことをしたのかと言えば、信仰を盛り上げればエジプトの地はますます豊かになると考えられただろうし、アメン神官団からも支援を受けられるからではないだろうか。そして、彼女がファラオとして長くエジプトの地を治めるために、まずアメン神官団を手中に治め、アメン神官団の庇護をうけながら、アメン神官団も儀式を遂行するためのミルラや神殿への寄進を受け巨大化できるとともに、ハトシェプストへ尽力していたのではないか。

以上の二つの理由をまとめると、一つ目は「プント国との交易」でありそれが、彼女が長期にわたって統治することの出来た理由である。古代エジプトでとても重宝されていたミルラという香料が採れる神の国、プントとの交易を第12王朝から見て約400年ぶりに復活させ、またそのプント(ミルラの庭園)をエジプト国内に造った功績が一番の大きな理由であると考えられる。二つ目は「アメン神官団をバックにいた事」である。アメン神官団は第18王朝では、国家神であるアメン神を祀っている神官たちであるだけではなく、王の代行として国の祭事を執り行う権限を持っていた。王の代行を任せられるほど強大な力をもっていた彼らを、バックにつけ支えられながら、長期にわたって統治をしたのではないだろうか。碑文でも、アメン神(アメン神官団)に関係するものたちを遺し、寄進するために神殿等を建てていることがわかっている。また、碑文からその神殿等はプント国との交易で得た特産品を用いて建設していることも気付く。プント国との交易は、それだけでも歴代のファラオたちをも成し遂げられなかったことさえある功績であるが、それだけではなくアメン神官団をも手中に治め、ア

² 彼らは一般にシリア・パレスチナ地方に起源を持つ雑多な人々の集団であったと考えられている。

何故ハトシェプストは 長期にわたって統治することが出来たのか

古川 春香

古代エジプト第18王朝第5代の女王、ハトシェプスト(前1479～1425年頃)は、古代エジプト史上数少ない女性のファラオである。女性がファラオとして即位した例は数例あるが、男性後継者がいなかった、子供がいなかった、死んでしまった、など仕方がなく王位を継いだものであると考えられる。

ハトシェプストは、夫であり先代ファラオのトトメス2世(前1492-1479年頃)の間には王女をもうけていたが、王子はいなかった。そのためトトメス2世の死後は、庶出のトトメス3世が王位を継承し、ハトシェプストが摂政となったのである。しかし彼女は、自らも「王」と称し、約20年間もエジプトの地を統治していた。何故ハトシェプストは長期にわたって統治することが出来たのであろうか。その理由は二つあると私は考えている。

まずは、この疑問に答えるべくハトシェプスト以前にもファラオとして君臨していた女性たちに焦点を当てて、彼女たちが何故王位を得たのか、統治期間はどれぐらいであったのかを先行研究を参考にまとめる。

そして、彼女がファラオとして遺した功績でもっとも偉大とされているのが、彼女の治世9年目に行われたプント国との交易である。これが一つ目の理由として考えている。

プントは「神の国」と呼ばれ、主に没薬(ミルラ)を求め交易をしていたと考えられる。ミルラは、神官たちが執り行う儀式やミイラ作りにも必要不可欠で、香料や薬としても使っており古代エジプトの人々によってはなくてはならない大切なものであった。

第5王朝、第6王朝、第11王朝、第12王朝のファラオたちもプントと交流を持っており、碑文にもそのこと遺している。しかし第13王朝から第18王朝までプントに関する記述の碑文が遺されていないことを見ても、どうやらプントへと赴けない、プントからもエジプトに来られない事態が発生していたのだらうと推測できる。その事態が何かまではわからないが¹、ハトシェプストは第12王朝から見て約400年も隔てられたプントとの交流を復活させた女王ということになる。

しかし、その重要なミルラが豊富にあるプントに簡単に行けるかと言えばそうではなく、行くためにはそれなりの資金や人材、期間、船の造船等が必要であるし、時期によって砂漠には「砂の民」と呼ばれる山賊のような敵も居たとされているため、プントへ行くのは一苦勞であったと言える。

このようにプントへ行き、交易を成功させることのできたファラオとして賛辞を送られているので、そのことだけ見てもプントとの交易を成功させたことが彼女の長期にわたっての統治に貢献していると言える。

しかし、プントとの交易を成功させたことだけが主ではなく、プントとの交易の背景にはアメン神官団の存在もある。それは彼女がファラオとして相応しい後継者であると主張するために父がアメン

¹ 第13王朝から第17王朝まで、ヒクソスの異民族支配が入るため、エジプト独自の文化や習慣が途絶えてしまったせいかもしれない。

することが推測された。ASD傾向との関連を調べるには縦断的なデータ集めが必要であると考えられる。次に、愛着スタイルの変数を挿入し、愛着スタイルの個人差の観点からASD傾向と自尊感情得点との関連について検討した。その結果、ASD傾向と、各愛着スタイル得点に依存して自尊感情得点の変容することが示された。このことから、ASD傾向が愛着スタイルの個人差に影響を及ぼし得る可能性が推測された。発達障害を持つ者の自尊感情形成において安定した愛着を持つことが重要であることが示唆された。

本研究の対象者は健常大学生(女子)であったため、学生の特徴が強く反映されていることが推測される。したがって、本研究の知見は、定型発達者を対象にしたASD傾向と自尊感情の観点において適用できるものであることに限界がある。今後は、対象者を男女比が一致するようにデータを集める。また、面接法を用いた質的な観点からもデータを収集することで、ASD傾向、自尊感情の関連について、より詳細な検討が出来ると考える。

修士論文題目及び内容の要旨

青年期における自閉症スペクトラム傾向と自尊感情について —愛着の関連から—

須藤 直子

近年、我が国においては、「発達障害者支援法」(厚生労働省, 2015)などにみられるように自閉症スペクトラム児・者への支援の必要性が教育・福祉・医療の現場で急務となっている。そこで、本研究では、精神的健康と愛着に焦点を当てて発達障害と自尊感情の関連性を検討することを目的とした。研究1(予備研究)では、青年期の学生が自覚している自閉症スペクトラム(Autistic Spectrum Disorder (s), 以下「ASD」とする)傾向を有する学生と「自尊感情」の関連を調べた。また「ASD傾向」と「自尊感情」に及ぼす影響を検討した。仙台市内の大学に在学する19歳から20歳の女子学生180名を調査対象に若林(2004)自閉症スペクトラム指数(AQ)日本語版 50項目・山本・松井・山成(1982)、自尊感情尺度 10項目・いじめ体験期に関する質問 3項目・中川・大坊(1985)一般健康調査票(GHQ) 28項目版・草田・岡堂(1993)家族機能測定尺度15項目・岡田(1999)友人関係尺度50項目で構成される質問紙を実施した。その結果、ASD傾向が高いほど自尊感情が低くなり、精神的健康状態が悪くなること明らかになった。研究1における仮説①(ASD傾向が高い人は、自尊感情が低い。)②(ASD傾向が高い人は、精神的健康を損なっている。)は支持された。一方、研究1では家族機能との関連がないことからASD傾向は先天的な特徴であり、その特徴を有する者が自尊感情や精神的健康を低下させやすいことが推測された。診断の有無に関わらず、ASD傾向者には適切な支援や配慮が重要である事が示唆された。

研究2(本研究)では研究1の結果と比較して、各得点の状況による変化について検討することを第1の目的とした。またASD傾向と自尊感情の関連について、より内省に注目するため、愛着スタイルの観点から研究することを第2の目的とした。仙台市内の大学に在学する18歳から21歳の女子学生212名を調査対象に若林(2004)自閉症スペクトラム指数(AQ)日本語版 50項目・山本・松井・山成(1982)、自尊感情尺度 10項目・中川・大坊(1985)一般健康調査票(GHQ) 28項目版・戸田(1988)内的作業モデル尺度18項目で構成される質問紙を実施した。その結果、ASD傾向と自尊感情の関連について、ASD傾向が高くなるにつれて自尊感情得点が低くなることが分かった。ASD傾向の高い者(AQ \geq 26)の方が、ASD傾向の低い者(AQ \leq 25)よりも自尊感情得点が低くなった。特に、下位因子の社会スキル・コミュニケーションとの関連が明らかになった。研究1と一致する結果であった。この結果より、他者との関係を築く際に様々な困難さを抱く結果になるため自尊感情低下との影響が大きいと推測された。診断の有無に関わらず、ASD傾向者には適切な支援や配慮が重要である事が示唆された。また、自尊感情とGHQの関連について、自尊感情得点が高くなるにつれてGHQの得点が低くなる(精神的に良好な状態)ことが分かった。この結果より、自尊感情を高めることは日常の精神的健康の回復を支えることが重要であると考えられる。一方、研究1ではASD傾向とGHQの関連が見られていたが、本研究ではほぼ見られなかった。これより、GHQ得点は一定の時期の個人状態に影響

高い学生ほど抑うつ傾向が低いことが明らかになり、開示の内容によって抑うつとの関連が異なることが示唆された。本研究の限界として、性的側面の開示が、震災の影響を受けての抑うつに関連しているかについては疑問が残る。今後の課題として、自己開示の内容についてさらなる検討が必要であり、適切な尺度を用い、再度調査を行うことが必要であると考え。今後、継続的にデータを取ることで、自己開示が抑うつに及ぼす影響について説明することができるのではないかと考えられる。

PTSD／抑うつ傾向と自己開示との関連の検討

—東日本大震災から4年半時点での被災大学生を対象として—

浅野 尋

現在、東日本大震災から5年が経とうとしている。しかし、余震や集中豪雨などの自然災害などが続き、被災者は安心を得ることができず、日々生活のストレスを受け続けている状況にある。藤森(1998)は、コミュニティ全体を崩壊させ、生命の危機や家族の死をとまなう深刻な喪失体験をもたらす中心的災害は、被災者の精神健康に長期的影響を及ぼすと述べている。阪神・淡路大震災(1995)の例でも加藤・岩井(2000)が、約4年が経った時点で被災者のPTSD診断を受ける人が1割弱認められたことを明らかにしている。今回の震災以降もPTSDや抑うつ、その診断基準に満たないまでも、援助を受けず、抱え込んでしまう被災者の存在があり、例にもれず東日本大震災に対する支援も長期的なものが必要であることが予想される。東日本大震災による被害は非常に広範囲に及んでおり、被害や被災体験は個人によって異なる。このことが被災者の悩みを話せない要因の一つとなっていると考えられる。さらにこれからは被害の差だけではなく、震災からの時間経過から派生する問題も予想される。時間経過の中で被災者と非被災者間、また被災者同士の間であっても生活や環境に格差が生じ、今後ますます被災者が声をあげにくくなっていくことが考えられる。

声をあげない被災者の問題は顕著化しにくい。また多くの被災者が自身のトラウマを特定しがたく、ストレス反応を保有しているにもかかわらずその自覚が難しい現実がある(小谷, 2014)。そのような状況下では、専門家による支援だけではなくそれぞれが抱える心理的問題を、それぞれ身を置くコミュニティや対人関係の中で対処していくことも求められる。本研究はまず4年半が経過した時点での現在の大学生のPTSD・抑うつ割合を明らかにするとともに日常の対人関係の中でどれほど対処できているかの指標として、「自己開示」を取り上げ、「PTSD傾向」「抑うつ傾向」との関連について検討することとした。

IES-Rによって測定されたPTSDの結果は全体で92%が低群、8%が高群であることが明らかになり、171名中、13名がPTSDの疑いがあることがわかった。

次に、BDI-IIによって測定された抑うつの結果は極軽度60%、軽度22%、中度16%、重度2%であった。先行研究での大学生の抑うつ得点平均値、また分布は、西山・坂井(2009)、山崎・村松(2014)の過去比較の高い値を報告している先行研究とほぼ一致していた。しかし、本研究の沿岸部群と内陸部/被害なし群の抑うつ得点の比較では、内陸/被害なし群と沿岸部群では有意な差が見られ、沿岸部群での抑うつ傾向が高いことが明らかになった。沿岸部群の得点分布は中度・重度を合わせると32%となり、先行研究より約10%～15%ほど高い得点を示した。内陸部/被害なし群との比較では、約3倍もの差があることが示された。

日常で行われ自己開示とPTSD傾向との関連については直接の関与は薄いものであることが示唆された。抑うつ傾向との関連は自己開示の「性的側面」でのみ確認され、また性的側面を開示する程度が

宮城学院女子大学大学院人文学会会則

第一章 名称及び事務所

第一条 本会は、宮城学院女子大学大学院人文学会と称する。

第二条 本会は、事務所を宮城学院女子大学大学院事務室内に置く。

第二章 目的及び事業

第三条 本会は、人文科学に関する研究を推進し、会員の知見を高めるとともに、会員相互の親睦を図ることを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 各種研究会、研究発表大会及び講演会等の開催
- 2 機関誌、会報及び会員名簿等の発行
- 3 他の研究団体・機関等の連絡及び協力
- 4 その他、本会の目的を達成するために必要と認められる事業

第三章 会員及び組織

第五条 本会は、次の一般会員及び特別会員をもって組織する。

- 1 一般会員
 - (1) 本学大学院人文科学研究科に学生として在籍中の者及び同大学院を修了した者
 - (2) 本学大学院に研究生又は科目等履修生として在籍中の者及び在籍したことのある者
 - (3) 本学大学院を中途退学した者
 - (4) 本学学芸学部を卒業し、他学大学院に学生として在籍中の者及び他学大学院を修了した者

2 特別会員

- (1) 本学大学院人文科学研究科に専任の教員として勤務している者及び勤務したことのある者
- (2) 本学大学院に兼任又は併任の教員として勤務している者及び勤務したことのある者
- (3) 前号の規定する以外の者の有志で、本会則第七条に規定する委員会の推薦により、総会において承認された者。ただし、本号に該当する会員は、本会則第七条及び第八条の規定に係る権利をもたない。

第四章 会員の権利及び義務

第六条 会員は、次の権利及び義務を有する。

- 1 機関誌、会報等の配付及び本会が開催する諸事業の案内を受け、随時、研究成果を発表することができる。
- 2 会費は、毎会計年度内の指定された日までに納入しなければならぬ。
- 3 三年間継続して会費を滞納した場合には、会員の資格を失う。

第五章 役員及び任務

第七条 本会に、次の役員を置き、委員会を組織して、事務及び運営に当たる。

- 1 会長 一名
会長は、本会を代表し、会務を統括する。

2 委員 若干名

委員は、委員会を組織して会長を補佐し、本会の事業を遂行するために、会務の運営と執行に当たる。

3 監査委員 二名

監査委員は、本会の会計を監査する。監査は、毎会計年度末に行う。ただし、必要に応じて、随時、行うことができる。

第六章 役員の選任及び任期

第八条 本会の役員は、次の方法によつて選任する。

1 会長には、本学大学院人文科学研究科長を推戴する。

2 委員は、一般会員及び特別会員の中から推薦又は選挙によつて選任し、総会の議を経て、会長から委嘱する。

3 委員会の委員長及び副委員長は、委員の互選によつて選任する。

4 監査委員は、委員の中から互選によつて選任し、総会の議を経て会長から委嘱する。

第九条 役員の任期は、一年とする。ただし、再任を妨げない。

第七章 会議等の開催及び議決

第十条 本会は、毎年一回定期総会を開き、会務について報告し、審議する。総会は、本会会員の二分の一以上の出席を持つて成立する。ただし、委任状を含むものとする。議決には、出席者の三分の二以上の賛成を必要とする。

第十一条 会長は、会員の五分の一以上の要請又は委員会の議に基づいて、臨時総会を招集することができる。

第十二条 委員会は、随時、開くものとする。

第十三条 研究発表大会は、総会の日程に併せて開催するものとする。

る。

第八章 会計

第十四条 本会の経費は、会費その他の収入をもつて充てる。

第十五条 本会の会費は、年額千円とし、四月末日までに納入するものとする。ただし、臨時に要する費用は、その都度、徴収することがある。

第十六条 本会の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。

第十七条 本会の会計並びに監査に関する報告は、毎年一回、総会において行う。

第九章 会則の変更

第十八条 本会則の変更は、委員会の議を経て、総会の承認を得るものとする。

附則 本会則は、一九九八年十二月二十三日から施行する。

宮城学院女子大学大学院人文学会誌

第十八号

二〇一七年三月三十一日発行

編集及び
発行人

宮城学院女子大学大学院

〒九八一―八五五七

仙台市青葉区桜ヶ丘九―一―一

人文学会 田島 優

☎(〇三三)二七九―五八三四

印刷所

株式会社 東 誠 社

仙台市宮城野区岡田西町一―五五

